愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第38集

岩倉城遺跡

1992

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター

岩倉城遺跡周辺空中写真(1990年１月23日撮影)

岩倉城遺跡周辺空中写真(昭和21年米軍撮影)

序

名鉄犬山線岩倉駅の南東400mに岩倉古城址碑が建っております。市街地の中にあってかつての面影を辿ることはできません。しかし、この城は今を去ること500年の昔、80年間にわたって清洲城にいた織田氏と尾張を分割統治していた有力な城でありまして、永禄2年（1559）織田信長に滅ぼされて以来、その姿は幻のままでありました。

このたび本丸跡を東西に通りぬけるように愛知県土木部によって県道萩原・多気線の建設が計画されるに至り、岩倉城関係の埋蔵文化財の調査が必要となりました。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは、県教育委員会を通じ、県土木部より委託を受け、昭和62年度から平成2年度にかけて発掘調査を実施して参りました。

もとより県道建設の事前調査でありますので、広い城郭のごく一部を調査したに過ぎませんが、幅20mをこえる大規模な内堀を始め、外堀を発見したばかりか、五条川の東250mまでに3重の堀が巡ることを確認し、予想をはるかに上回る規模の城であることがわかりました。本書は、こうした成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されると共に、埋蔵文化財への理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、関係各機関および関係者からの御指導と御配慮を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成4年3月

財団法人　愛知県埋蔵文化財センター
理事長　高木　鐘三

例　言

1　本書は、愛知県岩倉市下本町から大市場町にかけて所在する岩倉城遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は県道萩原・多気線建設に伴う事前調査で、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが昭和62年度～平成２年度に実施した。調査面積は、総計10,470㎡。

3　調査担当者は下記の通りである。

昭和62年度…平田睦美（主事、現松蔭高校）、松原隆治（主事）

昭和63年度…平田睦美（主査）、松原隆治、服部信博（主事）

平成元年度…山仲廣司（課長補佐、現西春町立五条小学校）、服部信博、金子健一（嘱託員）

平成２年度…日比　宰（主査、現稲沢市立稲沢東小学校）、小塚俊夫（主事、現七宝町立七宝中学）、服部信博

4　調査区の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。

5　調査にあたっては、次の各関係機関のご協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県一宮土木事務所、岩倉市教育委員会

6　本書の執筆分担は、以下の通りであり、文責については各文末に記した。なお編集は松原が担当した。

Ⅰ、Ⅱ－１・６・７、Ⅲ－５・６、Ⅴ…松原隆治（調査研究員）

Ⅱ－２～５、Ⅲ－１～４、Ⅴ　　…服部信博（調査研究員）

Ⅲ－３　SZ1301…赤塚次郎（調査研究員）

Ⅳ－１・４…森　勇一（課長補佐）

Ⅳ－２　　…永草康次（調査研究補助員）

Ⅳ－３　　…パリノ・サーヴェイ株式会社

7　本書の執筆にあたっては以下の各氏のご指導・ご協力を得た。

赤羽一郎・浅野清春・足立順司・井上喜久男・岩中淳之・岩野見司・内堀信雄・江崎　武
小野正敏・加納俊介・柴垣勇夫・滝　喜義・千田嘉博・土本典生・土山公仁・楢崎彰一
服部英雄・日野幸治・藤澤良祐

8　調査記録及び遺物は、（財）愛知県埋蔵文化財センターが保管する。

目　次

Ⅰ　調査の概要

1　遺跡の立地と沿革……1

2　調査に至る経緯……5

3　調査の工程……5

4　調査成果の概要……6

Ⅱ　遺構の概要

1　基本層序……8

2　Ⅰ期の遺構……10

3　Ⅱ期の遺構……14

4　Ⅲ期の遺構……21

5　Ⅳ期の遺構……31

6　Ⅴ期の遺構……34

7　Ⅵ期の遺構……37

Ⅲ　遺物の概要

1　Ⅰ期の遺物……46

2　Ⅱ期の遺物……51

3　Ⅲ期の遺物……76

4　Ⅳ期の遺物……84

5　Ⅴ期の遺物……85

6　Ⅵ期の遺物……86

Ⅳ　自然科学的分析

1　珪藻分析による縄文時代晩期頃の古環境……116

2　岩倉城遺跡出土駿河系土器の胎土分析……118

3　岩倉城遺跡から出土した木製品の樹種……119

4　岩倉城遺跡より発見された地震痕について……127

Ⅴ　まとめ……130

付表

1　遺構表……132

2　遺物表……134

図版目次

図版１　遺構図(1)
図版２　遺構図(2)
図版３　Ⅰ期の遺構
図版４　II期の遺構、遺物出土状態(1)
図版５　II期の遺構、遺物出土状態(2)
図版６　II期の遺構、遺物出土状態(3)
図版７　II期の遺物出土状態
図版８　III期の遺構、遺物出土状態(1)
図版９　III期の遺構、遺物出土状態(2)
図版10　III期の遺構、遺物出土状態(3)
図版11　III期の遺構(4)
図版12　III期の遺構(5)
図版13　III期の遺構、遺物出土状態(6)
図版14　Ⅳ期の遺構、遺物出土状態
図版15　Ⅴ期の遺構(1)
図版16　Ⅴ期の遺構(2)
図版17　Ⅴ期の遺構(3)
図版18　VI期の遺構(1)
図版19　VI期の遺構(2)
図版20　VI期の遺構(3)
図版21　VI期の遺構(4)
図版22　VI期の遺構(5)
図版23　VI期の遺物出土状態(1)
図版24　VI期の遺物出土状態(2)
図版25　VI期の遺物出土状態(3)
図版26　II期の遺物(1)
図版27　II期の遺物(2)
図版28　II期の遺物(3)
図版29　III期の遺物(1)
図版30　III期の遺物(2)
図版31　Ⅴ期の遺物、VI期の遺物(1)
図版32　VI期の遺物(2)
図版33　VI期の遺物(3)
図版34　VI期の遺物(4)
図版35　VI期の遺物(5)
図版36　VI期の遺物(6)
図版37　岩倉城跡関係絵図

挿図目次

第１図　遺跡の位置……1
第２図　尾張の主要な城跡……1
第３図　岩倉城遺跡と周辺の遺跡……2
第４図　調査区位置図……4
第５図　岩倉城遺跡断面模式図(1)……8
第６図　岩倉城遺跡断面模式図(2)……9
第７図　Ⅰ期縄文晩期遺構配置図 ……10
第８図　SB1002実測図……11
第９図　Ⅰ期弥生中期の遺構配置図 ……12
第10図　II期主要遺構配置図(1) ……14
第11図　II期主要遺構配置図(2) ……15
第12図　SB1201～1208実測図……16
第13図　SB1209・1210実測図……18
第14図　SX1201遺物出土位置図……19
第15図　SZ1201実測図 ……20
第16図　III期主要遺構配置図 ……21
第17図　SZ1301実測図 ……22
第18図　SZ1304実測図 ……22
第19図　SZ13022、1303実測図 ……23
第20図　集石墓群層位模式図 ……24
第21図　集石墓群主体部配置図 ……25
第22図　集石墓群の築造段階 ……27
第23図　集石墓群主体部実測図 ……29
第24図　集石墓群遺構全体図 ……30

第25図　Ⅳ期主要遺構配置図 ……31
第26図　SX1501実測図……32
第27図　SX1501位置図……32
第28図　五条川西岸Ⅴ期遺構位置図 ……34
第29図　五条川東岸Ⅴ期遺構位置図 ……35
第30図　SE04実測図……35
第31図　五条川東岸Ⅴ期主要遺構位置図 ……36
第32図　五条川西岸堀位置図 ……36
第33図　五条川東岸堀位置図 ……37
第34図　SD01断面図……39
第35図　SD02断面図……39
第36図　断面図実測位置図(1) ……39
第37図　SD03断面図……40
第38図　SD04断面図……40
第39図　土橋断面図 ……40
第40図　断面図実測位置図(2) ……40
第41図　SD06断面図……42
第42図　断面図実測位置図(3) ……42
第43図　SD08断面図……43
第44図　SD07断面図……43
第45図　断面図実測位置図(4) ……44
第46図　SD09断面図……45
第47図　SD10断面図……45
第48図　90A区、B区Ⅵ期遺構位置図 ……45
第49図　Ⅰ期縄文晩期の遺物 ……47
第50図　Ⅰ期弥生中期の遺物(1) ……49
第51図　Ⅰ期弥生中期の遺物(2) ……50
第52図　器種分類図(1) ……51
第53図　器種分類図(2) ……52
第54図　器種分類図(3) ……53
第55図　SB1201出土遺物……55
第56図　SB1204出土遺物(1)……56
第57図　SB1204出土遺物(2)……57
第58図　SB1206出土遺物……58
第59図　Ⅱ期出土遺物 ……59
第60図　SD1201出土遺物……60
第61図　SX1201出土遺物……61
第62図　SK1204出土遺物……63
第63図　SZ1201出土遺物 ……64
第64図　A地区包含層出土遺物 ……68
第65図　B地区包含層出土遺物(1) ……69
第66図　B地区包含層出土遺物(2) ……70
第67図　B地区包含層出土遺物(3) ……71
第68図　B地区包含層出土遺物(4) ……72
第69図　B地区包含層出土遺物(5) ……73
第70図　B地区包含層出土遺物(6) ……74
第71図　B、C地区包含層出土遺物……75
第72図　SZ1301出土遺物(1)……76
第73図　SZ1301出土遺物(2)……77
第74図　SZ1301出土遺物(3)……78
第75図　SX1308出土遺物……79
第76図　SZ1302出土遺物 ……80
第77図　SZ1303・1304・包含層出土遺物 ……82
第78図　89Eb・F区包含層出土遺物 ……83
第79図　Ⅳ期の遺物 ……84
第80図　器種分類（Ⅵ期の遺物－１） ……85
第81図　器種分類（Ⅵ期の遺物－２） ……86
第82図　器種分類（Ⅵ期の遺物－３） ……87
第83図　器種分類（Ⅵ期の遺物－４） ……88
第84図　Ⅴ期の遺物(1) ……91
第85図　Ⅴ期の遺物(2) ……92
第86図　Ⅵ期の遺物(1) ……93
第87図　Ⅵ期の遺物(2) ……94
第88図　Ⅵ期の遺物(3) ……95
第89図　Ⅵ期の遺物(4) ……96
第90図　Ⅵ期の遺物(5) ……97
第91図　Ⅵ期の遺物(6) ……98
第92図　Ⅵ期の遺物(7) ……99
第93図　Ⅵ期の遺物(8)……100
第94図　Ⅵ期の遺物(9)……101
第95図　Ⅵ期の遺物(10)……102
第96図　Ⅵ期の遺物(11)……103

第97図　VI期の遺物(12)……104
第98図　呪術関係木製品……108
第99図　木製品(1)……109
第100図　木製品(2) ……110
第101図　木製品(3) ……111
第102図　木製品(4) ……112
第103図　木製品(5) ……113
第104図　木製品(6) ……114
第105図　木製品・石製品 ……115
第106図　土壌サンプル採取位置図 ……116
第107図　岩倉城遺跡産珪藻顕微鏡写真 ……117
第108図　主要造岩鉱物三角ダイヤグラム …118
第109図　材の顕微鏡写真(1) ……124
第110図　材の顕微鏡写真(2) ……125
第111図　材の顕微鏡写真(3) ……126
第112図　SD08断面の断層スケッチ……129

表目次

第１表　調査の工程……6
第２表　珪藻出現数……116
第３表　木製品の樹種……123
第４表　材の顕微鏡写真のネガ説明……128

〈調査協力者〉

発掘調査

寺沢なつ江（発掘調査補助員）　浅野弘一　斉木　健
佐々美子　野口めぐみ　浅田佐智子　浅田たま　浅田照子
浅田文子　井上千代　岩崎美枝子　川松幸子　木村誠子
小林しげ子　小林俊子　佐藤トモ　長戸貞子　野田みき子
服部貞子　原田孝子　平野あつ子　福岡澄江　船橋諄子
星野初恵　真野幸子　真野秀子　真野美代子　宮田あさ
森　千代子　余呉留美子　大野和子　河野正一　佐藤ふき子
杉浦利子　田中温子　中山道子　堀尾美恵　三輪千秋
山内四女　横井正一　横井ハツエ　吉川みや子　安藤民子
伊賀　定　伊藤香代　大岩涼子　小川福代　加藤真弓
木村末子　酒向洋子　田岡百合江　冨田尚弘　長谷川玲子
堀尾光代　武藤千代子　村瀬なつ子　山川美智子　山内きみえ
山内　尚　山内ゆき子　山口久光　国立智美　大矢　頭

整理作業

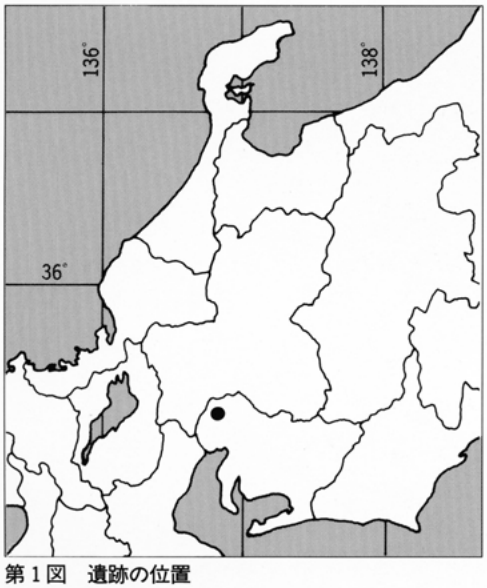
岡田智子（調査研究補助員）　加藤徳子　多田富代
玉作美智子　服部智子　山口妙子　加藤明美　鈴木登貴子
竹川裕見子　渡辺たかみ　山川和子　牛田長子

Ⅰ　調査の概要

1　遺跡の立地と沿革

位　　置　岩倉城跡（岩倉市指定史跡。記念物番号1105。東経136°52′50″、北緯35°16′20″）は、愛知県岩倉市下本町に所在し、南流する五条川の右岸に発達した標高８～10ｍの自然堤防上に立地する。現在、字城跡の本丸跡と伝承される地点に石碑が建てられている。城が立地した自然堤防にはノンベ遺跡、大地遺跡、薬師堂廃寺など縄文時代から中世にかけての多くの遺跡が立地している。五条川東岸の自然堤防上には、真光寺遺跡、曽野遺跡など弥生時代の遺跡が多い。

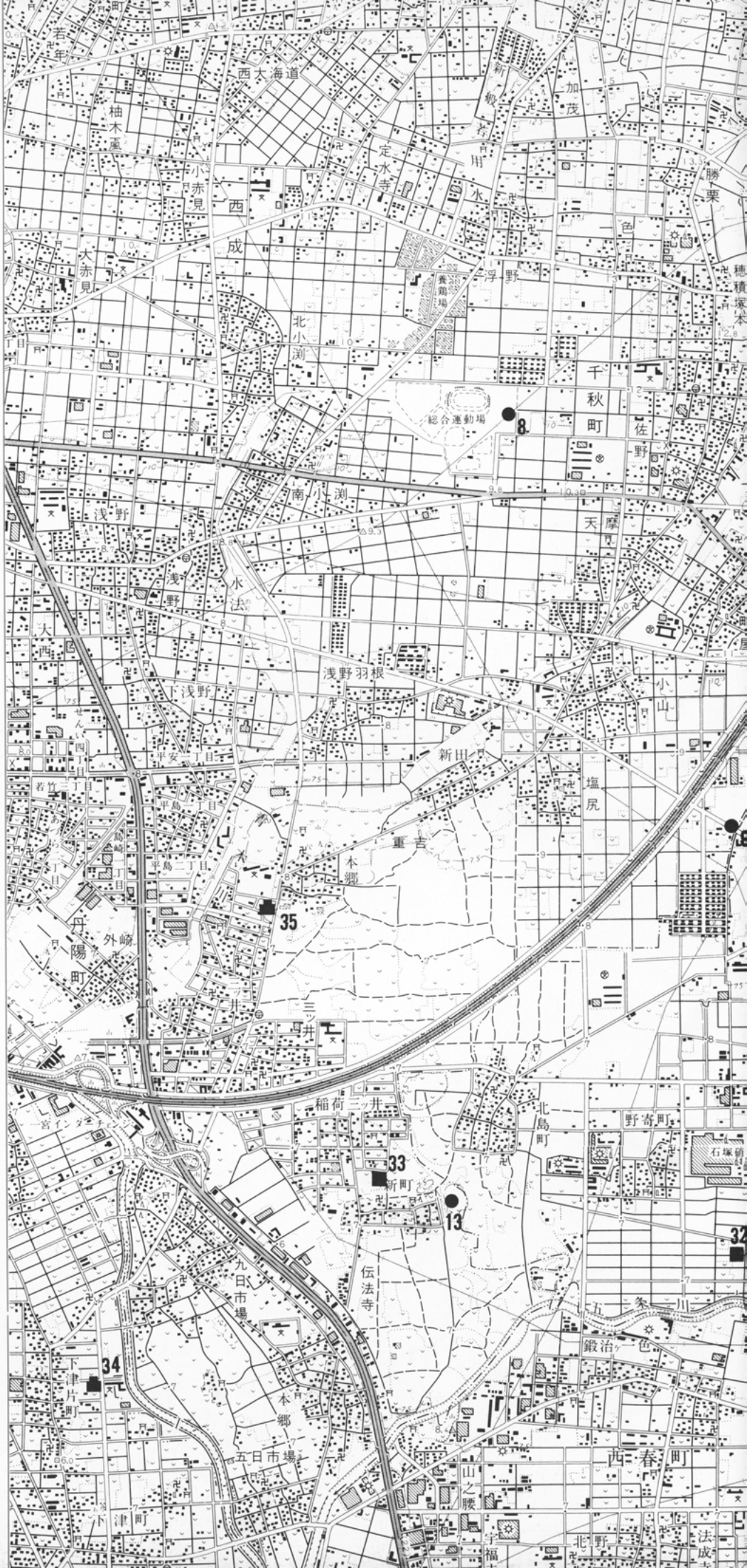
歴　　史　ここでは文献資料によって岩倉城が存在した時代と岩倉城の姿について触れておきたい。室町幕府８代将軍足利義政が政治を顧みなかったことに端を発した応仁の乱によって、室町幕府の権威は大きく失墜し、戦国時代に突入した。越前国守護であった斯波氏が15世紀始め尾張の国の守護になったのにしたがって、家臣であった織田氏は尾張の下津城（稲



第１図　遺跡の位置

第２図　尾張の主要な城跡

1　岩倉城遺跡
2　織田井戸遺跡
3　総濠遺跡
4　北替地遺跡
5　八剣遺跡
6　ノンベ遺跡
7　西町畑遺跡
8　佐野遺跡
9　蕪池遺跡
10　大地遺跡
11　東町畑遺跡
12　曽野遺跡
13　元屋敷遺跡
14　宇都宮神社古墳
15　甲屋敷古墳
16　浄音寺古墳
17　道神塚古墳
18　富士塚古墳
19　神福神社古墳
20　曽本二子山古墳
21　七面山古墳
22　新溝古墳・
　　新溝神社銅鐸出土地
23　西北出遺跡
24　神宮寺古墳
25　西出古墳
26　高畑古墳
27　小森遺跡
28　石塚遺跡
29　長福寺廃寺
30　弥勒寺廃寺
31　御土井廃寺
32　薬師堂廃寺
33　伝法寺廃寺
34　下津城跡
35　重吉城跡
36　小折城跡
37　井上城跡
38　小牧山城跡



第3図　岩倉城遺跡と周辺の遺跡

（この図は、国土地理院発行
1/25,000の地形図を使用した。）

南市
豊田
秋田
入鹿出新田
東海理化電機工場
曽本町
三ッ渕原新田
三ッ星ベルト工場
一宮市
名神高速道路
西之島
岩倉市
小木上
小木中
小木下
小針
御屋敷
池新田
藤島町
向江
師勝町
熊之庄
居屋敷
青山
西春町
自由学院短大
三菱重工航空機製作所

沢市下津町）において、管領の斯波氏にかわって守護代として尾張を統治していた。応仁の乱では斯波氏の跡継ぎ問題も絡み、斯波氏が二手に別れて争ったため、その家臣である織田氏も別れて戦った。下津城には織田敏広がいたが、1476年、清洲城主の織田敏定に攻められて焼失した。両者の戦いはその後も続いたが、1479年和議が成立し、織田敏広は岩倉を本拠地として葉栗・丹羽・中島・春日井の尾張上四郡を治め、清洲の織田敏定が海西・愛智の二郡を治めるという分割統治の時代になった。岩倉城の築城年代は記録に残っていないが、和議の頃には城があったことはまず誤り無いであろう。織田敏広の後、城主は寛広・敏信・信安・信賢と変り、1559年織田信長に攻め滅ぼされた。これによって信長は尾張統一を成し遂げ、翌年の桶狭間の合戦を経て、天下統一へ乗り出すことになる。下津城は岩倉城の西南西4.5km、清洲城は南南西７km、小牧城は北東４kmの位置に所在する。

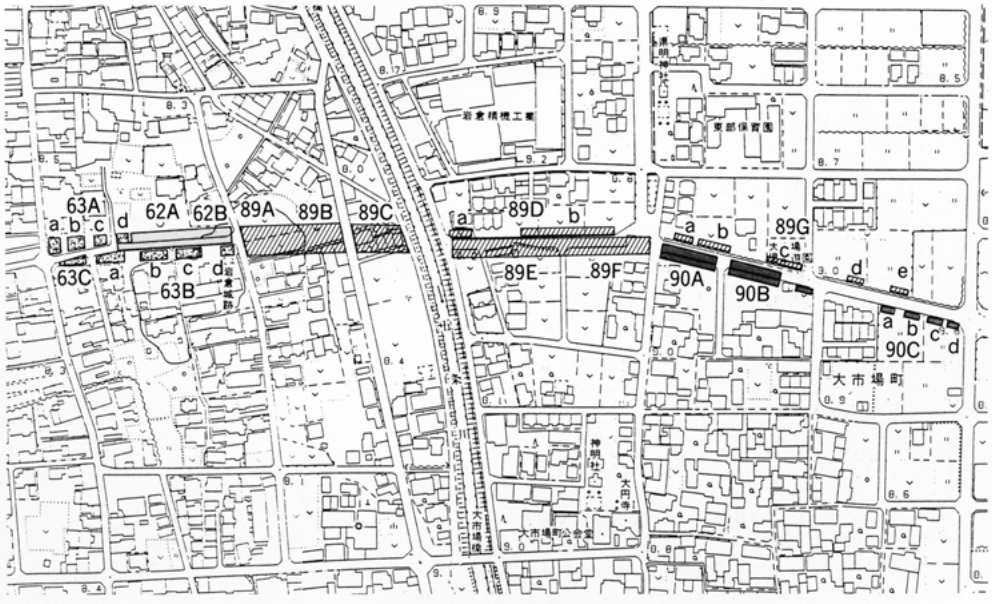
分割統治

1559年落城

岩倉城の姿については明確にはわかっていなかった。ただ、『信長公記』には周辺に城下町が形成されていたことが記されており、『岩倉市史』には『前野家文書』による岩倉城についての具体的記述の一部が掲載され、簡単な縄張り図も付け加えられていた。発掘調査の直前には『前野家文書』の現代語訳した『武功夜話』が出版されるにおよび、厳密な資料の検討も行われておらず記述の信頼性に欠けるという指摘もあるものの、ある意味では発掘調査は、『武功夜話』の記述…城は五条川から水を引き入れた二重の堀に囲まれ、追手門前には高い土塁が築かれた堅固な守りの構造であり、城の内部は広大で、本丸・二の丸・馬場などがあり、望楼を備えた館を中心として17棟もの建物が配置されていた…を検証することになった。

『武功夜話』

※『武功夜話』…吉田蒼生雄訳、新人物往来社、昭和62年。



第４図　調査区位置図

2　調査に至る経過

愛知県土木部一宮土木事務所では名鉄犬山線と岩倉市を通過する自動車とによる交通渋滞解消のため、一宮市と豊山町を結ぶ県道萩原・多気線建設を計画した。しかし、この予定ルートは岩倉城本丸推定地を東西に抜けるため、工事に先立ち、その取扱いについて県土木事務所と県教育委員会、岩倉市教育委員会との間で協議がもたれた。教育委員会では、本丸跡との言い伝えの真偽を確認し、その範囲を特定するためにも、事前の試掘調査が不可欠であると考え、県教育委員会の指導の下、市教育委員会が昭和51年に４か所で試掘坑を設定し、調査を行った。その結果、弥生時代から江戸時代に掛けての遺物が出土し、複合遺跡であることが推定されるにいたった。

その後、県道建設に伴う用地買収が遅々として進まなかったが、昭和60年代に入ると著しい進展が見られ、発掘調査が急務になった。昭和62年７月には県教育委員会と市教育委員会それに（財）愛知県埋蔵文化財センターによって遺跡の西側範囲を確定するために試掘調査を実施した。(財）愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査は昭和63年１月から開始した。なお、市教育委員会は昭和62年10月に石碑のすぐ北側地点で30㎡の調査を実施した。土師質皿が多数出土し、下層では弥生時代の竪穴住居跡の一部も確認した。

3　調査の工程

当初計画された五条川の西の下本町地内は、仮設道路を作り生活道路を確保する必要から調査区を細分せねばならず、さらには水道管の埋設位置の情報がまったく無いことや太いガス管があることと合わせかなりの困難がともなった。

昭和63年６月には、五条川左岸の大市場町地内においても試掘調査を実施し、遺跡の範囲が五条川東岸にも広がることを確認した。最終的には平成３年３月までに合計10,470㎡の発掘調査を完了した。

発掘調査　調査は、各区ともバックホウによる表土掘削から開始したが、62Ａ・Ｂ区の防火水槽跡や道路建設に先立つ転居家屋の廃材投棄坑など現代の攪乱がひどく、遺構の遺存状態はかなり悪かった。しかし大規模な溝（堀）が確認でき城の縄張りを考える有力な手がかりを捉えることができた。なお内堀・外堀ともに明治時代にかなり大規模に埋められ、水田化したことを知ることができた。

89Ａ・Ｂ区より東は総じて遺存状態は良好であった。

かつての試掘調査の成果により、遺跡が複合遺跡であることが予想できていたので、基本的にはほとんどの調査区で二面調査を実施した。

記録の作成　遺構の実測は上面・下面共に、国土座標による基準杭を設定し、上面（戦国期）のみヘリコプターによる空中写真測量を実施し、1/50の基本平面図を作成した。ただし89Ｃ・89Ｆ区はクレーンによる写真測量になった。必要に応じて1/20で土層断面図、

1/10で遺物出土状態図を作成した。下面は、1/20で実測した。

整理作業　出土遺物の整理は、現地での調査と並行して洗浄・出土地点の注記などの基礎的整理作業を実施した。また昭和62～平成２年度の『年報』や『埋蔵文化財情報』に、調査の概要や研究成果を報告すると共に、報告書作成のための整理作業を実施した。

成果の公表　周辺住民や市民を対象に62Ｂ区で昭和63年３月５日、89ＡＢ区で平成２年１月20日、現地説明会を実施し、それぞれ300名、350名の参加があった。また岩倉市教育委員会の依頼で平成３年２月23日に発掘調査成果報告会と遺物展示会を岩倉市立図書館でで開催し、200名の参加者があった。さらに1989年～1991年のそれぞれ１月１日号（No.427、451、475）の岩倉市広報に発掘調査の概要を公表した。

4　発掘調査の成果の概要

発掘調査の結果、本丸跡に建つ石碑の北側から西は道路建設工事に伴う建物の転居による攪乱が激しかったが、それ以外はおおむね遺構の残り具合は良好であった。

検出した遺構は、共伴した遺物の年代観から、Ⅰ期（縄文時代晩期から弥生時代中期）、Ⅱ期（弥生時代後期から古墳時代前期）、Ⅲ期（古墳時代後期）、Ⅳ期（奈良時代から平安時代）、Ⅴ期（鎌倉時代から室町時代）、Ⅵ期（戦国時代）に区分される。

Ⅰ期は縄文時代晩期と弥生時代中期に細分でき、縄文時代晩期の遺構は、五条川東岸の

年度	調査区	面積＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
昭和62年度	62Ａ	760㎡										■		
	62Ｂ												■	■
昭和63年度	63Ａ	470㎡		■										
	63Ｂ					■	■	■	■					
	63Ｃ								■					
平成元年度	89Ａ	5240㎡								■	■	■		
	89Ｂ									■	■	■		
	89Ｃ			■	■	■								
	89Ｄ			■										
	89Ｅ					■	■	■	■					
	89Ｆ								■	■				
	89Ｇ												■	
平成２年度	90Ａ	3000㎡									■	■		
	90Ｂ				■	■	■	■	■	■	■			
	90Ｃ													

第１表　調査の工程

90Ｂ区で検出した３棟の竪穴住居跡と土坑である。おもな出土遺物は縄文土器である。弥生時代中期の遺構は五条川東岸の89Ｇ区から90Ｃ区に掛けて出土した竪穴住居や溝、土坑であり、中期中葉の土器が見つかった。

Ⅱ期は五条川西岸に居住し、東岸に墓を営んだ時代である。西岸の竪穴住居からは弥生時代後期の土器が出土した。五条川の東の岸辺では祭祀跡を推測させる土器の集積が確認された。

Ⅲ期には五条川両岸で墓が築かれた。西岸では一辺25m以上の方墳が１基、東岸では３基の方墳が確認できた。おもな遺物としては円筒埴輪などがある。

Ⅳ期の遺構は比較的散在しており、奈良時代と平安時代末期の溝や土坑があった。

Ⅴ期の遺構には鎌倉時代の溝、井戸などがある。特に89下区のＳＥ04はかなり遺存状態が良く、また多数の山茶椀も出土した。

Ⅵ期の遺構には堀、溝、建物、土坑、柱穴などがある。概して堀の中からは遺物の出土は少なかったが、石碑そばの62ＡＢ、63Ｂ、89ＡＢ区からは人々の居住域近くである事を物語るように、特に区画溝からの土師質皿や陶器、木製品が多かった。

当初は石碑のある五条川右岸のみに岩倉城が埋没していると推定していたが、調査の進展に伴ない岩倉城が五条川左岸にも広がり、予想を越える規模の城で、尾張を分割統治していた人物が住むにふさわしいことが明らかになった。

さらに下層の遺構も豊富で、古くから五条川の自然堤防上に連綿と人々が住んでいたことがわかり、五条川流域では遺跡分布が知られないところにおいても、注意を払う必要があることを認識させた。（松原隆治）

II　遺構

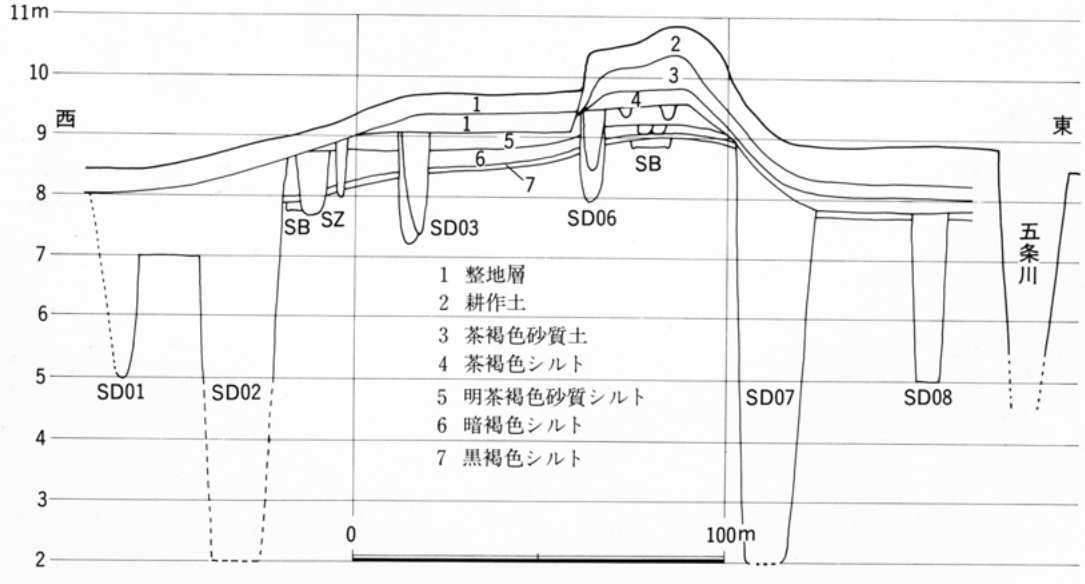
1　層序

基本層序　発掘調査地点の基本層序は、上から、表土（道路の整地層もしくは耕作土：Ⅰ層）、褐色砂質土（Ⅱ層）と続き、この下面が戦国時代の遺構検出面となる。検出面は、五条川右岸の89ＡＢ区の最高所で標高9.5mである以外は、おおむね標高９ｍである。さらに茶褐色シルト（Ⅲ層：中世）、淡褐色砂質シルト（Ⅳ層：古墳時代）、褐色砂質シルト（Ⅴ層：弥生時代）と推移し、この下に部分的ではあるが、灰褐色砂質シルト層（Ⅵ層：無遺物層）を挟み、黒灰色砂質シルト（Ⅶ層：縄文時代晩期）があり、基盤層の青灰色砂層に達する。

戦国時代の遺構や遺物は調査区全面に渡って広がりを示していたことから、調査地域付近では、当時の五条川の流れは、現在とほぼ同じ位置であったと考えられる。しかし、城の

旧五条川　北東部分では、現在は五条川がほぼ真直ぐに南流するが、これは昭和10年代の河川改修工事によるもの。それ以前は地図でも明らかなように大きく西へ弧状に蛇行しており、明治

堤　　塘　17年の地籍図によると弧状に張り出した部分の南に「堤塘」（堤防）と記されている。また89Ａ・Ｂ区のすぐ北にあった竹藪を撤去する際に試掘を実施し、内堀ＳＤ07が緩く西へ曲がる様相を呈することを確認した。したがって戦国時代には五条川は城の北東部で西へ弧



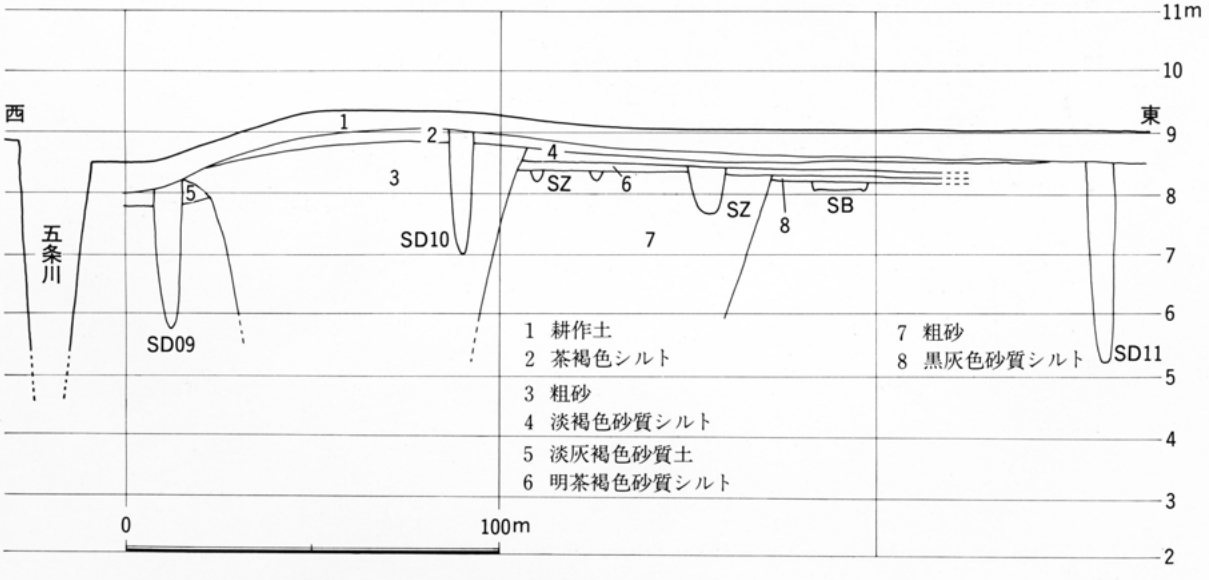
第５図　岩倉城遺跡断面模式図（五条川右岸）

状に曲がり、城はその地形的制約を受けて築かれたと推定できる。

なお古墳時代以前の地層については五条川の東と西で大きく異なる。西では、古墳時代の遺構とわずかな弥生時代の遺構とはほぼ同じ標高で検出でき、その下は、含まれる有機物（植物が腐食した泥炭）の多少により灰色～黒色を呈す、水平に堆積したシルト層が続く。一方、五条川東では89Ｅ区の西端に古墳時代の遺構があり、このすぐ東側に流水の証拠である粗砂層が厚く堆積し、89Ｆ区東端で検出した方形周溝墓のそばまで広がっていた。約80ｍの幅を持つ粗砂の範囲はかつての五条川の痕跡であり、古墳時代以前の遺物や遺構がまったく見られないことから、古墳時代以前という年代が推定できよう。さらに時代を遡ると、縄文時代晩期の竪穴住居跡を検出した90Ｂ区の西まで同様な粗砂層が認められたことから、縄文時代晩期以前には90Ａ区付近まで五条川が大きく蛇行していたことが明らかである。

粗　砂　層

（松原隆治）



第６図　岩倉城遺跡断面模式図（五条川左岸）

2　Ⅰ期

(1)　縄文晩期

概　　観　縄文晩期の遺構・遺物が検出されたのは、90Ｂ区を中心とした極一部の範囲であり、遺跡全体への広がりは認められない。それは、90Ｂ区の西側に設定した90Ａ区および、東側に設定した90Ｃ区においては縄文晩期の遺物を含む包含層が見られなかった事実からも裏付けられる。南北方向への広がりは調査区の関係上、不明な部分が多いが、東西幅約50～60ｍ程度の小規模な集落が想定できよう。

検出された遺構は、竪穴住居３棟、土坑８基である。

竪穴住居　ＳＢ1001

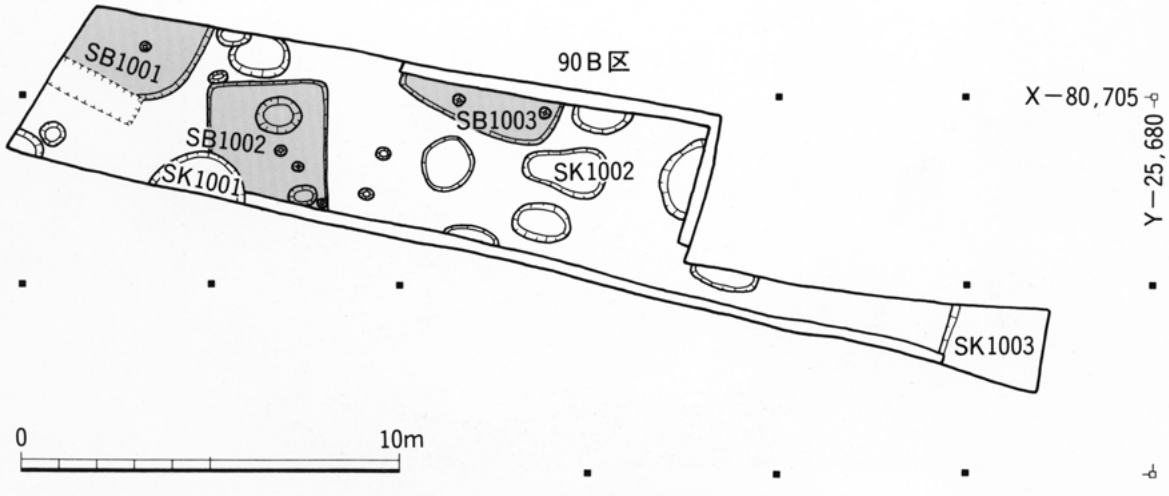
90Ｂ区の西端で検出したものであり、僅かに方形プランと考えられる住居跡の東コーナー部の一部を検出できたにすぎず、規模・内部構造等不明な部分が多い。検出面より10cm程度の深さを有する。内部には黒灰色砂質シルトが堆積しており、床面直上で炭化物の薄層が認められた。

ＳＢ1002(第８図)

90Ｂ区のほぼ中央で検出したものであり、遺構の南辺部分の一部を調査区外に残すが、東西3.1ｍ・南北約４ｍを測る。検出面からの深さは僅か数cm程度である。平面形態はやや南北方向にのびる方形プランであり、内部構造として多数の柱穴を検出したが、その組み合わせは判然としない。ＳＢ1001と同様に内部には黒灰色砂質シルトが堆積しており、床面直上付近には炭化物の薄層が認められた。

ＳＢ1003

90Ｂ区のほぼ中央で検出した。遺構の大半を調査区外に残し、全形は不明であるが、東



第７図　Ⅰ期　縄文晩期遺構配置図(1：20)

西4.3m、検出面から10cm程度の深さを測る。内部で柱穴を２ヶ所検出した。遺構の埋土は炭化物を含む黒灰色砂質シルトが堆積しており、遺物としては外面ケズリ調整の深鉢、突帯紋土器等が出土している。

土　　坑　ＳＫ1001

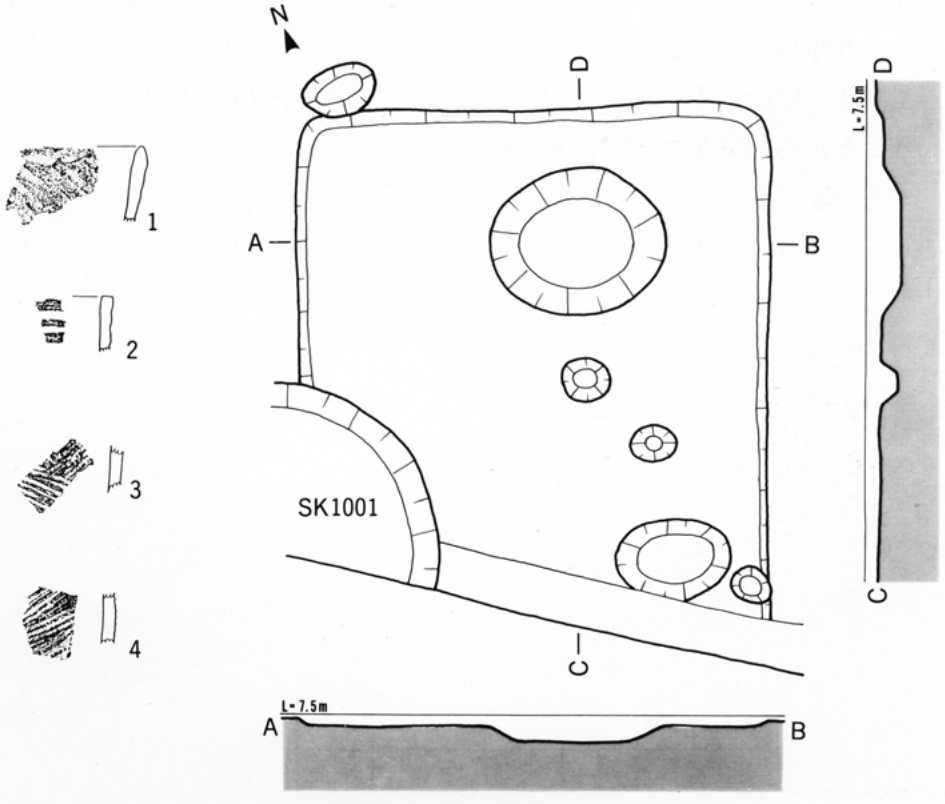
90Ｂ区のほぼ中央で検出。遺構の半分以上を調査区外に置くが、径2.5m程度のほぼ円形状のプランを呈すると考えられる。検出面からの深さは15cm程度である。ＳＢ1002と切り合いが認められた（ＳＢ1002→ＳＫ1001）。遺構の埋土は、淡黒灰色砂質シルトが堆積していた。

ＳＫ1002

90Ｂ区のほぼ中央で検出。ＳＢ1003に近接して掘削される。長軸2.5m・短軸1.3mを測る楕円状のプランを呈し、深さは10cm程度であり、黒灰色砂質シルトが内部に堆積していた。外面ケズリ調整、条痕調整の土器片が若干出土している。

ＳＫ1003

90Ｂ区の東端で検出したもので、遺構の大半を調査区外に残すため、全体の形状・規模等は不明であるが、遺構の掘り形はほぼ直線的に延び、また、埋土に炭化物を多量に含む点より住居跡の可能性も考えられる。



第８図　SB1002実測図（１：50）

(2) 弥生中期

概　　観　弥生時代中期の遺構・遺物は、概ね五条川左岸の89G・90A区から90C区にかけて検出されており、縄文晩期の遺構と同様に遺跡全体への広がりは認められない。調査区の南方には、弥生時代前期から後期にかけて存続し、とりわけ中期中葉段階（貝田町式期）にその主体をおくと考えられる曽野遺跡があり、今回の調査で確認された遺構・遺物との関連が考えられる。

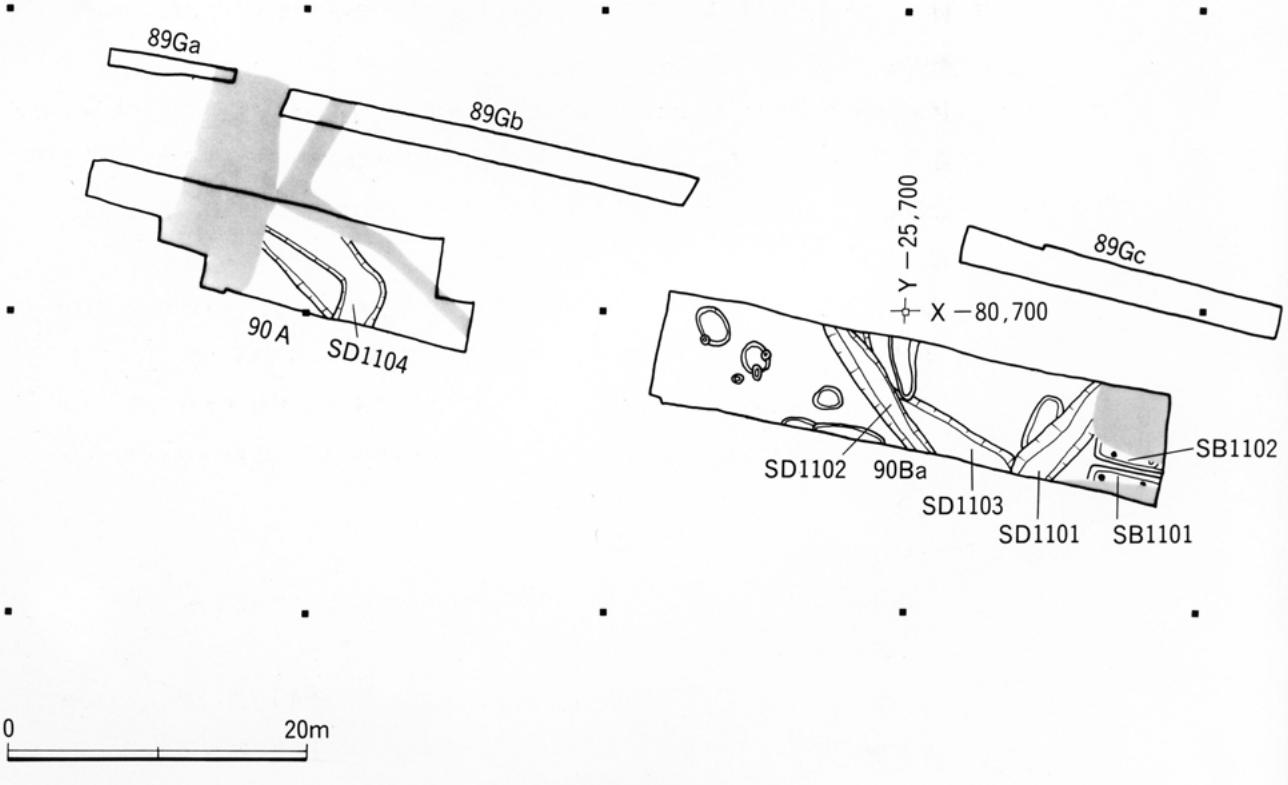
検出された遺構は、竪穴住居2棟、溝6条、土坑8基である。以下、主要な遺構について記していきたい。

竪穴住居　SB1101

90B区東端で検出。遺構の大半は戦国期の溝SD09に切られ、全体の形状・規模等不明な部分が多い。僅かに方形プランと考えられる住居跡の北辺部分を確認できたにすぎないが、内部の状況を知る要素として壁溝および柱穴を2ヶ所検出することができた。

SB1102

90B区東端で検出。SB1101に近接して掘削される。SB1101と同様に残存状態は悪く、方形プランと考えられる住居跡の南辺部分を検出できたにすぎないが、壁溝および主柱穴を2ヶ所確認することができた。遺物としては、貝田町式新期に属する土器片が少量出土している。



第9図　I期弥生中期の遺構(1：500)

溝　　ＳＤ1101

90Ｂ区東で検出した。幅2.8m・深さ40cmを測り、断面は緩やかなＵ字形を呈する。遺構は、竪穴住居に近接して掘削されており、概ねＮ―40°―Ｅの傾きをもってほぼ直線的にのびる。溝内の埋土は淡褐色シルトが堆積しており貝田町式古～新期の遺物が若干出土した。

ＳＤ1102

90Ｂ区中央で検出した。幅2.0m・深さ30cmを測るが、遺構の大部分はＳＺ1304周溝および大規模な廃材投棄坑により削平され、残存状況は頗る悪い。遺構は概ねＮ―35°―Ｗの傾きをもって直線的に走る。断面は緩やかなＵ字形を呈し、暗褐色シルトが堆積する。遺物としては貝田町式期の土器片が少量出土している。

ＳＤ1103

90Ｂ区の中央で検出したものであり、ＳＤ1102と一部重複する（ＳＤ1103→ＳＤ1102）。幅2.5m・深さ40cmを測る。断面はＵ字形を呈し、淡褐色中粒砂が堆積する。遺構は緩やかに円弧を描きながら概ねＮ―25°―Ｗの傾きをもって走る。

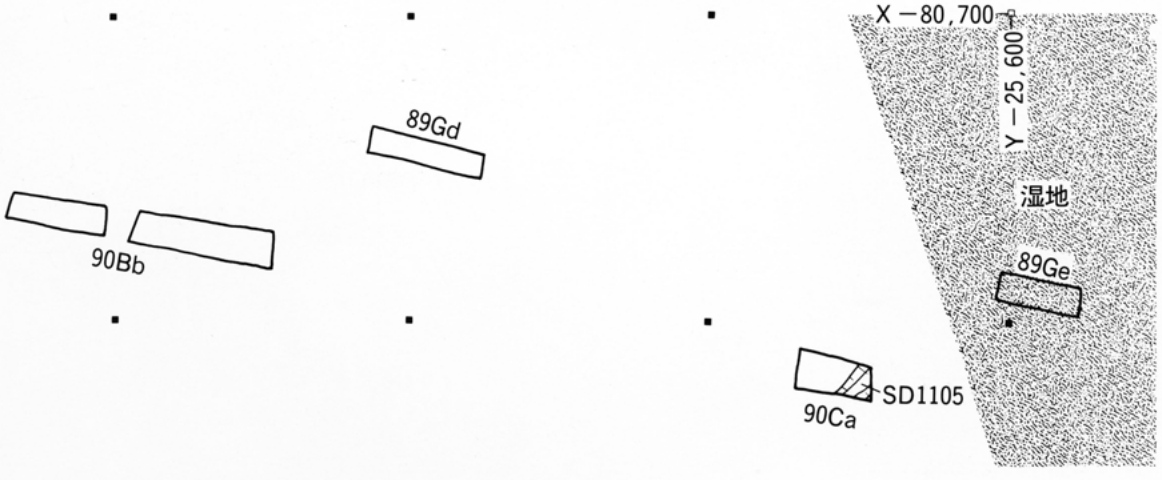
ＳＤ1104

90Ａ区の中央～東で検出したものであり、遺構の大部分は、ＳＺ1302・1303周溝に切られる。幅2.3m・深さ30cmを測り、断面は緩やかなＵ字形を呈し、調査区内でＬ字に屈曲し、調査区外に続く。

ＳＤ1105

90Ｃａ区で検出。狭小な調査区東隅で遺構の一部が確認されたのみであり、遺構の形状・規模等は不明であるが、貝田町式期の遺物が比較的まとまって出土した。

土　　坑　　土坑は90Ｂ区のＳＤ1002以西で８基ほど検出した。いずれも楕円状のプランを有するタイプであり、規模的にも長軸幅が１mほどのものが多いが、遺物の出土に乏しく性格等は不明である。



3　II期

概　　観　I期段階は遺跡の東端の一部分に遺構・遺物が検出され遺跡全体への広がりは認められなかったが、II期段階（弥生時代後期から古墳時代前期）に至ってはじめて遺跡全体への安定したヒトの定着がみられるようになる。それは五条川右岸の自然堤防上に居住域を置き、左岸の微高地上に墓域を設定した集落の出現であり、竪穴住居11棟（岩倉市教育委員会調査1棟含む）、方形周溝墓1基、集石遺構2基、土坑3基、溝1条、土器集積1基を検出している。

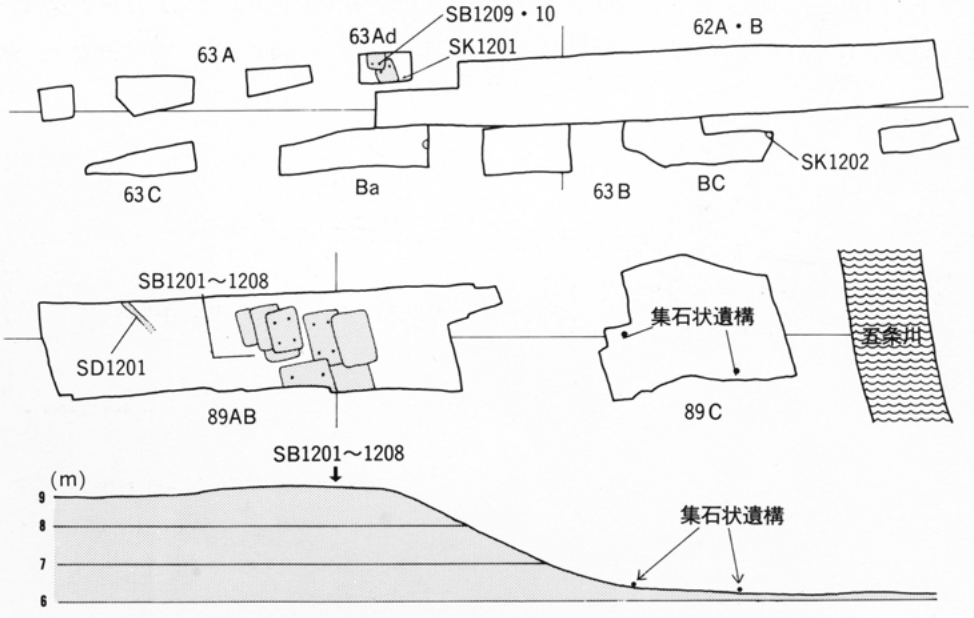
発掘調査は、遺跡の東西を横断する形で調査区を設定したため、遺跡の広がり、構造等を把握する上で良好であったと言え、概ね次の3地区に分類して遺構を捉えることができる。

A地区…63C区から89A・B区に至る地区であり、五条川右岸の標高8～9m前後の自然堤防上。竪穴住居、土坑等を検出しており、居住域に相当すると考えられる。

B地区…89A・B区東端から89Da・Ea区に至る地区である。五条川右岸の自然堤防から89Ea区東で検出した旧河道へと大きく傾斜していく変換地点であり、標高は6m前後、東西幅100m程の平坦部分からなる。集石遺構、土器集積遺構等を検出している。

C地区…89F区以東の標高8～8.5m程の五条川左岸の微高地上。方形周溝墓を1基検出しており墓域に相当すると考えられる。

以下、この3地区に分けて主要な遺構の説明をしていきたい。



第10図　II期主要遺構配置図(1)（1：1000）

(1)　A地区

竪穴住居　ＳＢ1201

89A・B区中央で検出した。遺構の南半分を調査区外に残すため全体の形状は不明であるが、一辺5.6m、深さ30cm程度の方形住居である。ＳＢ1202・ＳＢ1204と重複関係を持つ（ＳＢ1202・1204→1201）。内部の状況を知る要素として周溝、柱穴３ヶ所を検出したが、とりわけ周溝は北辺中央部で途切れており、戸口等の存在を予想させる。遺物としては廻間Ⅰ式２段階に相当する土器が若干出土している。

ＳＢ1204

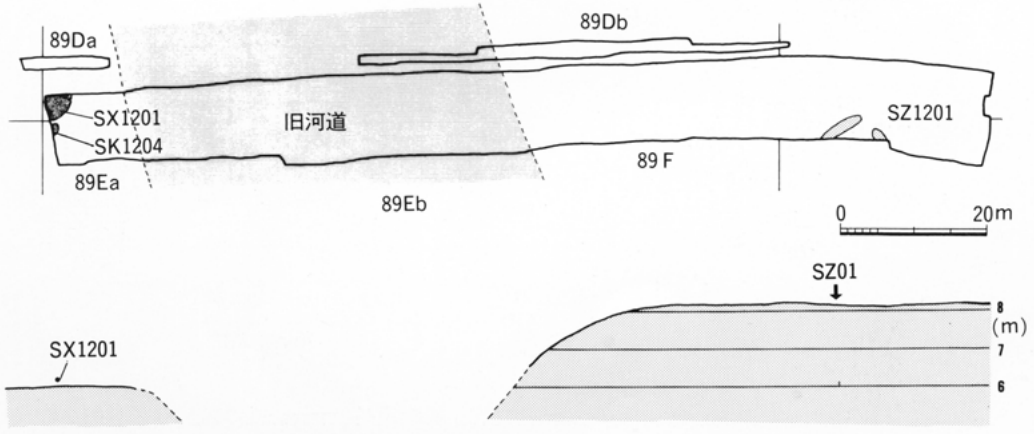
90A・B区中央で検出した。遺構の東半分をＳＢ1203およびⅥ期のＳＤ07によって削平されているため、全体の形状は不明であるが、一辺７m前後、深さ30cmの比較的床面積の広い方形住居である。ＳＢ1201・1202・1203と重複関係を有する（ＳＢ1202・1204→1201・1203）。内部は幅20cm・深さ５cm程度の壁溝がめぐり、柱穴も５ヶ所確認できたが、その組み合わせは判然としない。また、遺構の中央付近には焼土の痕跡が一部みられた。廻間Ⅰ式０段階に位置付けられる遺物が一括して出土した。

ＳＢ1206

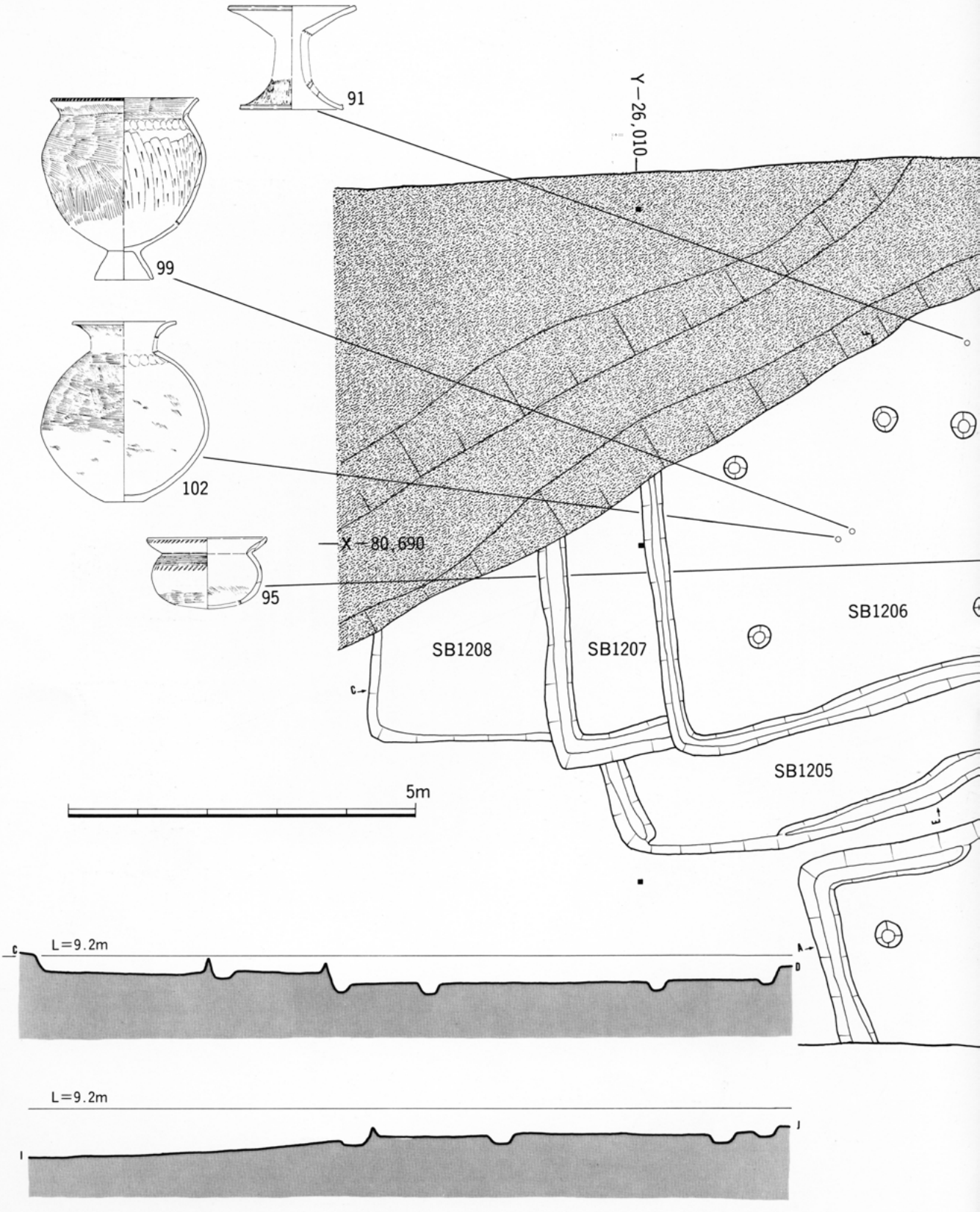
89A・B区中央で検出した、遺構の北辺部分を中世のＳＤ17に切られるが、一辺6.5m前後、深さ15cm程度の方形プランを呈する住居である。ＳＢ1205・1207と重複関係を持つ（ＳＢ1205→1207→1207）。内部には東辺の一部を欠損するが、幅20cm・深さ５cm程度の壁溝がめぐる。また、は主柱穴の可能性が考えられるピットを検出している。遺物としては山中式５段階に比定される遺物が一括して出土した。

ＳＢ1209

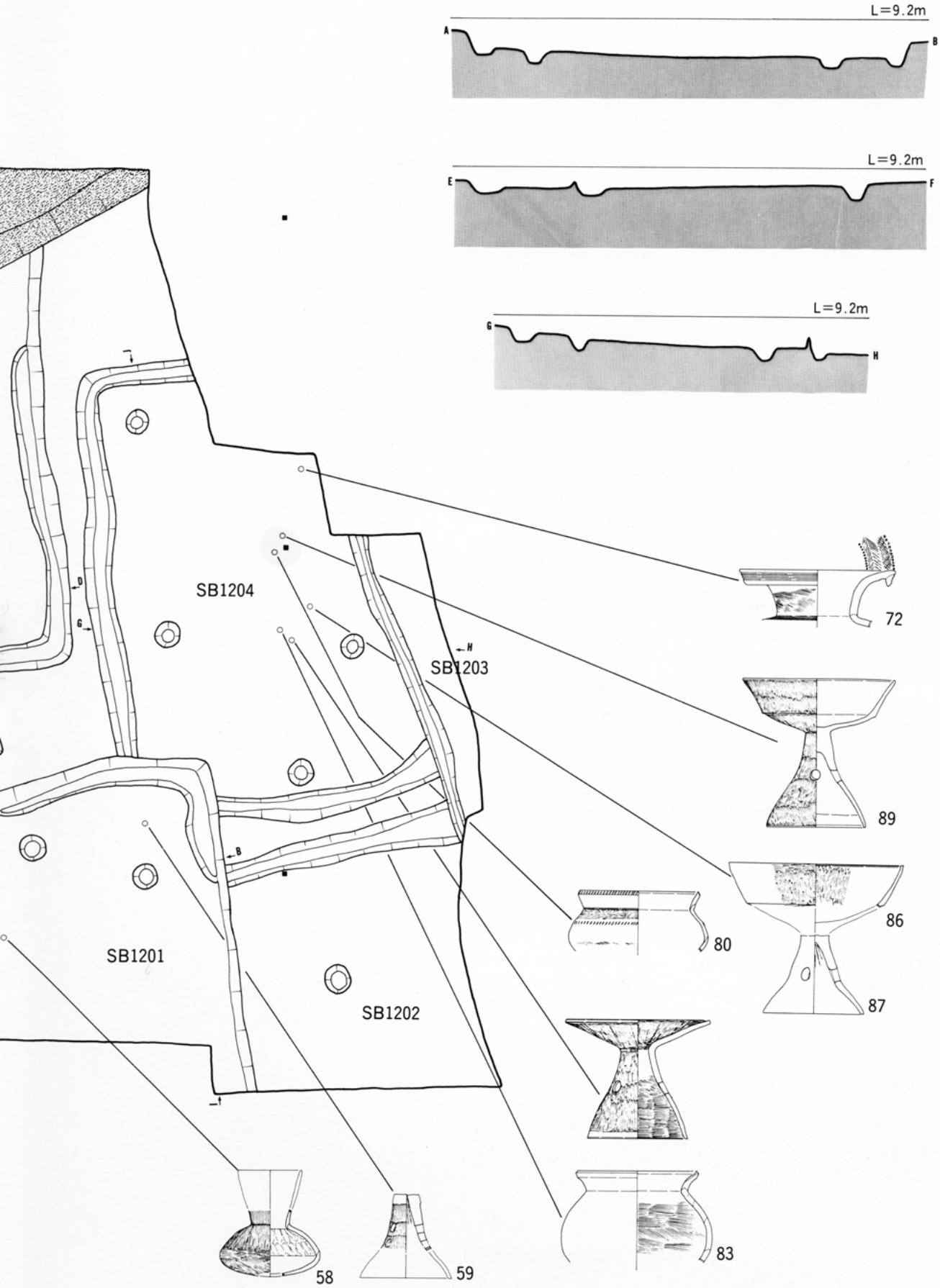
63Ａｄ区で検出。遺構の大半を調査区外に残し、方形住居と考えられる南東隅の一部を検出できたにすぎず全形、規模等は不明である。幅40cm・深さ５cmの壁溝が走り、柱穴も



第11図　II期主要遺構配置図(2)（1：1000）



第12図　SB1201～SB1208実測図(1：80)


L=9.2m
A
B
L=9.2m
E
F
L=9.2m
G
H
SB1204
SB1203
SB1201
SB1202
72
89
86
87
80
83
58
59

1ヶ所確認できた。山中式後期の遺物とともに壁溝内より叩きを施した甕が出土している。

ＳＢ1210

63Ａｄ区で検出。遺構の大半はＳＺ1301周溝に切られ、痕跡程度の残存状況であるが、一辺3.5mを測る方形住居である。ＳＢ1209と重複関係を持つ（ＳＢ1210→1209）。内部には壁溝が走り、ピット状の落ち込みも1ヶ所確認している。

溝　　ＳＤ1201

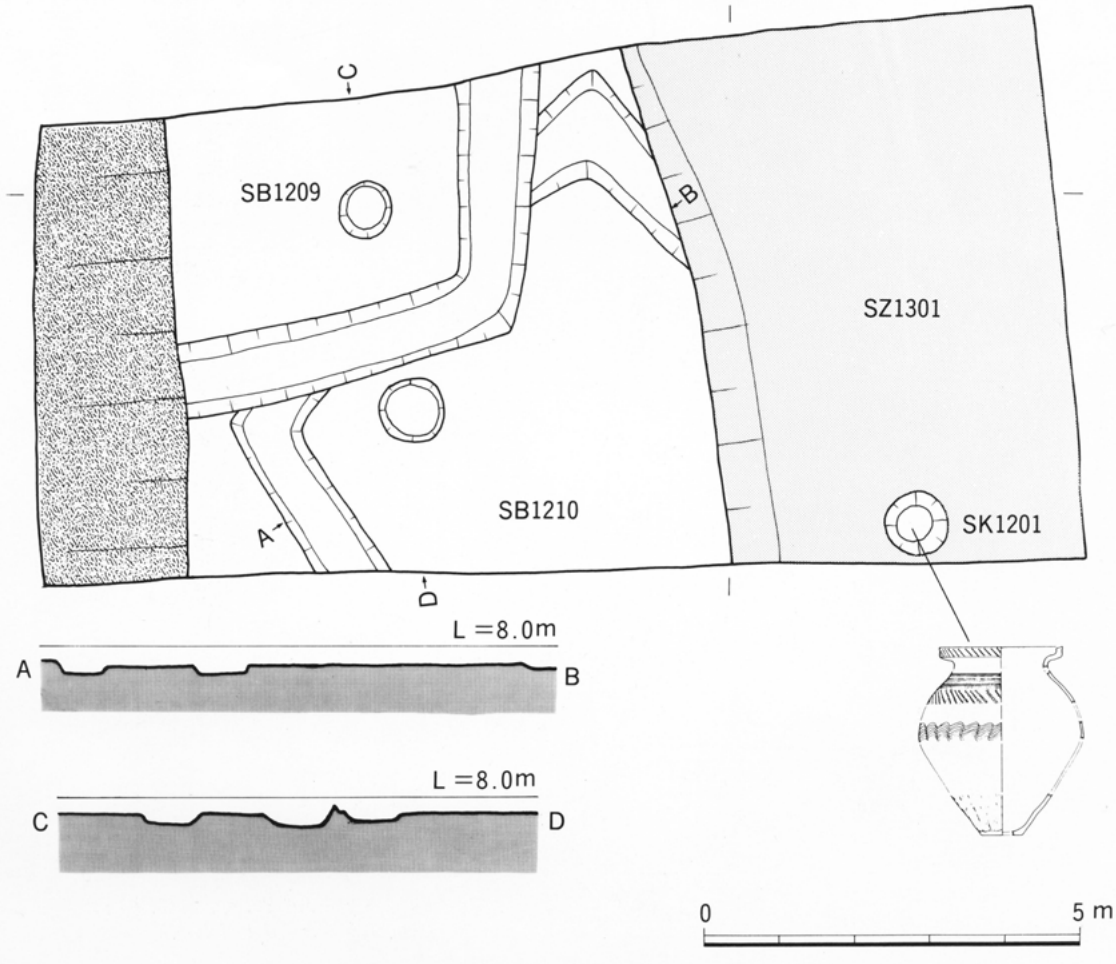
89Ａ・Ｂ区中央で検出した。幅0.8m・深さ15cmを測り、Ｎ—50°—Ｗの傾きをもち、ほぼ直線的に走る。遺構の南端付近は中世のＳＤ17に切られ不明であるが、大きく東に屈曲するものと考えられる。遺構内より、廻間Ⅰ式前半に比定される壺が出土している。

土　坑　ＳＫ1201

63Ａｄ区で検出。径40cm程度のピット状の小規模な土坑であるが、内部より、山中式後期に相当すると考えられる近江系受け口甕が1個体押し潰れた状態で出土した。

ＳＫ1202

63Ｂｃ区で検出した。遺構の大半を調査区外に残すため規模、形状等は不明な部分が多



第13図　SB1209・SB1210実測図（1：50）

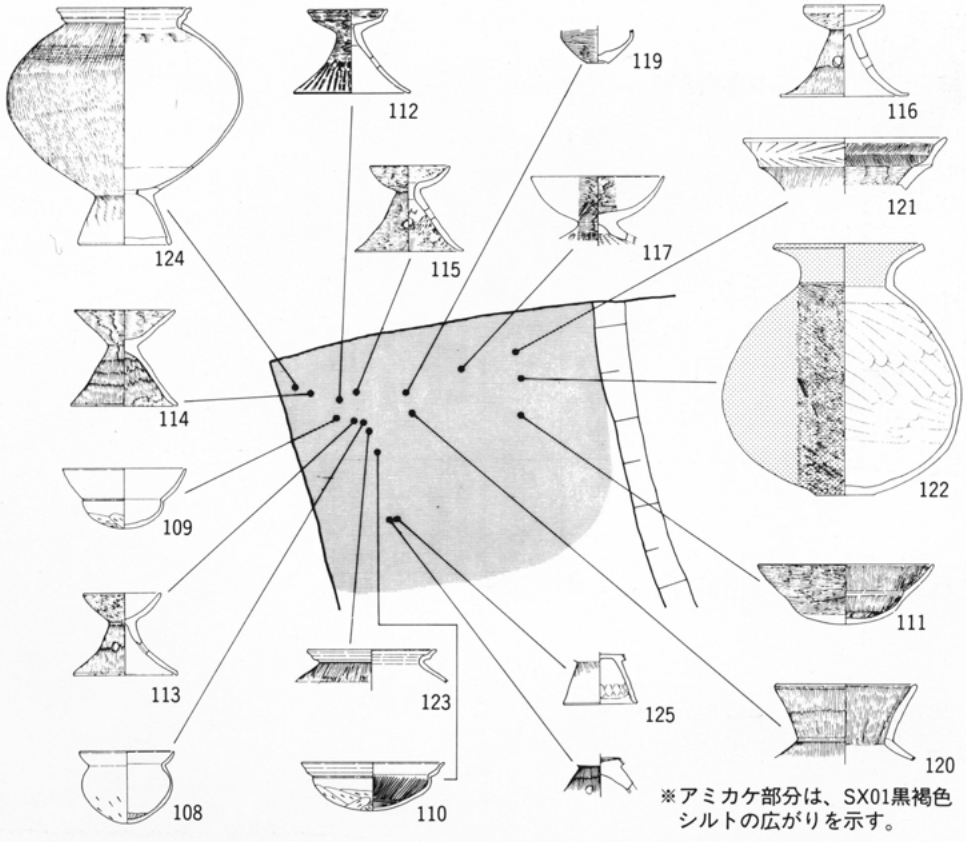
いが、内部より、山中式後期のブランデーグラス型の高杯が１個体出土している。

(2)　Ｂ地区

集石状遺構　89Ｃ区で２基検出した。検出地点の標高は６ｍ前後であり、隣接する89Ａ・Ｂ区で竪穴住居が確認された地点との比高差は、約３ｍを測る。集石遺構は、拳大から人頭大の河原石を帯状（ＳＸ1202）または楕円状（ＳＸ1203）に集積したものであり、性格等不明な部分が多いが、若干の出土遺物および集石遺構を覆う暗褐色シルト層からは、竪穴住居とほぼ同時期（山中式後期～廻間Ⅰ式期）の遺物が出土しており、それらと関連した遺構であることは明白である。また、集石の石材は、濃飛流紋岩が大半であり、これらは、遺跡の周辺では採取できないものである。遺構の性格とあわせ、何故これらの石材を入手する必要があったのか、類例の乏しい現在では判然としない。今後の課題である。

土器集積遺構　ＳＸ1201

89Ｅａで検出した。検出地点の標高は、89Ｃ区で確認した集石遺構と同様に６ｍ前後である。また、遺構から東へ10m程で旧河道へ落ち込んでいくという極めて不安定な地点に立地している。この土器集積に伴う明確な掘り込み等は確認されず、一辺４～５ｍ前後の



第14図　SX1201遺物出土位置図（1：100）

自然に形成された窪地状の落ち込みに、多量の炭化物を含んだ黒褐色シルトが、あたかも充填したごとく堆積していた。この黒褐色シルト内より、壺・S字甕・小形器台・小形丸底土器等廻間Ⅲ式3段階に比定される土器群が一括して、人為的に置かれた状況で出土した。

土　　坑　SK1204

89Ea区で検出。SX1201に近接して掘削される。遺構の大半が調査区外となり、全体の形状は不明であるが、径約1.5mを測る円形の土坑である。掘り形はほぼ垂直に掘り込まれており井戸状遺構の可能性も考えられるが、0.7m程掘り下げたところで湧水が激しくなり、壁面が崩壊したため中途で掘削を中断せざるをえなかった。土坑内部より、高杯・S字甕・有段鉢等廻間Ⅲ式4段階に比定される遺物が出土した。

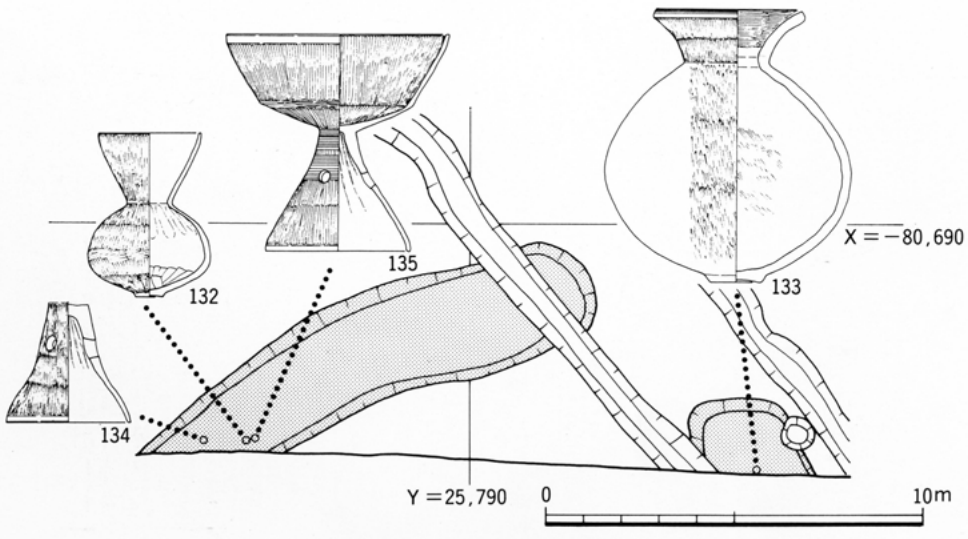
旧 河 道　NR1201

遺跡が五条川に接して営まれているため、調査区の各地で旧河道の痕跡を確認している。89Ea区で確認したNR1201の対岸は89F区内にあり、幅約50mを測る。時期に関しては出土遺物が少なく決め手にかけるが、若干の土器、遺構等の関係より弥生時代後期以降と考えられる。

(3)　C地区

方　　形　SZ1201

周 溝 墓　89F区東端の標高8m程の微高地上で検出した。遺構の大半が調査区外となり、僅かに周溝の一部が調査できたにすぎない。周溝は幅1.5m・深さ60cm程度の規模であり、平面形態は不明な部分が多いが、北西隅に陸橋部を有するタイプの可能性が考えられる。遺物としては廻間Ⅰ式1段階に位置付けられる高杯・壺等が若干出土している。



第15図　SZ1201実測図(1：100)

4　Ⅲ期の遺構

概　　観　Ⅲ期の遺構は、五条川の両岸にわたって遺構の広がりが認められる。しかしながら、Ⅱ期段階で確認された竪穴住居のようなヒトの生活の痕跡を示すような遺構は検出されず、古墳・集石墓群といった“墓”に限定されるという状況がみられた。つまり、岩倉城遺跡におけるⅢ期段階は広く墓域として展開していたと理解できる。

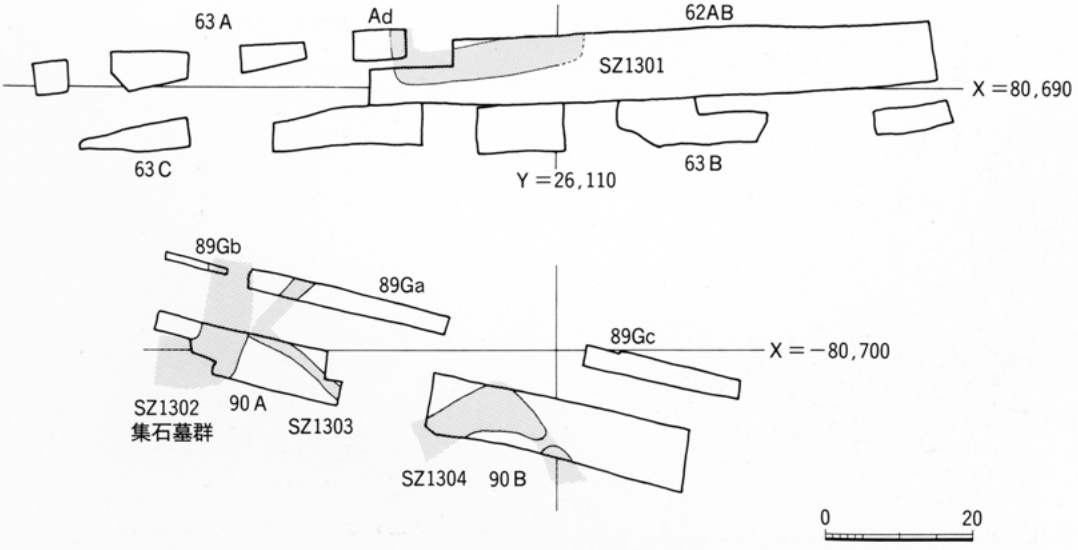
五条川の右岸で方墳１基、左岸において方墳３基・集石墓群（８基）を検出した。

古　　墳　ＳＺ1301

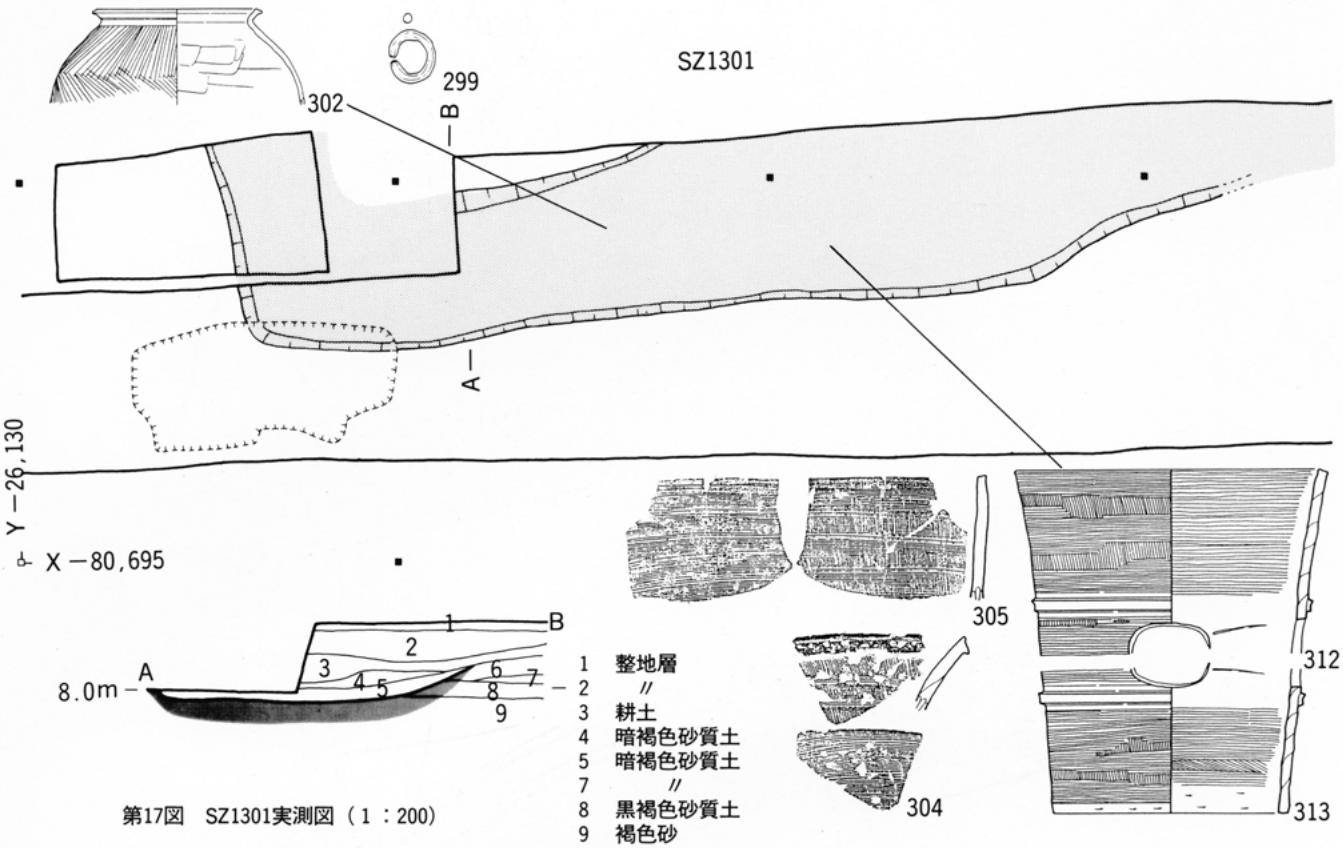
62Ｂ・63Ａｄ区で検出した。遺構の大部分は、調査区北方に残し、僅かに周溝の一部を約25mにわたって確認できたにすぎない。周溝は62Ｂ区内をほぼＮ―80°―Ｅの傾きをもってほぼ直線的に走り、62Ｂ区西でコーナー部となる。一辺26m程度の方墳と考えられよう。周溝の上部は攪乱および戦国期の遺構により削平され、残存状況は不良である。とりわけ東部分に関しては、遺構面まで攪乱がおよび完全に破壊されつくしていた。検出面より、周溝幅４ｍ・深さ15cm程度を測り、上層より、暗褐色砂質土・黒褐色粘質土が堆積する。黒褐色粘質土内より、金環および尾張地方埴輪編年Ⅲ―２期段階の円筒埴輪が転落した状態で出土した。

ＳＺ1302

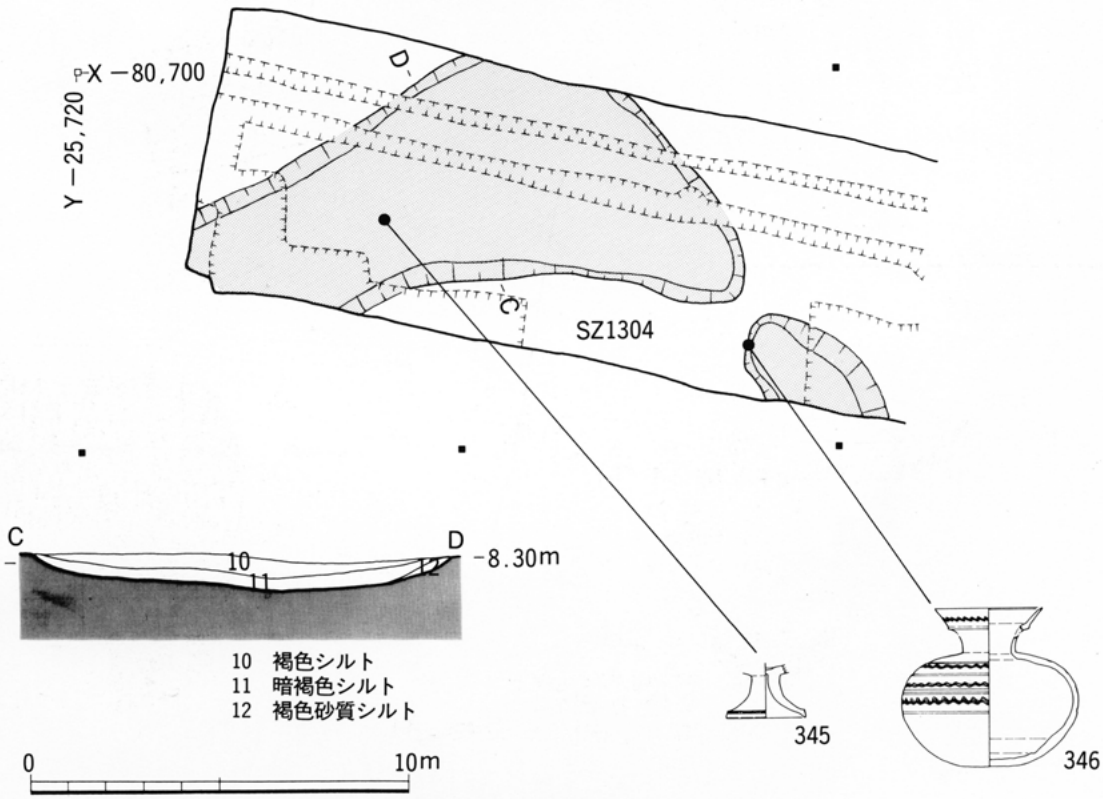
89Ｇａ・90Ａ区で検出。遺構の大半は調査区外となり、周溝の一部を確認できたにすぎない。周溝はほぼ南北方向に直線的に走り、90Ａ区南で屈曲して西側に延びる（この延長状には生活道路を挟んで89Ｆ区があるが、89Ｆ区東端部分は攪乱により大きく削平されており、周溝の痕跡すら確認することはできなかった）。一辺17m程度の方墳と推定される。検出面で、周溝幅６ｍ・深さ60cmを測り、埋土は上層より褐色シルト、褐色砂、灰褐色シ



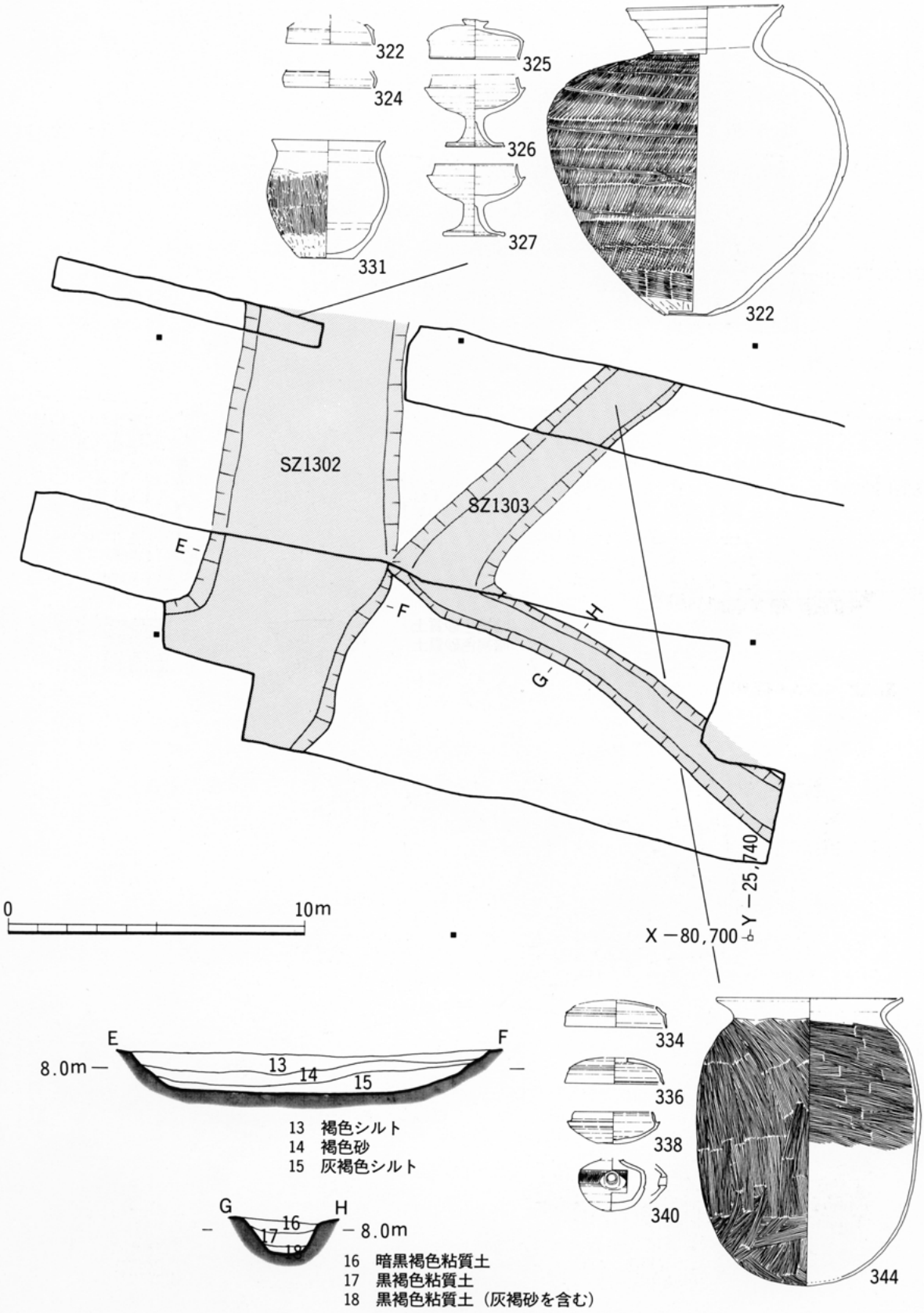
第16図　Ⅲ期主要遺構配置図（１：1000）



第17図　SZ1301実測図（1：200）



第18図　SZ1304実測図（1：200）



第19図　SZ1302、1303遺物出土位置図（1：200）

ルトの順に堆積している。遺物としては、褐色砂層中より、6世紀前半代に比定される須恵器等が転落した状態で出土した。最上層において7世紀中葉前後の築造と考えられる集石墓群が8基確認された点が注目される。

ＳＺ1303

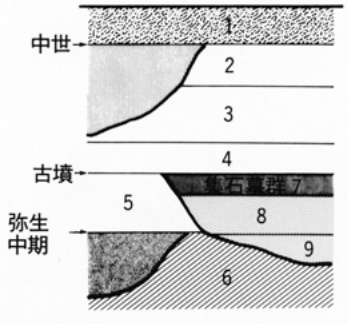
89Ｇｂ・90Ａ区で検出。遺構の大部分を欠くが、一辺13m程度の小規模な方墳と考えられる。89Ｇｂ区で西側周溝の一部、90Ａ区で南側周溝の一部を確認し、南側周溝に関しては、ＳＺ1302との切り合い関係が認められる（ＳＺ1302→1303）。周溝幅は1.2～2.0m、深さ60cmを測り、西周溝はやや広くなる。埋土は黒褐色粘質土であり、下層になるにつれ灰褐色砂を含む量が多くなる。遺物としては、7世紀を相前後する時期（下限は東山50号窯式を下る事はない）と考えられる須恵器および土師器長胴甕が出土している。

ＳＺ1304

90Ｂ区で検出。遺構の大部分は調査区南方に残し、僅かに北東コーナー部分を調査できたにすぎない。Ｎ―60°―Ｅの傾きをもちほぼ直線的に走る西側の周溝は広く、幅5.5m、深さ20cm測り、コーナー部分で北側周溝に接続する形で大きく張り出す。しかし、北側周溝とは完全には接続せず、ブリッジ状に掘り残しの部分が認められる。北側の周溝の大部分は攪乱により破壊されており、判然とはしないが、幅2.5m、深さ20cmを測る。埋土としては黒褐色シルトが堆積しており、埴輪片および東山111号窯式に伴行すると考えられる初期須恵器が出土している。

集石墓群　89Ｇａ・90Ａ区で検出したＳＺ1302周溝の最上層において、木曽川水系で産出する濃飛流紋岩を多量に利用し、長方形状の埋葬施設を構築した特異な遺構を8基集中的に検出した。今、これら一群の遺構を「集石墓群」として総合する。

時　　期　遺構の所属時期について層位と出土遺物・他の遺構との関係性から考えてみたい。まず、層位より考えてみる。第20図に90Ａ区の層位模式図を示した。図に明らかなように古墳時代の遺構が掘削されるのは第5層からであり、その上位にある第4層は古墳時代の遺物を若干含む遺物包含層となる。さらにその上位の第3層は遺物を含まない無遺物層である。集石墓群が構築されるのは第5層から掘削されたＳＺ1302周溝の最上層である第7層中であり、無遺物層の第3層、および第4層にパックされた状態となっている。層位的には古墳時代の所産であることは明らかである。



1 整地土
2 暗褐色シルト
3 黄褐色シルト
4 淡褐色シルト
5 暗茶褐色砂質シルト
6 青灰色砂・灰褐色シルトの互層
7 褐色シルト
8 褐色砂
9 灰褐色シルト

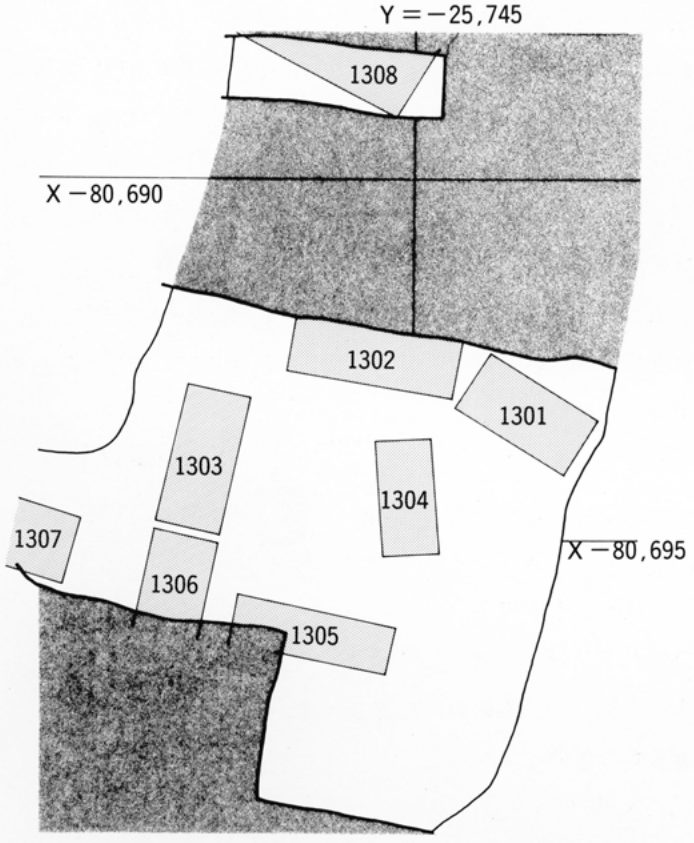
第20図　集石墓群層位模式図

次に、出土遺物・他の遺構との関連性より考えてみる。まず、集石墓群下の第20図第８層中より、６世紀前半代の遺物が出土しており、６世紀の前半を遡る可能性は考えられない。さらにＳＺ1302周溝は７世紀を相前後する時期と考えられるＳＺ1303周溝によって切られており、７世紀初頭を遡る可能性も低いと推察される。さらに、集石墓群内のＳＸ1308より、７世紀中葉に比定される須恵器提瓶が出土している点よりみるならば、概ね７世紀中葉を相前後とした時期、いわゆる古墳時代終末期に築造された遺構ということができよう。

特　　色　この特異な遺構群の特色をまとめて記してみたい。以下の４つの大きな特色がみられる。

第一に、古墳の周溝という極めて特異な場所を選び（**『特異な場所へ設置』**）、群集して構築している（**『群集性』**）。検出された８基の遺構群は、幅6.0ｍを測るＳＺ1302の周溝内を目一杯利用して構築されており、周溝からはみ出したり、周溝外に築造されることはない。また、群集する点よりみれば、明らかにある特別な空間を意識し設定していると考えられる。さらに、それらは東西方向・南北方向という方位がある程度意識されて配置されている（**『方向性』**）。

第二に、遺構の規模と形状であるが、規模的には長辺1.5～2.0ｍ・短辺0.7～1.0ｍといづれも小規模である。また、遺構の形状には一定の規則性が認められる。遺構の形状はすべて長方形状に人頭大の石をほぼ直線状に配置し、その内部は拳大の石をほぼフラットに



第21図　集石墓群主体部配置図（１：100）

遺構	規　模(m)	方　位	備考
1301	1.6×0.7	N-65°-W	
1302	1.9×0.9	N-80°-W	
1303	1.8×0.8	N-15°-E	
1304	1.3×0.7	N-10°-W	
1305	2.1×0.6	N-65°-W	
1306	——×0.85	N-15°-E	
1307	——×0.9	N-65°-W	
1308	——×——	E-25°-S	須恵器出土

主体部規模一覧

敷き詰めている点は共通するが、細部において若干の相違がみられ、大きく以下の２つのタイプに分類することができる。

・**第Ⅰタイプ**…周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、その内部に拳大の濃飛流紋岩を中心とした河原石を敷き詰めたもの。さらに内部の状況より２つに分けることができる。
  - Ⅰａ…内部を区画しないもの。ＳＸ1303・1304・1307・1308が該当する。
  - Ⅰｂ…内部をさらに人頭大の河原石で区画するもの。ＳＸ1302・1306がある。

・**第Ⅱタイプ**…若干の窪地上の地形を利用して、人頭大の濃飛流紋岩をアットランダムに数段にわたって積み上げ、内部は拳大の濃飛流紋岩を中心とした河原石を敷き詰めているもの。ＳＸ1301・1305の２基が相当する。

第三に、集石に利用された石材は、先にも記したが木曽川水系で産出する濃飛流紋岩を利用している点である。これらの遺構に使用された石材は遺跡周辺で採取することは不可能なものであり、遺構構築のための目的意識を持った一定の労働力が必要であったと考えられる（**『目的意識をもった労働力』**）。

第四に、遺構が築造された周辺の環境であるが、発掘調査により確認された５世紀中葉以降の古墳時代の以降は、すべて墓に限定できる状態であり、住居跡のような生活の痕跡を示す遺構は検出されていない。また、遺跡の南方には、現在は消滅したが須恵器等を出土した古墳の存在が数基程度明らかとなっており、遺跡の周辺は古墳時代を通して墓域として機能していた可能性が強い（**『環境』**）。

以上の諸点をその特色として上げることができる。これらから導きだされる遺構の性格は、まず、第二の特色としてあげた規模・形状よりみるならば、単葬の棺を安置するための埋葬施設の可能性であり、それは、他の特色として指摘した『特異な場所への設置』『群集性』『方向性』『目的意識をもった労働力』『環境』等からも裏付けることができる。

これらの特異な集石遺構群は古墳時代終末期（７世紀中葉を相前後した時期）に築造された“墓”と想定できよう。

墓の構造　集石墓の構造について考えてみたい。以下の４つの段階を経て、構築されたと考えられる。

第１段階…墓の設定場所の決定

一定の規範の方位にあわせて、拳大の河原石を一定レベルでフラットに敷き詰め、棺の安置場所を決定する。

第２段階…棺の設置

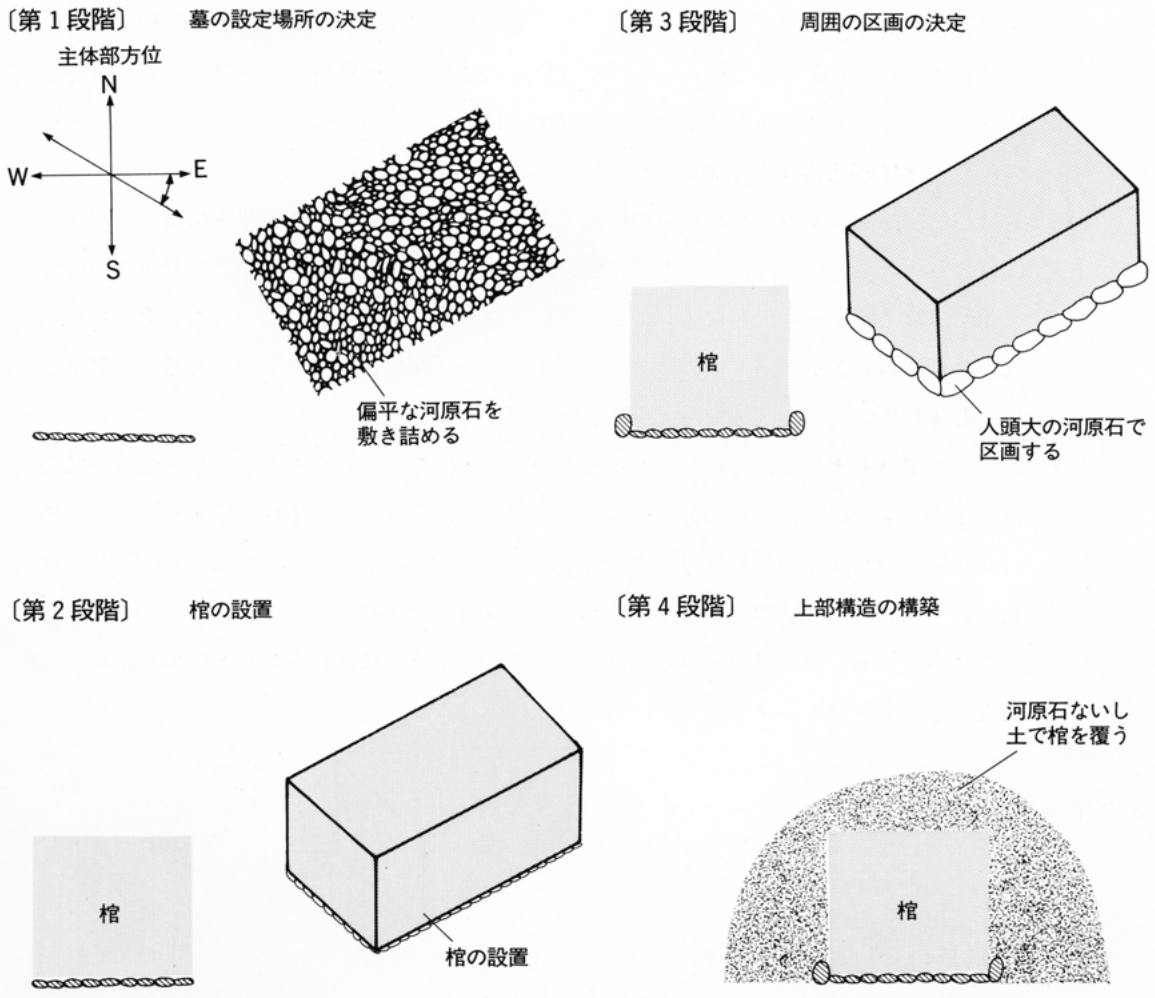
棺自体は発掘調査で確認することはできなかったが、遺構の規模・形状よりみるならば単葬の棺であったと推定される。

第3段階…周囲の区画の決定

棺の設置以後、棺の周囲に1段ないしは数団にわたって人頭大の河原石をほぼ直線状に配置し、墓の区画を決定する。

第4段階…上部構造の構築

発掘調査では、上部構造を示す施設は確認できなかったが、検出時点において多量の河原石が盛り上がった状態で出土しており、おそらく、棺を河原石ないしは土で覆ったものと推定される。



第22図　集石墓群の築造段階

以下、保存状況の良好なものについて報告する。

ＳＸ1301

ＳＺ1302の周溝の東端にＳＸ1302と近接して築造されている。遺構の東・南側は、水道管埋設に伴う攪乱により欠損するが、北・西側の遺存状況は比較的良好である。遺構は、若干の窪地状の地形を利用して、人頭大の濃飛流紋岩をアットランダムに数段にわたって積み上げ主体部を構築したものであり、床面は拳大の濃飛流紋岩を敷き詰めたものである。規模は、長辺1.6m・短辺0.7m程度と考えられ、主軸はＮ―65°―Ｗに傾く。ＳＸ1305もほぼ同様な構造を持つ。

ＳＸ1302

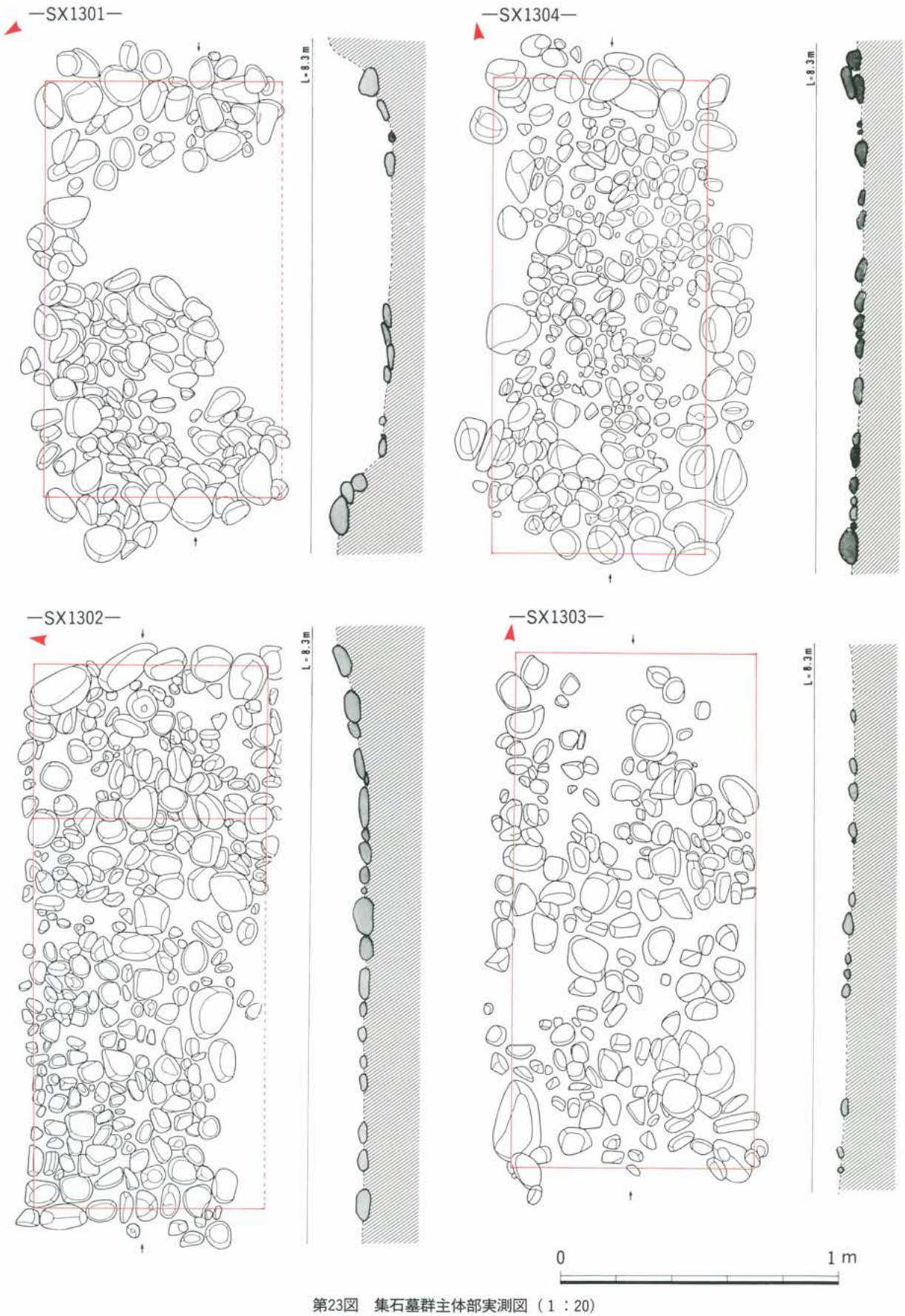
ＳＺ1302周溝のほぼ中央付近に構築されている。遺構の南部分は水道管埋設に伴う攪乱により破壊され残存しないが、概ね長辺1.9m・短辺0.9m程度の規模を有すると考えられる。遺構の構造は周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、内部に拳大の河原石を敷き詰めたものであるが、注目すべきは、内部東側0.5mをさらに人頭大の河原石で区画している点であり、ＳＸ1306も残存状況は不良ながら同様の構造を持つものと考えられる。主軸はほぼ東西方向を示す。

ＳＸ1304

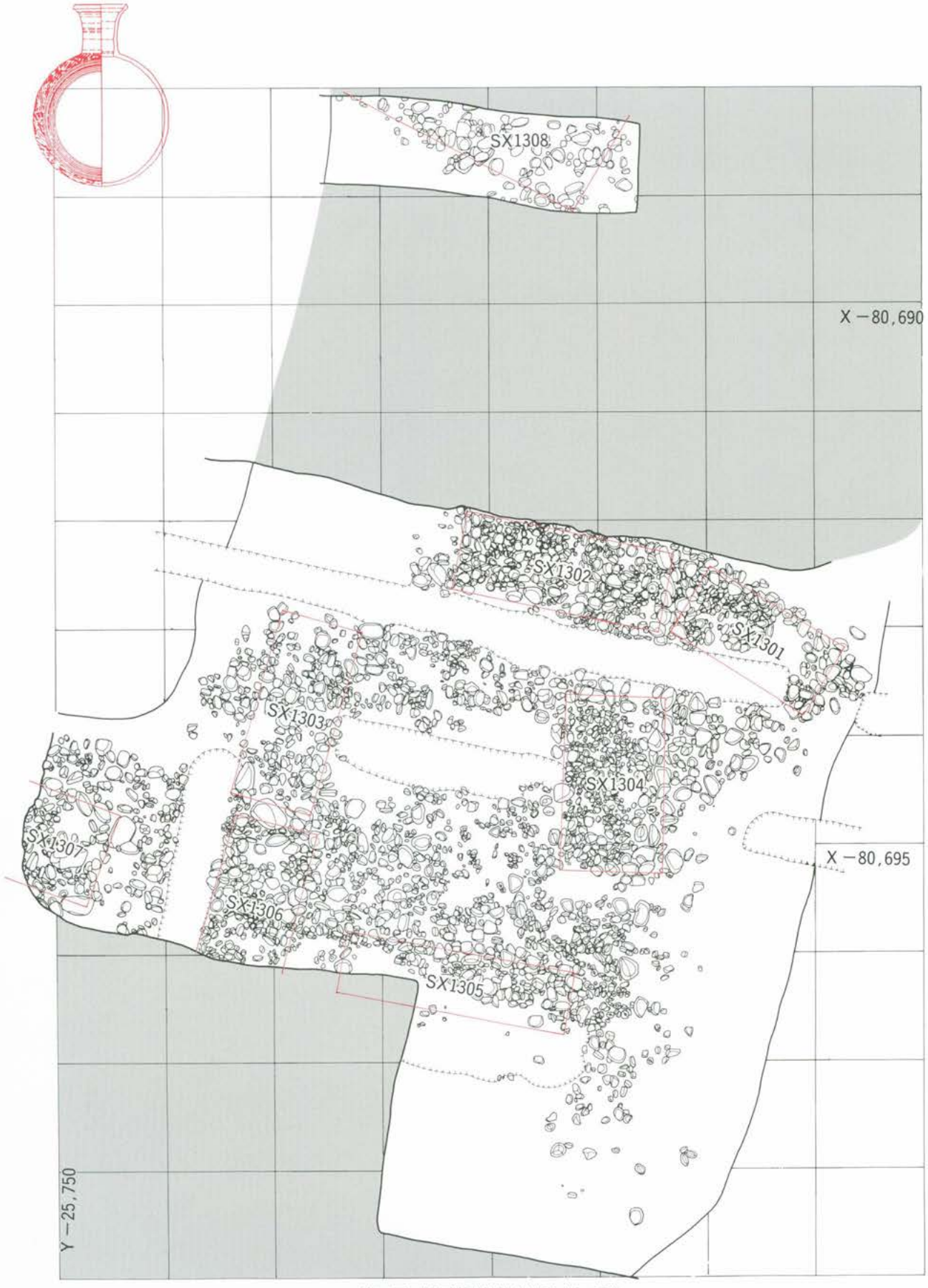
ＳＺ1302周溝のほぼ中央付近に構築されている。今回の調査中最も保存状況が良好なものであるが、規模的には比較的小規模な部類に属す。長辺1.3m・短辺0.7mを測り、主軸はほぼ南北方向を向く。遺構の構造は周囲に人頭大の濃飛流紋岩を配置し、内部に拳大の河原石を敷き詰めたものである。保存状況は不良であるが、ＳＸ1303・1307・1308も同様の構造と考えられる。

ＳＸ1308

ＳＺ1302周溝のほぼ西端付近で検出したものである。遺構の残存状況は不良であるが、主軸はＮ―65°―Ｗに傾き、ＳＸ1304と同様の構造を持つものと考えられる。注目すべきは今回の調査中唯一遺物が出土した点であり、集石内より、体部の一部を欠損するが、概ね完形に復元できるⅠ―17号窯（古）段階の提瓶が押し潰れた状態で出土した。



第23図　集石墓群主体部実測図（1：20）



第24図　集石墓群遺構全体図（1：50）

5　Ⅳ期の遺構

概　　観　Ⅳ期の遺構・遺物は五条川の両岸で確認することができた。しかし、遺構は散在的な分布を示し、遺物量も決して多いとはいえない。大きく奈良時代のものと平安時代末期のものとにわけることができる。

溝　ＳＤ1401

63Ｂｃ区で検出。幅1.7m・深さ30cmを測る。断面は緩やかなＵ字形を呈し、ほぼ南北方向に向かって走る。遺構は、北側に関しては、その延長が検出されておらず調査区を出たところで終束する可能性が高い。溝内の埋土は、暗褐色砂質土が堆積しており、上層より、Ｏ—10号ないしはIG-78号窯式に相当すると思われる須恵器杯身が出土している。

ＳＤ1501・1502

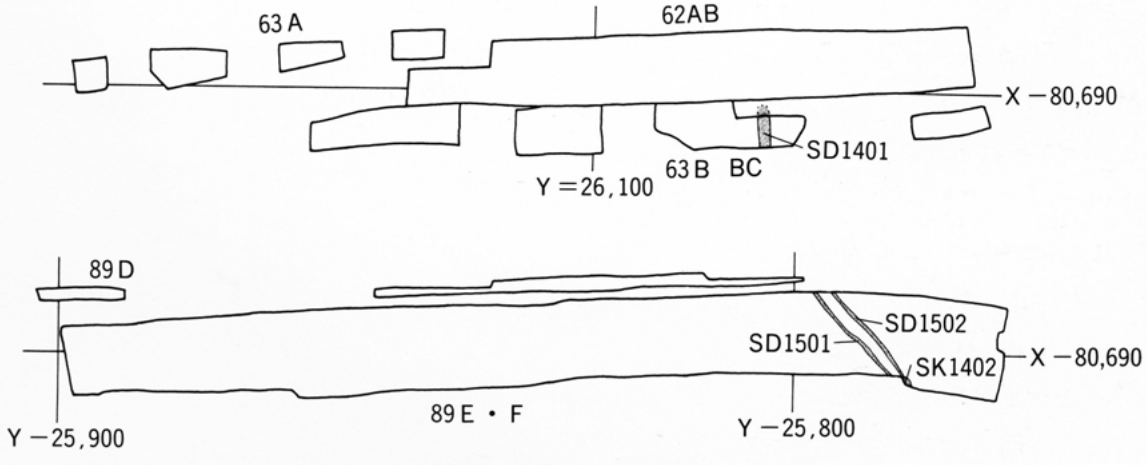
89Ｆ区東で検出。ＳＤ1501・1502ともに幅0.5m・深さ20cmを測り、約1.5mの間隔をもってＮ—40°—Ｗの方向に走り、「道」の可能性が考えられる。遺物としては少量であるが、H-72号窯式に併行する灰釉陶器が出土している。

土　　坑　ＳＫ1401

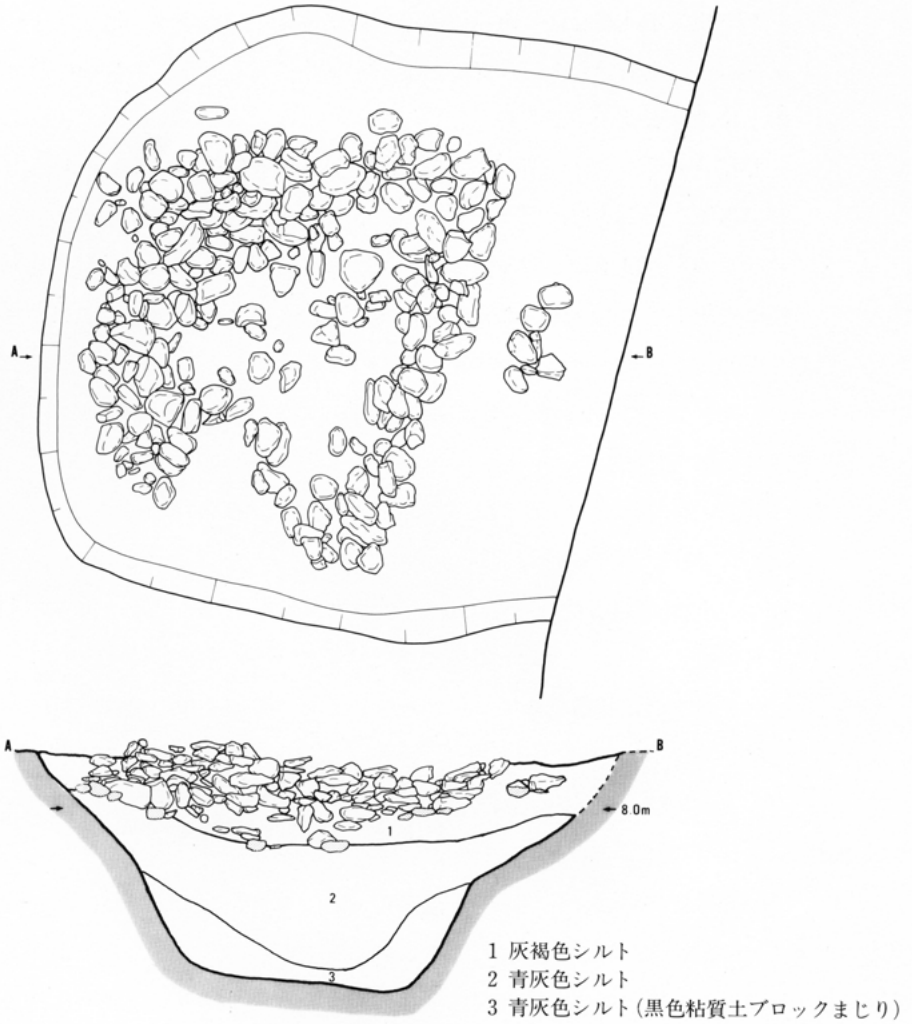
89Ｆ東で検出。遺構の大半を調査区外に残すため全体の形状・規模は不明であるが、径1.5m・深さ70cm程度の円形プランを呈する土坑と考えられる。遺構の埋土は淡青灰色砂質シルトが堆積しており、IG-78号窯式に相当すると思われる須恵器が出土している。

集石遺構　ＳＸ1501

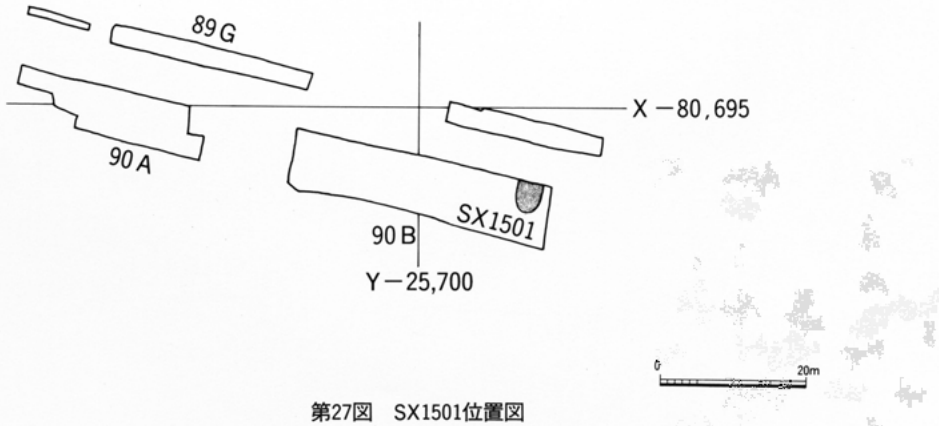
90Ｂ区で検出した性格不明の遺構である。遺構の北側の一部は調査区外となるが、概ね４×4.5m、深さ1.3mを測るやや大型の長方形状の土坑である。断面は２段掘りとなっている。埋土の状況は、第26図に示した通りであるが、下層より黒色粘質土を含む青灰色シルト、青灰色シルトの順に堆積しており、常時湿った環境にあったと推定され「井戸」の



第25図　Ⅳ期主要遺構配置図（１：1000）



第26図　SX1501実測図（1：50）



第27図　SX1501位置図

可能性も考えられる。

この土坑の最上層において人頭大の河原石を人為的に3.5m×3.1mの規模で方形に集積した石組みを検出した。石組みは基本的には１段であり中央部分がやや窪み、周囲が若干レベル的に高くなるという皿状の形状を示している。また、集積に用いられた石材は90%以上が濃飛流紋岩で占められている。

井戸状の土坑と集石遺構の関係は、井戸状の土坑が廃絶したのち集石遺構が築かれたものであり、土坑廃絶に伴う儀礼的な施設の可能性も考えられるが、類例の乏しい現段階では、その性格は不明と言わざるをえない。

集石内より、玉縁状の口縁を持つ灰釉陶器最末段階（百代寺窯式）の椀が出土している。

（服部信博）

6　Ⅴ期の遺構

概要

中世の遺構は五条川の両岸に展開しているが、右岸では明瞭な遺構は少なかった。遺構には建物・溝・井戸などがある。

掘立柱建物　ＳＢ01

62Ｂ区で検出した掘立柱建物である。東西４間、南北３間。方向はＮ78°Ｅで、柱穴は平面形が円形で、検出面からの深さは30cmほどである。太さ約10cmの断面円形の柱の痕跡が残り、底には太さ20cm、長さ30cmの丸太を縦に半割し、平らな割れ口を上に向け、礎板とし、その安定のため拳大の礫を２～３個下に置いているものがある。遺物がほとんど無くわずかに山茶椀の小片が出土したのみで時期決定の根拠にやや欠けるが、層位的にはⅥ期の堀を検出した面より下層であることから、中世と推定した。

ＳＢ02

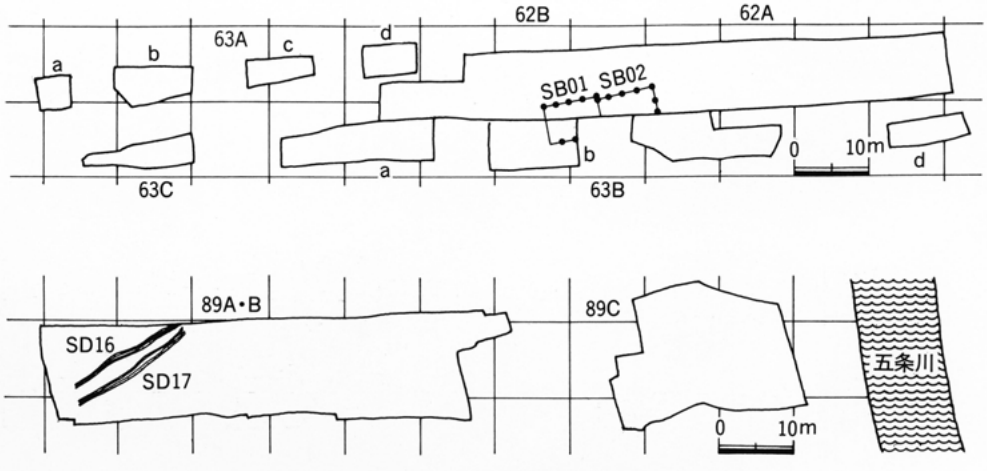
これも62Ｂ区で検出した掘立柱建物。東西４間、南北３間以上。この建物の柱の建て方もＳＢ01同様、丸太材を半割した礎板に太さ15～20cmの細い柱を立てるもの。やはり遺物は山茶椀の破片しか出土せず、ＳＢ01同様、中世の遺構であろう。柱の東西方向の並びはＮ76°Ｅ。

井　　戸　ＳＥ03

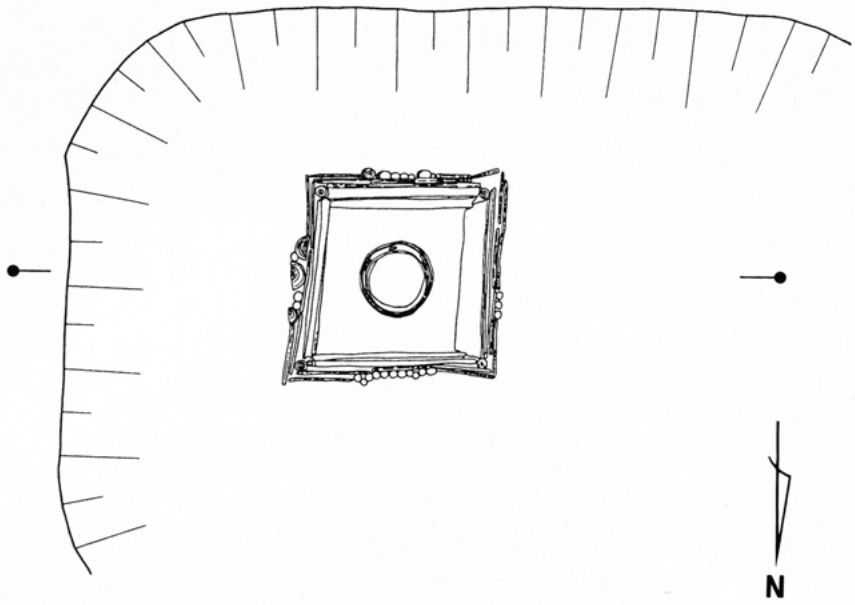
89Ｆ区で検出した井戸。検出面での掘形の直径は1.6m、井戸の底まで２m。井戸枠は曲物を使用。遺物は何も出土しなかったが、ＳＥ04との切り合い関係から、こちらがやや先行する。

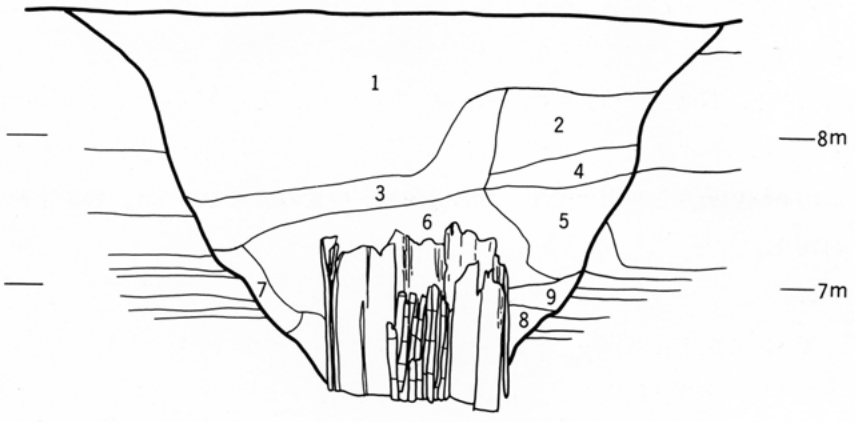
ＳＥ04

同じく89Ｆ区において検出した井戸。掘形は検出面で直径3.7m、検出面から井戸の底まで2.5mを測る。井戸の構造は次ぎの通り。曲物の外に太い丸太を４本立てる。先が二股に



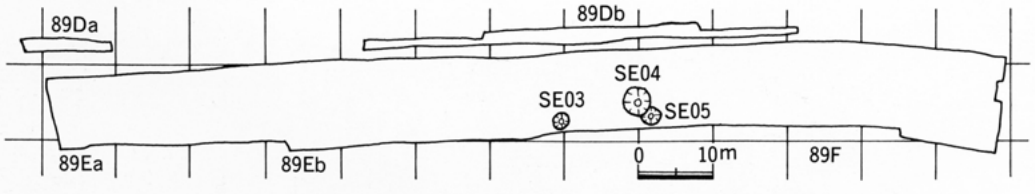
第28図　五条川西岸Ⅴ期遺構位置図（1/1000）





1 暗褐色砂質シルト
2 暗褐色砂質土
3 暗灰褐色砂質シルト
4 淡黒褐色砂質土
5 灰褐色シルト（鉄分まじり）
6 青灰色砂質シルト
7 暗灰色シルト
8 明青緑色砂
9 明灰色と暗灰色シルト互層

第30図　SE04平面図及び断面図



第29図　五条川東岸Ⅴ期遺構位置図（1/1000）

なった丸太を４本、柱と組み合わせて四角に組む。横たえた４本の丸太の上に切り欠きをつくった厚さ４㎝、幅30㎝ほどの板８枚を組み合わせて1.1m四方の井戸枠を組んでいる。各辺の中央付近には板の外側に竹もしくは細い丸太を10本ほど立て並べてある。内側には直径50㎝の曲物が２段重なって残っていた。掘形の埋土、井戸枠内、曲物内部から13世紀後半頃に比定できる灰釉系陶器が出土した。

ＳＥ05

同じく89Ｆ区で検出した井戸。検出面での掘形は、直径1.7m、深さ1.0m。14世紀前半の灰釉系陶器が出土した。

溝　ＳＤ16

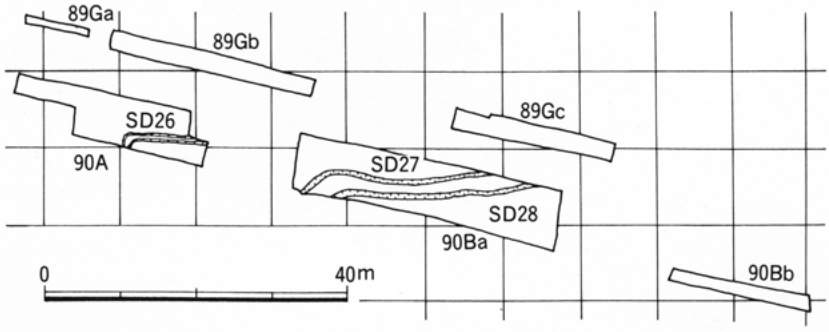
89Ａ・Ｂ区の下層で検出した溝。幅0.5～1.8m、深さ約0.3m。東西方向に走り、およそN60°Ｅ。わずかに灰釉系陶器の小片が出土。

ＳＤ17

89Ａ・Ｂ区の下層でＳＤ16と並んで検出した溝。規模、方向共にＳＤ16とほぼ同じ。戦国時代の遺構面より下で検出し、戦国時代の遺物をまったく含まず、灰釉系陶器の小片が出土。

ＳＤ26

90Ａ区で検出した溝。幅１～1.8m、深さ1.1m、東西に走るが、西端で南に折れ曲る。灰釉系陶器、古瀬戸、常滑窯産の甕などが出土した。



第31図　五条川東岸Ⅴ期の主要遺構

第32図　五条川西岸堀位置図

7　Ⅵ期の遺構

概要

五条川をはさんで東西約250mの位置で大規模な溝が見つかり、この範囲でⅥ期の遺構が確認できた。五条川西岸には岩倉城の主要部分が存在したと考えられ、東西120mの本丸は内部が溝で区画され、周囲は大規模な二重堀で囲まれていた。主殿があったと推定される本丸から西側は現代の攪乱や耕作などでかなり削平を受けており遺構の残存状態は悪かったが、東半分は表面が畑として耕作されていただけのため遺構の遺存状態はかなり良好であった。土坑やピットが多数検出された。

五条川の東岸250mの位置の溝は総堀と推定され外堀とほぼ同じ規模の溝で、五条川との間に同規模の溝がさらに２条確認され、ここにも岩倉城に付随する何等かの軍事施設や城下町が存在したものと想像される。

おもな遺構には、上述の堀に推定される大規模な溝７条、本丸内の区画溝４条を始め多数の溝、土坑、ピットなどがある。

外　　堀　ＳＤ01

63Ａａ、63Ｃ区で検出した。63Ａａ区はすべてが堀の中であり、堀の両端は確認できなかった。厚さ50cmの現代の整地層の下に廃材などがあり、堀の底は地表下３ｍ（標高5.5m）で確認。63Ｃ区では現在の地表から1.5m下に約40°で傾斜する堀の東側法面を検出した。さらに２ｍ下で底に達した。西側法面は調査区外になり、確認できなかった。地籍図と照合してみると堀の西側は、調査区の西を走る街道になることが容易に推定できることから、堀は街道と同じくN30°Wの方向に延び、幅約10m、深さ２ｍの箱堀と考えられる。底は平坦ではなくかなり起伏している。この堀の埋土は灰色粘質土であり、滞水性を示している。遺物は少なく、細片ばかりであるが、窖窯末期から大窯Ⅱ期までの瀬戸・美濃製の陶器が出土している。他に漆椀、木彫地蔵菩薩像が出土。

内　　堀　ＳＤ02

62Ｂ、63Ａｃ、63Ａｄ、63Ｂａ区で検出した。63Ａｄ、62Ｂ、63Ｂａ区で堀の東側の肩を標高約8.5mで検出。西へ約35°の傾斜で下がることが確認できた。方向はＳＤ01に平行

第33図　五条川東岸堀位置図

し、N30°W。63Ａｃ区はすべて堀の中で、地表下２ｍで明治時代の一括遺物を確認した。さらに下の灰色粘質土から土鍋や羽釜や同心円の圏線が内面にある灯明皿などが出土した。いずれも大窯期の遺物である。調査時期に雨天が多く、また調査区が狭いため周囲を急傾斜にしすぎたこともあり、周囲の壁が崩壊し、北側の民家にまで影響を及びそうであったため、底を確認することも土層図を描くこともできずに埋め戻さざるを得なかった。63Ｂａ区も調査区の幅が狭く、雨天が多いこともあり、安全確保のためやはり底を確認することなく埋め戻さざるを得なかった。この調査区の西端で、底と西側法面を確認するためパワーショベルで部分的に掘削したが、地表下4.5mまで下げても堀の底に達せず、西側法面も確認できなかった。なお63Ａｂ区では地表下1.5mで黒褐色（2.5Y3/2）粘質土が確認され、それより下は有機物の量の多少によって色の濃淡はあるものの水平な自然堆積を示していた。いずれからも遺物は出土しなかったし、遺構も何等確認できなかった。この場所はＳＤ01と02に挟まれた場所で幅約15mで南北にのびる帯曲輪のような場所であったと考えられる。したがってＳＤ02の推定規模は、幅約23m、深さは３ｍ以上になる。遺物はＳＤ01同様大窯Ⅰ・Ⅱ期が中心で、堀は16世紀前半と考えられる。

区画溝　ＳＤ03

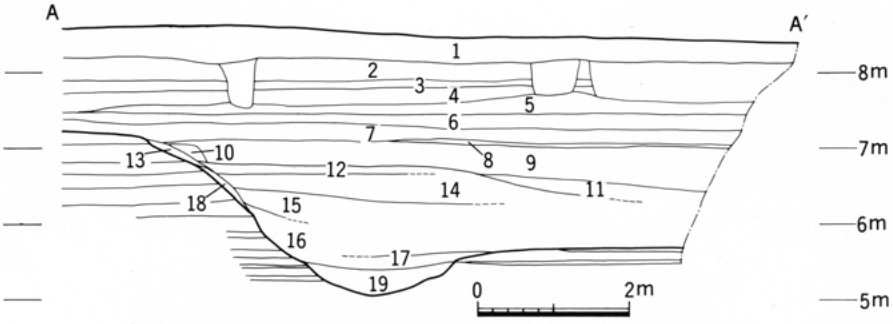
62Ａ、62Ｂ、63Ｂｃ区で現在の地表から約0.5m下、標高9.2mで検出。溝の規模は、およそ幅５ｍ、深さ２ｍ。方向はＳＤ01、02にほぼ平行しN30°W。埋没後、幅５ｍ、深さ1.5mで東へ１ｍずれた位置に掘り直されている。最初の溝をＳＤ03下層、掘り直し後の溝をＳＤ03上層とする。下層は滞水性を示す灰色粘質土が埋土で少量の土師質皿、青磁のほかに木製品が出土した。上層も埋土は灰色粘質土であるが、下層との境には西側から土師質皿の細片がわずかに混じる粗い砂が大量に落ち込んでおり、両者を区分する目安になった。上層の埋土中の遺物には、弥生時代後期の土器、円筒埴輪、古瀬戸、灰釉系陶器などもわずかに混じるが、大量の遺物のほとんどは土師質皿と木製品が占め、大窯Ⅰ・Ⅱ期の瀬戸・美濃製の陶器、常滑製の甕、青磁・白磁・染付が少量加わる。竹箕や茶筅も出土。

ＳＤ04

62Ａ区で標高8.9mで検出。ＳＤ03と直交する。調査時の所見によればＳＤ03上層に切られることからＳＤ03下層と同時期に存在したと推定。幅2.7m。深さ0.9m。長さ13m。土師器の皿や瀬戸・美濃の陶器、青磁のほか、埋土は下半分が灰色粘質土で滞水性を示すため、竹籠や下駄などの木製品も遺存していた。

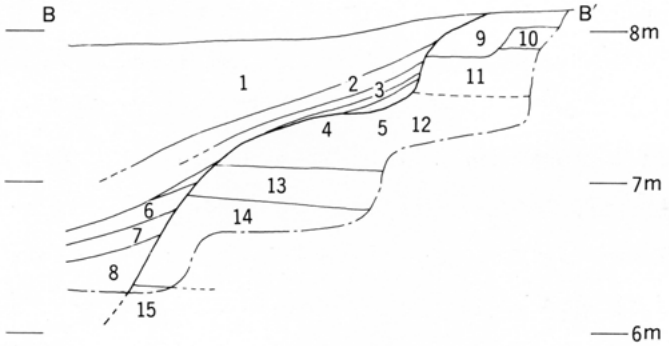
ＳＤ05

62Ａ区でＳＤ04の東の延長上で検出。北側が調査区外になるために幅は不明だが、ＳＤ04と同規模らしく、幅３ｍ、深さ１ｍほどと推定。残念ながら、防火水槽の掘削によってその大部分が破壊されており、確認できた長さは８ｍにすぎない。埋土は灰色粘質土で、かなり集中して土師器皿が出土した。瀬戸・美濃の陶器は少ない。箸、折敷などの木製品が多い。なお、ＳＤ04との間には掘り残しがあり、ここが土橋として利用されていたものと考えられ、上面は標高９ｍ、堅くしまっており、土橋の推定復元幅は２ｍ。



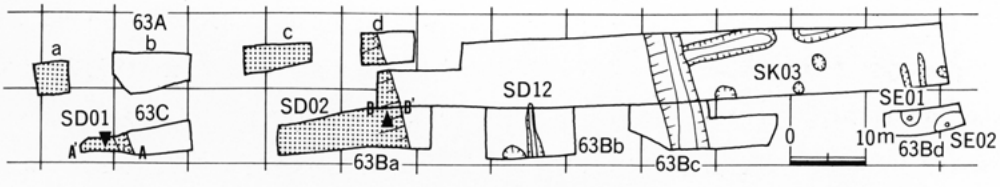
1 表土
2 暗褐色10YR3/3砂質土
3 〃 〃 シルト（鉄の斑文あり）
4 暗灰黄色2.5Y4/2シルト
5 暗灰黄色2.5Y4/2シルトと黒褐色2.5Y3/1シルトがまじる
6 オリーブ黒色5Y3/1粘質土
7 黒褐色2.5Y3/1粘質土
8 オリーブ黒色5Y3/1シルトと暗灰黄色2.5Y4/2細砂まじる
9 黒褐色2.5Y3/1シルト
10 暗灰黄色2.5Y4/2細砂
11 黒褐色2.5Y3/1シルト
12 黄灰色2.5Y4/1細砂
13 暗灰黄色2.5Y4/2細砂に黒色2.5Y2/1粘土ブロックまじる
14 灰色5Y4/1細砂
15 〃 細砂に黒色2.5Y2/1粘土ブロックまじる
16 〃 〃（15よりやや明るい）
17 黒褐色2.5Y3/1粘質土（灰色5Y4/1細砂まじる）
18 灰色5Y4/1細砂
19 黒褐色2.5Y3/1粘質土

第34図　SD01断面図

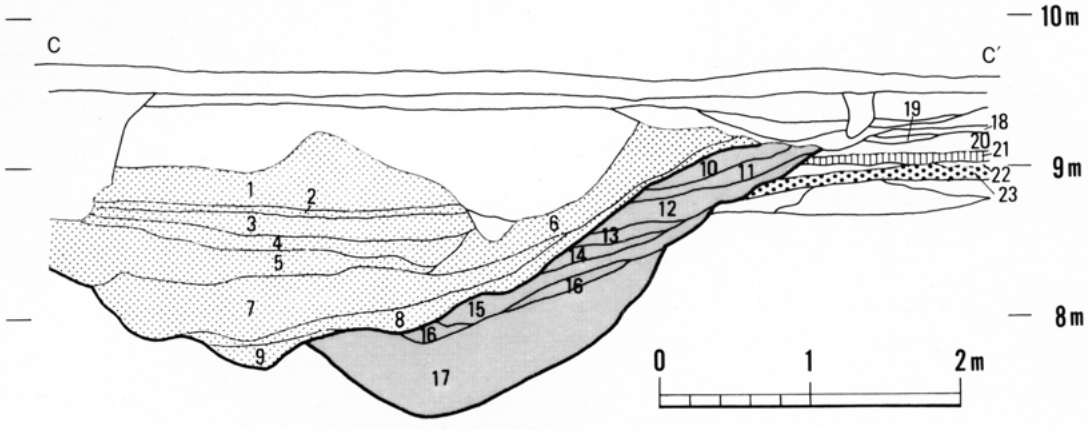


1 埋立土（φ1cmの黒色シルトブロック、φ0.5～1cmの灰色シルトブロック、多くまじる灰色砂質土）
2 〃 （1よりやや暗い）
3 〃 （2と同じ、木の削片多い）
4 〃 （灰色粘質土）
5 φ1cmの黒色シルトブロックまじりの灰色砂質土
6 黒色シルトブロック多くまじる灰色砂質土
7 灰色砂質土
8 黒色シルトブロック多くまじる灰色砂質土
9 黄灰色シルト
10 10に同じ（10よりやや明るい）
11 黄褐色細砂
12 灰色粗砂（湧水多い）
13 黒色有機質シルト
14 灰色砂 有機物まじる（湧水多い）
15 黒色有機質シルト

第35図　SD02断面図

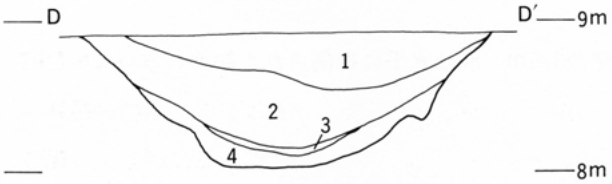


第36図　断面図実測位置図



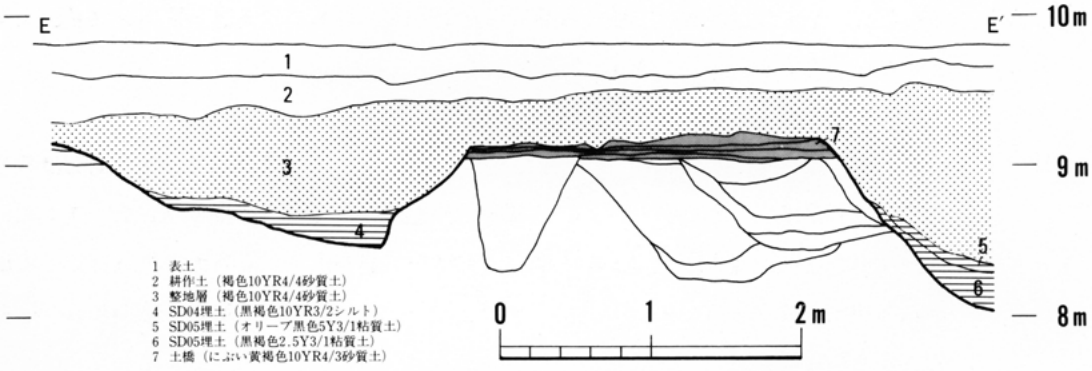
1 SD03上層（オリーブ黒色10Y3/1砂質土）
2 〃（オリーブ黒色7.5Y3/1砂質土）
3 〃（オリーブ黒色7.5Y3/1砂質土）
4 〃（暗オリーブ灰色2.5GY4/1砂）
5 〃（オリーブ黒色10Y3/1砂質土）
6 〃（黒褐色2.5Y3/2砂質土）
7 〃（黒色7.5Y2/1粘質土）
8 〃（黒色7.5Y2/1粘質土）
9 〃（灰色7.5Y4/1粘質土）
10 SD03下層（にぶい黄褐色10YR4/3砂質土）
11 〃（オリーブ褐色2.5Y4/3砂）
12 〃（にぶい黄褐色10YR4/3砂質土）
13 SD03下層（黄褐色10YR5/6砂）
14 〃（暗褐色10YR3/4シルト）
15 〃（灰オリーブ色5Y4/2砂）
16 〃（暗オリーブ褐色2.5Y3/3砂質土）
17 〃（オリーブ黒色2.5Y3/3砂質土）
18 〃（にぶい黄褐色10YR4/3砂質土）
19 〃（褐色10YR4/4砂質土）
20 〃（暗褐色10YR3/3砂質土）
21 焼土層（赤褐色5YR4/8焼土）
22 〃（にぶい黄褐色10YR4/3砂
23 14世紀遺物包含層（にぶい黄褐色10YR4/3砂）

第37図　SD03断面図



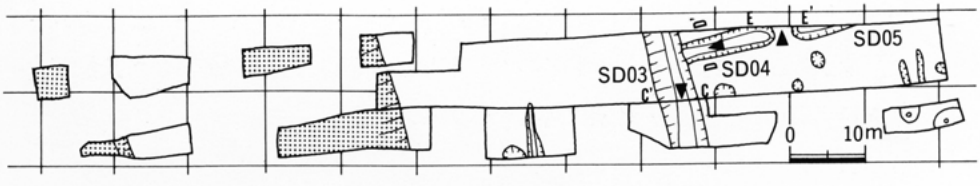
1 暗オリーブ褐2.5Y3/3砂質土、暗オリーブ5Y4/3シルトブロック混、鉄析出
2 暗灰黄2.5Y4/2砂質土　灰オリーブ5Y5/2砂、層状に入る
オリーブ色5Y3/1シルト小ブロック）混
暗オリーブ5Y4/4シルト小ブロック）
3 オリーブ黒5Y3/1粘土、炭化物わずかに混
4 灰黄2.5Y4/1砂質土、黄灰2.5Y5/1細砂、薄く層状に入る

第38図　SD04断面図



1 表土
2 耕作土（褐色10YR4/4砂質土）
3 整地層（褐色10YR4/4砂質土）
4 SD04埋土（黒褐色10YR3/2シルト）
5 SD05埋土（オリーブ黒色5Y3/1粘質土）
6 SD05埋土（黒褐色2.5Y3/1粘質土）
7 土橋（にぶい黄褐色10YR4/3砂質土）

第39図　土橋断面図



第40図　断面図測図位置図

ＳＤ06

89Ａ区西端で検出した溝。方向はＳＤ01～03と平行しN30°Wに延びる。幅３ｍ、深さ1.7m。いったん埋没後、やや東側へずれて掘り返されている。新しい溝の埋土は暗褐色～暗青灰色シルトで、大量の土師質皿や瀬戸・美濃の陶器が出土した。古い溝の埋土は灰色粘質土で滞水性を示し、下駄や箸などの木製品が多量に出土した。規模や掘り返しのある点、遺物の多さなど、この溝はＳＤ03と類似点が多く、溝の規模から堀といい得るものの、防御というより本丸内を区画する機能を持つ溝と考えられる。

区画溝

ＳＤ07

89Ｂ区で検出した幅20m、深さ７ｍの堀である。方向はやはりＳＤ01～03とほぼ同じ。西側は約30～55°、東側は約50°で法面が傾斜しており、湧水のため全部を確認できなかったが底はほぼ水平になる箱堀と推定できる。埋土は暗青灰色シルトで、滞水性を示し、最下層から大窯Ⅰ・Ⅱ期の瀬戸・美濃製陶器が僅かに出土した。規模からＳＤ02に匹敵し、時期的にも矛盾せず、両者が本丸を取り囲む内堀と推定できよう。なお調査区外になるが廃土置き場の関係から堀の北側20m付近を調査することができ、この辺りでSD07が緩く西へ曲がることを確認した。

内堀

ＳＤ08

89Ｃ区で検出した堀。幅約12m、深さ3.5m。底は水平に掘削された箱堀。方向はＳＤ07に平行する。埋土の最下層は黒褐色シルトで、滞水性を示す。遺物は少ないものの擂鉢、天目茶碗、四耳壺などの瀬戸・美濃製陶器が出土した。大部分が大窯Ⅰ期に属し、Ⅱ期に属するものはほとんど無い。調査区の南壁においてこの堀の断面部分で小規模な断層を確認できた(Ⅳ－４、P127参照)。層位から天正地震に際して発生した断層の痕跡の可能性が考えられる。なおＳＤ08とすぐ西のＳＤ07との間は約20mあり、遺構が検出されず、土塁などの存在の可能性が高いが確認できなかった。

外堀

ＳＤ09

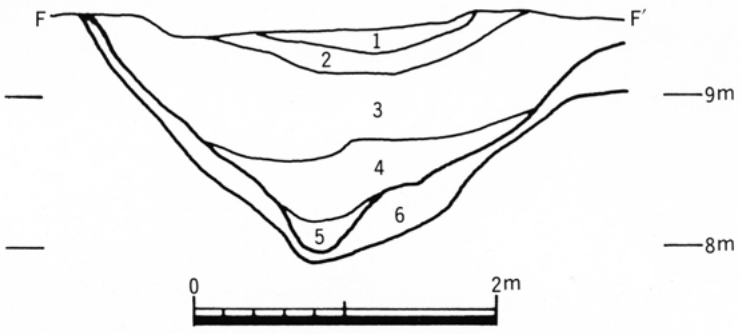
五条川の東約20m、89Ｄａ、Ｅａ区で検出した。幅８～９ｍ、深さ2.5m、断面は緩やかなＶ字形の薬研堀。ＳＤ01～03、07、08に平行する。埋土は暗灰褐色砂質土シルトで、滞水性は示さない。遺物は大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃の陶器が出土。五条川に接近していることから当初堀を検出することをまったく予期しなかったが、規模、遺物の時期から、堀と認めざるを得ない。

ＳＤ10

89Ｄｂ、89Ｆ区、ＳＤ09の東約70mで検出。幅８～９ｍ、深さ2.5～３ｍ、断面は緩やかなＶ字形である。今まで述べた堀とは異なり、N50°WからＮ５°Wへと途中で大きく屈曲する。埋土は暗茶褐色砂質シルトで、この事からＳＤ10は空堀であった可能性が高い。やはり瀬戸・美濃の大窯Ⅰ・Ⅱ期の遺物が出土した。

ＳＤ11

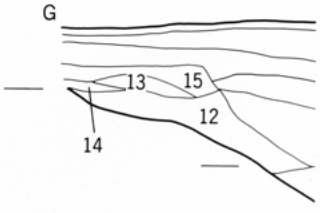
ＳＤ10よりさらに東150mの位置、90Ｂｂ区で検出した。中央を生活道路のため掘り残さ

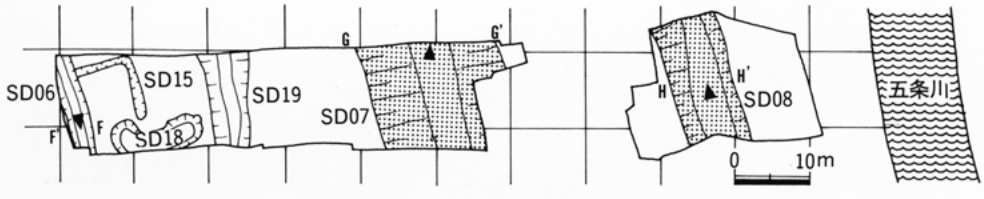


1 褐色砂質シルト（黄褐色砂ブロック）
2 暗褐色砂質シルト（炭化物、土師皿若干）
3 暗褐色シルト（炭化物、土師皿多量、灰褐色シルトブロックまじる）
4 暗青灰色シルト炭化物、土師皿木製品若干）
5 淡青灰色砂と灰褐色シルトの互層
6 灰褐色シルトと黄褐色砂の互層

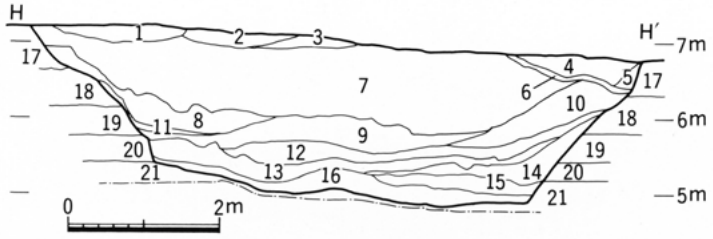
第41図　SD06断面図

1 盛土
2 耕作土
3 褐色砂質土
4 褐色砂質シルト
5 茶褐色砂質シルト
6 黄褐色砂質土
7 暗褐色シルト
8 茶褐色・灰褐色砂の互層
9 淡青灰色砂
10 暗灰褐色シルト（青灰色砂と黒褐色シルトブロックまじり）
11 淡青灰色砂質シルト（暗茶灰色・黒色シルトブロックまじり）
12 黄褐色砂（茶褐色・灰褐色シルトブロックまじり）
13 黄褐色砂
14 茶褐色シルト・灰褐色砂・暗茶褐色砂の互層
15 灰白色シルト（黒褐色・灰白色他シルトブロックまじり）
16 暗青灰色シルト（黒褐色シルト他ブロックまじり）
17 暗灰褐色砂・暗褐色シルトの互層
上層はシルト砂ブロック含む
下層はシルト層が厚く黒褐色シルトブロックまじり



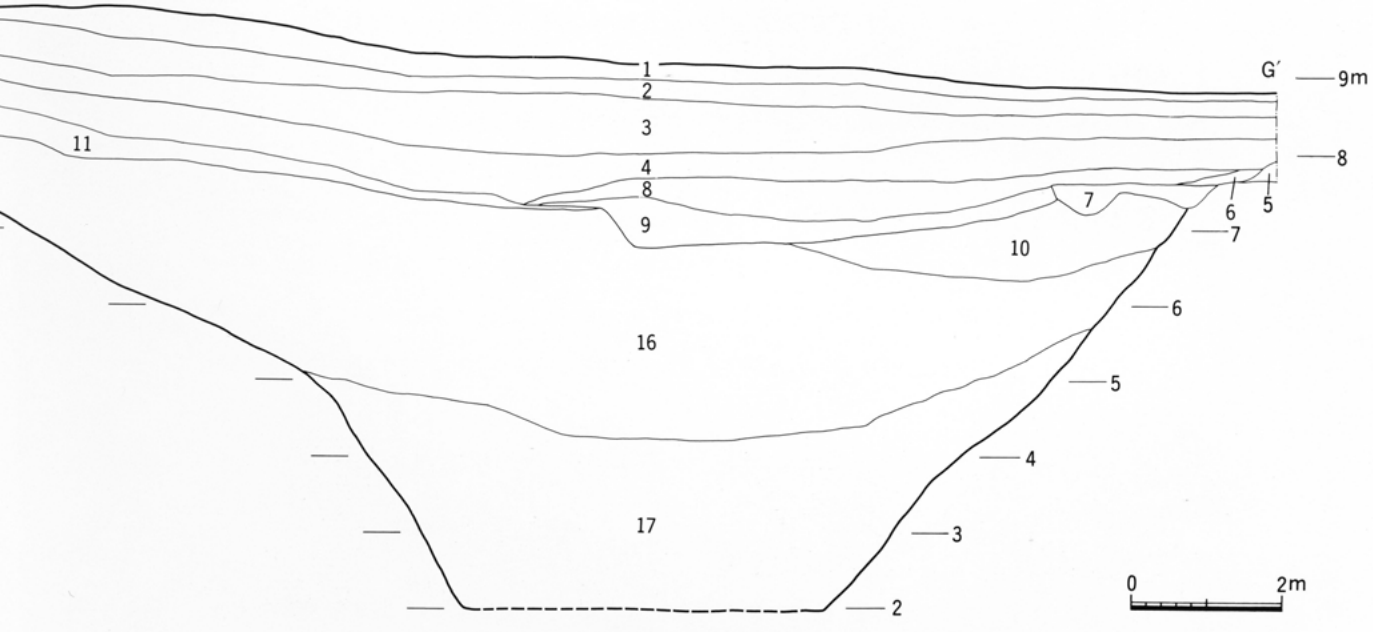


第42図　断面図実測位置図



1 暗褐色砂質シルト（上層は鉄分を多く含む）
2 褐色砂質土（灰褐色シルトが筋状に入る、鉄分含む）
3 暗褐色細砂（灰褐色シルトが筋状に入る、鉄分含む）
4 褐色砂質シルト（砂質淡、鉄分多く含む）
5 灰褐色砂質シルト（灰褐色砂をブロック状に含む、鉄分多く含む）
6 暗褐色砂質土（鉄分が筋状に入る）
7 暗褐色砂質シルト（少し青味がかる）
8 明青緑色細砂
9 黒灰褐色砂質シルト（暗灰褐色砂をブロック状に含む）
10 青灰色砂質シルト（暗灰褐色シルト、砂シルトを含む）
11 明灰褐色砂
12 暗黒褐色砂シルト
13 暗青色砂
14 暗青灰色細砂（黒褐色シルトをブロックで含む）
15 暗青灰色砂（13よりはやや明るい）
16 黒褐色シルト
17 灰褐色砂シルト（植物茎を多量に含む）
18 暗灰褐色粘土質（植物茎を含む黒色シルトをベルト状に挟む）
19 暗黒褐色砂シルト（青灰色砂を含む）弥生時代遺物包含層
20 暗灰色砂
21 灰褐色粘土質土（黒色シルトをベルト状に挟む）弥生時代基盤

第43図　SD08断面図



第44図　SD07断面図

ざるを得なかったが、東と西の法面を確認できた。幅10m、深さ３m、断面箱形の堀。埋土からの遺物は極めて少ないが、大窯Ⅰ期の瀬戸・美濃の天目茶椀などが出土した。この溝を境として、東側からはまったく戦国期の遺構・遺物が見られず、岩倉城の東限を示す堀といえる。

ＳＤ12

63Ｂｂ区で検出した溝。南北に堀とほぼ平行して伸びる。幅２m、深さ１m、長さ８m、南端２mより北は最近の耕作によってかなり深く削平をうけている。茶臼のほかには僅かに戦国期の陶磁器が出土した。

ＳＤ15

89Ａ・Ｂ区で検出した溝。ＳＤ06から東に９m延び、ほぼ直角に南に曲がり、８m延びて終わる。

ＳＤ16

89Ａ・Ｂ区でＳＤ06とＳＤ07の中間で検出した溝。幅５m、深さ0.4m。

ＳＤ18

89Ａ・Ｂ区でＳＤ06が南へ曲がった突き当たりで検出。東西12m、南北４m。

ＳＤ20

89Ｅ区で検出した溝。幅2.5m、深さ0.8mで少し湾曲するが、ＳＤ09とＳＤ10を結ぶ。

ＳＤ21

89Ｅ区で検出した南北に伸びる溝。幅1.5～２m、深さ１m。ＳＤ10に切られる。

井　戸　ＳＥ01

五条川の西、記念碑のすぐ北側の63Ａｄ区で確認した井戸である。検出面は標高8.2mと高いが、湧水などの影響で調査が徹底的には実施できなかった。掘形直径２mで、直径0.5～0.8mの竹のタガのみが上下５段残っていた。結桶の井戸を廃棄するに際して、側板を再利用するべく抜き去ったため、タガがそのまま地中に取り残されたもの。掘形の埋土から大窯期の天目茶椀の破片が出土したのでⅥ期の遺構と断定した。

ＳＥ02

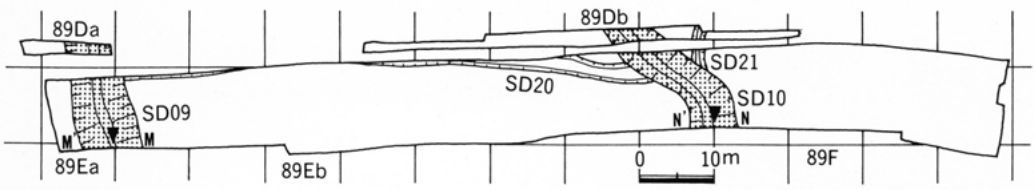
63Ａａ区のＳＥ01の東で確認。掘形はかなり漠然として捉えがたかった。竹のタガと木製の楔のみが残存。この井戸も本来は結桶を内部に持つもので、井戸の廃絶時に桶を抜き取ったものである。遺物はほとんど何も出土せず、また底まで調査することができなかった。検出面がＳＥ01と同じであり、井戸の構造も同じであることからほぼ同時期の遺構と推定。

ＳＥ06

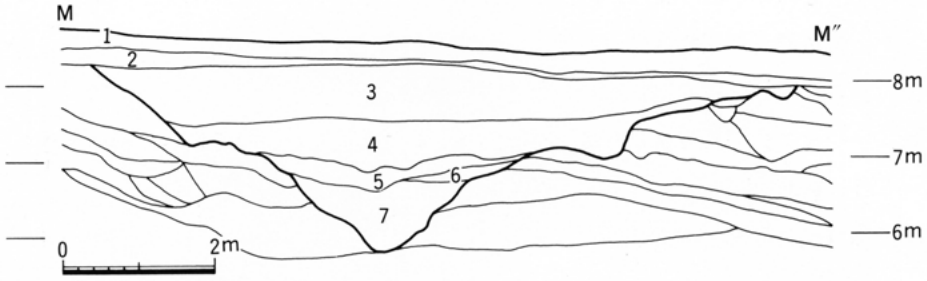
90Ａ区で検出した結桶を用いた井戸。掘形の直径２m、桶の直径0.5m。深さ２m。桶の残存状況はかなり良好。

廃棄土坑　ＳＫ03

62Ａ区で検出した廃棄土坑。長径２m、短径1.5m、深さ0.75m。土師器皿を大量に出土。他に瀬戸・美濃窯産の天目茶椀の細片１点と香炉１点を出土した。　（松原隆治）

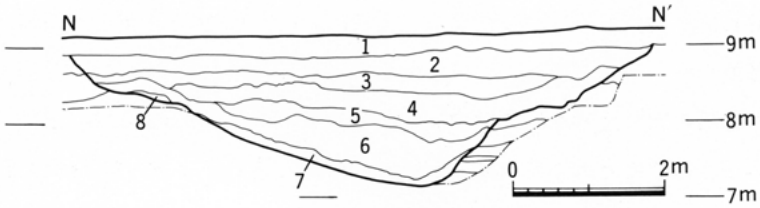


第45図　断面図実測位置図



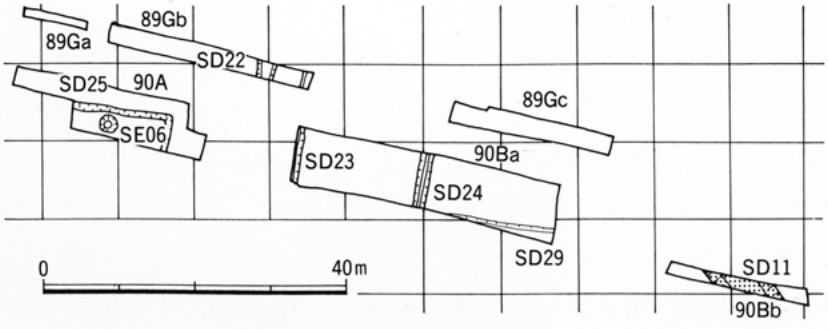
1 耕作土
2 暗褐色砂
3 暗褐色砂質土
4 淡基褐色シルト含む灰褐色砂
5 暗オリーブ砂と暗灰褐色シルト
6 淡青灰色砂
7 黄褐色と灰褐色シルトの互層

第46図　SD09断面図



1 暗褐色砂質土
2 暗褐色砂質土（1より砂質の割合が少なく、締まっている）
3 茶褐色砂質土
4 灰褐色砂質土
5 暗灰褐色砂質土
6 暗茶褐色砂質シルト
7 黄褐色砂に明灰色シルトを含む（SD05の底と考えられ最下底部に沈鉄層をつくる）
8 褐色砂質土

第47図　SD10断面図



第48図　90A区、B区Ⅵ期遺構位置図

III　遺物

1　I期の出土遺物

(1)　縄文晩期の遺物

縄文晩期の遺物は細片が多く、全体の形状の判明する資料は少ない。以下、遺構より出土した資料を中心に説明していきたい。

竪穴住居（第49図１～８）

SB1102　いずれも細片であり、器形等不明な部分が多い。口縁部の状況が判明する資料として、１・２がある。１は、器面を貝殻ケズリによって調整する粗製土器であり、端部は丸く収める。２の口縁端部は平坦に仕上げられ、口縁直下には幅広の浅い沈線が２条認められる。他は体部の細片であり、３・４は条痕調整を施す。

SB1003　量的には、最も多く出土したが、他の遺構出土資料と同様に細片が多い。口縁部の状況をある程度推定できる資料として、５・６がある。５は口縁直下に突帯を巡らす。６は、口縁端部を丸く収める粗製土器である。体部の調整は、ケズリおよび条痕による調整がみられる。９・10・11は、器面を板状工具によってケズリあげたものであり、９・10は砂粒の動きが顕著である。８・12は貝殻を使用して器面を調整したものであり、12の内外面ともに条痕の痕跡が残る。７は、器面に２状の平行沈線と縄文を施したものであり、他地域との関連が考えられる資料である。

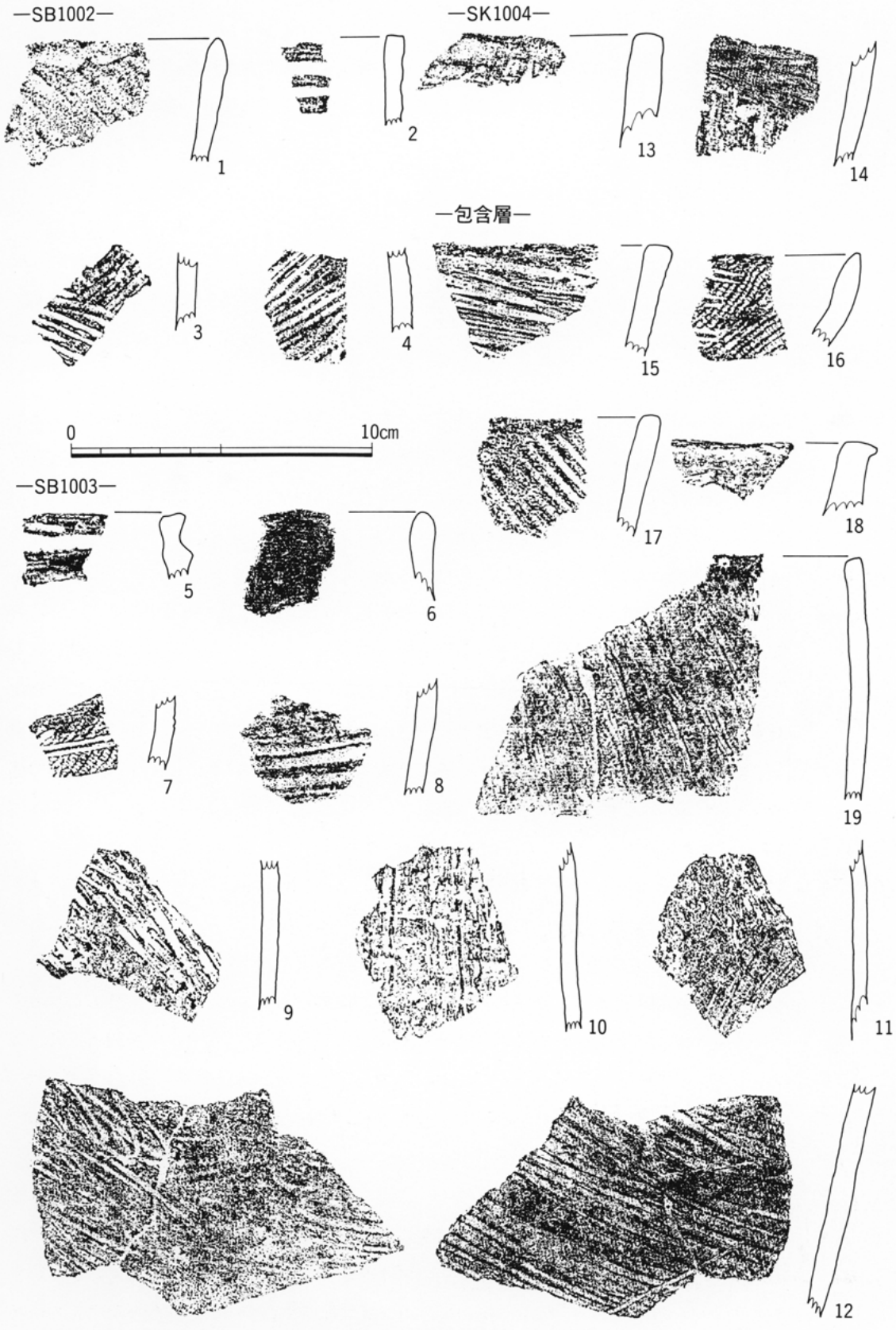
土坑（第49図13～14）

SK1004　13は口縁端部を面取りし、平坦に収める粗製土器の口縁部片であり、14は器面を板状工具によりケズリ上げた体部片である。

包含層出土遺物（第49図15～19）

15は、貝殻条痕が施される粗製土器であり、口縁端部は面取りされ平坦に収められる。17も同様に器面には条痕が施され、口縁端部は平坦である。18・19は器面を板状工具によりケズリ上げたものであり、18の口縁端部は、面取りに伴う粘土のはみ出しが認められる。19の器面には砂粒の動きが顕著に残る。また、16は器面に縄文を残しており、他地域との関連が考えられる資料である。

以上、紹介をしてきた資料は、大半の資料が文様等を施さない粗製土器であり、時期決定を行ううえにおいて決め手となる要素に欠ける。しかし、わずか１点ではあるが突帯を施す資料がみられること、粗製土器の口縁端部は面取りされた平坦な形状を示すものが多くみられることなどより、縄文晩期終末期に位置付けることができるであろう。



第49図　Ⅰ期縄文晩期の遺物（1：2）

(2) 弥生中期

弥生中期の遺物の遺物は、細片が多く全形を窺うことのできる資料は少ないが、概ね中期中葉・貝田町式期を主体とする遺物と考えられ、その様相は南方に隣接する曽野遺跡のあり方と酷似している。

溝（第50図　20～40）

SD1101　壺と深鉢がある。20は条痕を器面に施した壺の口縁部片であり、口縁部はやや受け口状となる。21・22は貝田町式期の細頸壺であり、22は円形浮文が残る。23・24は壺の体部片であり、23は羽状のヘラ描き文を、24には貝殻刺突が認められる。15は口縁内面に刺突を残す条痕の深鉢である。

SD1102　26は、口縁内面に刺突と波状文を施す条痕の深鉢であり、27・28は壺の体部片である。28は櫛描き横線文帯びをはさみ、無文帯が残るので細頸壺と思われる。

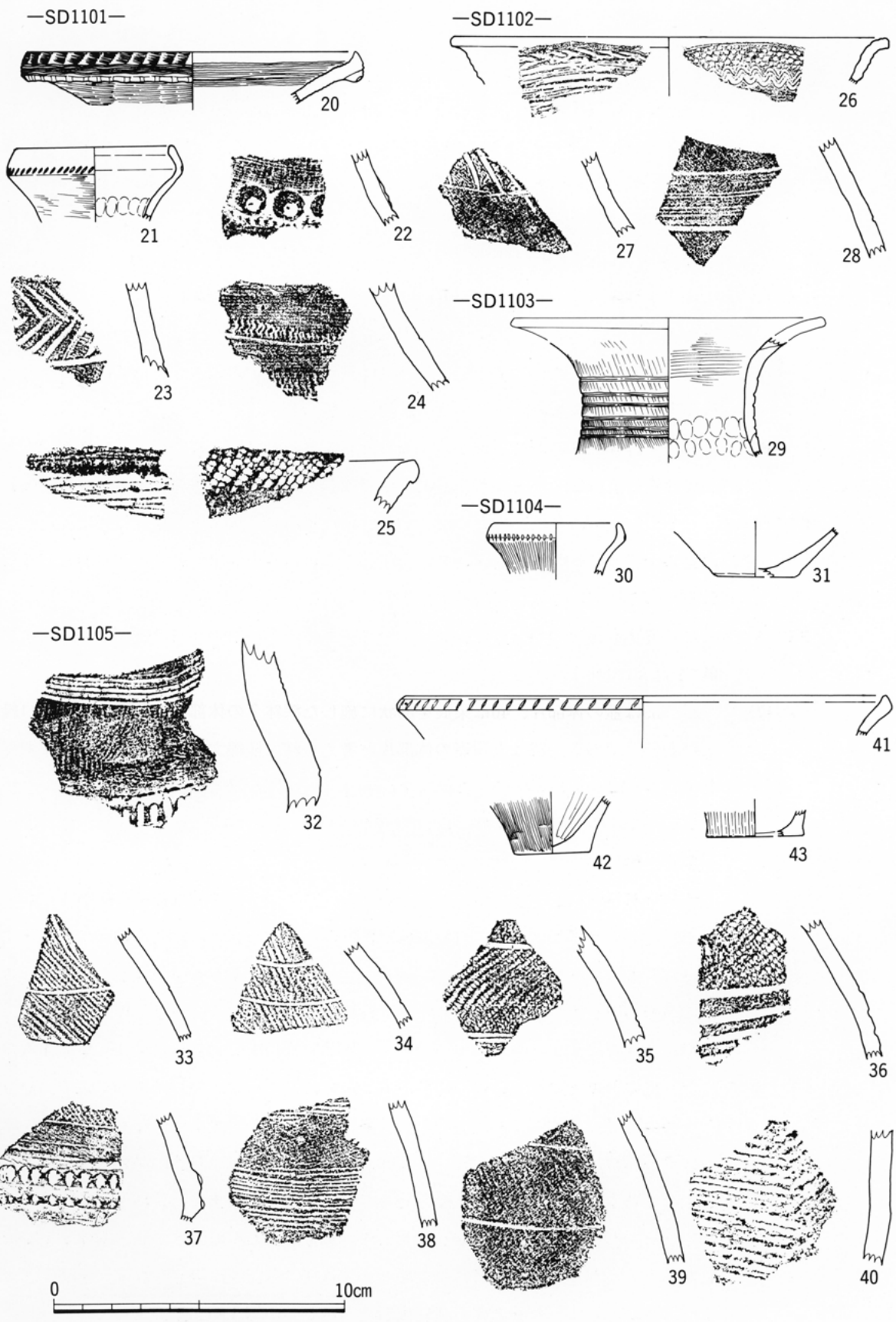
SD1103　わずか1点のみの出土であるが、29は貝田町式期の太頸壺であり、頸部は長く直立気味に立ち上がり、ヘラ描き沈線文を6条施している。内面は横位のハケメを残し、頸部から体部への変換点には指圧痕が明瞭に確認できる。

SD1104　この遺構も遺物の出土量は少なく、30の細頸壺の口縁部片と31の壺底部片をわずかに確認できたにすぎない。

SD1105　32～39は壺の体部片、40は条痕を羽状に施した深鉢？の体部片、41～43は甕の口縁部および底部片である。32は太頸壺の体部片と考えられ、横線文およびヘラの刺突を器面に施している。35・36は単斜方向の縄文を施したものであり、当地方の中期の土器にままみられるものである。37・38は細頸壺の体部片であり、37は突帯上に刻みを残している。

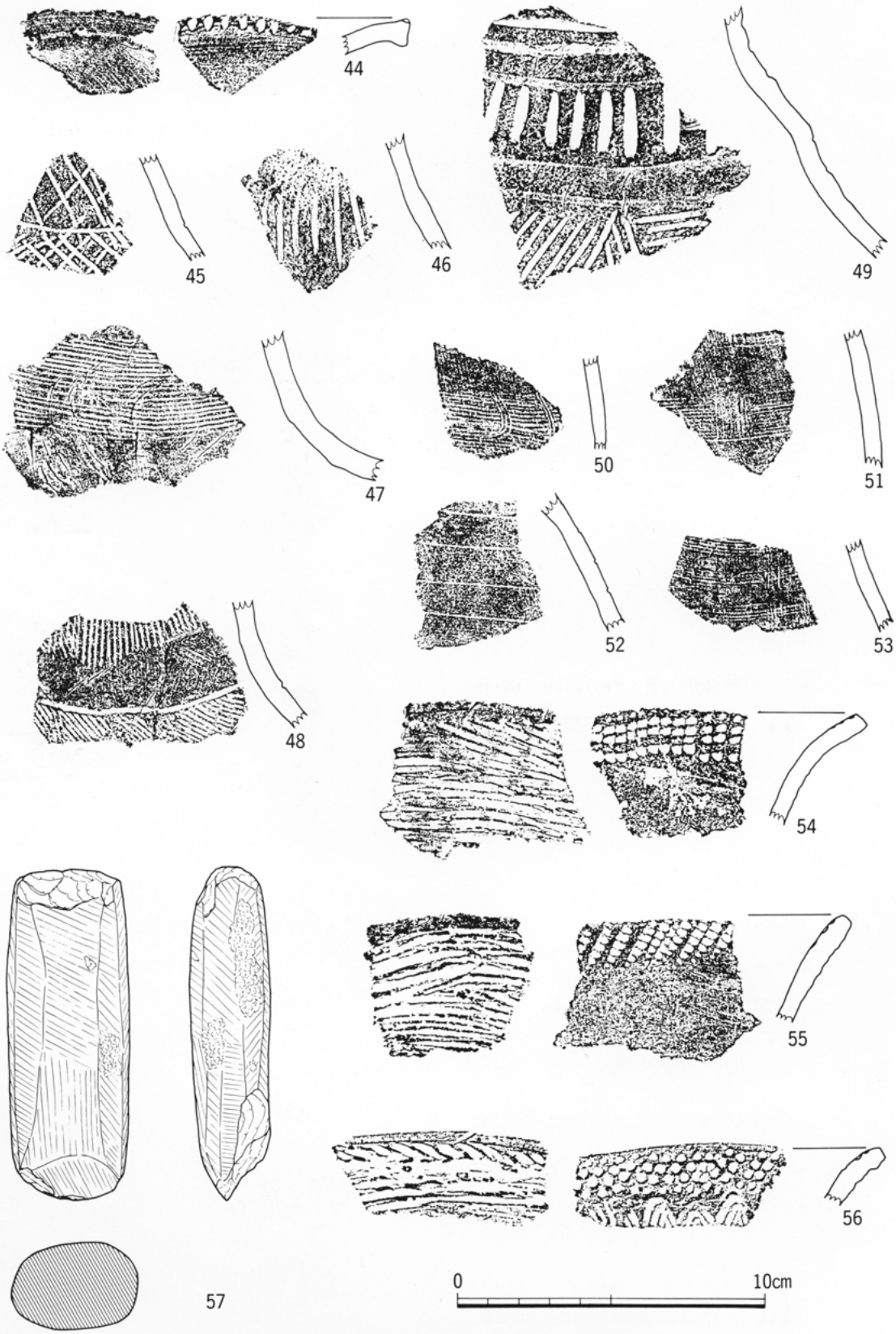
包含層（第51図）

土器と石器がある。まず土器であるが、44～53は壺、54～56は深鉢口縁部片である。44は広口壺の口縁部片であり、口縁端部上位に刻みを施している。45・46はヘラ描き文が認められるものであり、45は1条の沈線を介して、その上下に斜格子文が施されている。47は太頸壺の頸部片であり、多条の櫛描き横線文が認められる。48は器面上に2段にわたって単斜方向の縄文が施されるものである。49は、太頸壺の頸部片であり、尾張地方北東部にその分布が顕著にみられるものである。施文は、沈線文が最初であり、以下、縦位の刻み、複合鋸歯文の順となる。50～53は、櫛描き横線文帯と無文帯が交互に配されており、細頸壺の体部片である。54・55は、口縁内面に刺突を施した条痕の深鉢であり、56も同様のものであるが、刺突下に波状文を施しており、春日井市勝川遺跡出土資料中に類例が認められる。石器には、57の磨製石斧がある。部分的に敲打痕を残すが、全体によく研磨されており、上部は部分的に破損しており、装着痕の可能性が考えられる。また、図示はしなかったが、他に、ガラス質石英安山岩（下呂石）の剝片が少量出土している。



第50図　Ⅰ期弥生中期の遺物（1：2、実測図は1：4）

—包含層—



第51図　Ⅰ期弥生中期の遺物（1：2）

2　II期の出土遺物

今回の岩倉城遺跡の発掘調査は、五条川の両岸に発達する自然堤防帯を貫く形で実施されたため、遺構の項でも述べたように、居住域が展開する地域、旧河道へ落ち込んでいく変換点で確認された特異な遺構群、墓域の展開する地区といったように明瞭にII期の集落の様相をつかむデータを得ることができた。当然、それらにともなう良好な遺物も多数出土しており、以下、遺構出土の遺物を中心に記述していく。

II期の遺物を以下の通りに分類する。

［分類］

壺A　（広口加飾壺）

垂下・拡張口縁部に擬凹線を配し、各部に赤彩を施したいわゆるパレス・スタイルの壺を総称する。

A１　口縁内面に段を有さないもの

A２　口縁内面に明瞭な段を有するもの

壺B　（広口壺）

口縁部が大きく外方に開く広口壺。

B１　口縁部が外反し頸部が長いもの。

B２　口頸部が外傾し直線的にのびるもの。

壺C　（長頸壺）

口頸部が内湾気味に立ち上がる中・小型の長頸壺である。

壺D　（短頸壺）

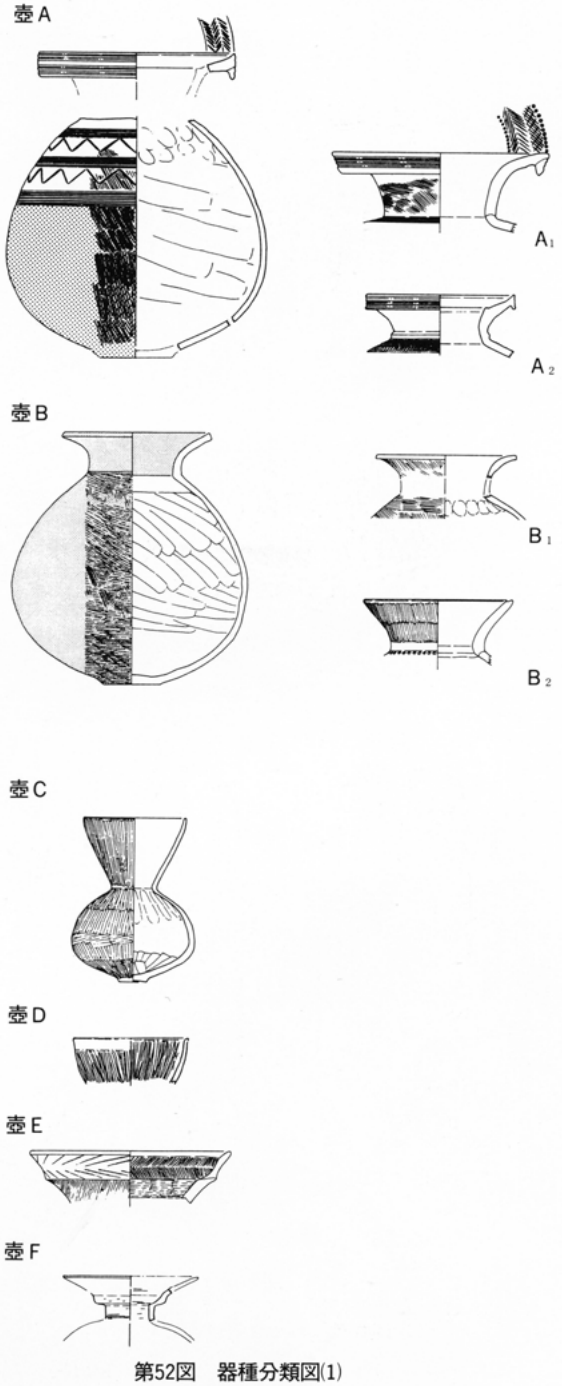
口頸部が短く立ち上がり、口縁端部が微妙に外反する、いわゆるヒサゴ壺を総称する。

壺E

口縁部が二重口縁的な形態を示し、羽状の櫛刺突を施すいわゆる柳ヶ坪タイプの壺

壺F

二重口縁壺



第52図　器種分類図(1)

甕A　（くの字甕）

口頸部が「くの字」状に屈曲するくの字甕を一括する。

甕B　（受け口甕）

口縁部が鋭く屈曲し、端部に明瞭な面を有し、底部は平底となる受け口甕。

甕C　（受け口状口縁台付き甕）

口縁部が屈曲して立ち上がり、台部を有する受け口状口縁台付き甕。

C１　口縁部は鋭く屈曲するが、その形状は摘み上げ状である。

C２　口縁部は短く屈曲し、端部に明瞭な面をもつもの。

C３　口縁部が内湾気味に立ち上がるもの。

甕D　（S字状口縁台付き甕）

D１　押し引き刺突をもち、口縁中段以上はほぼ垂直に立ち上がるもの。（A群）

D２　口縁部上段・下段の発達。上段のヨコ方向への突出が顕著となる。（B類）

D３　口縁部の屈曲が外方へ大きく拡張するもの。（C類）

D４　口縁端部に明瞭な肥厚した面をもつもの。（D類）

甕E　器面にタタキをほどこすもの。

鉢A　口縁部は受け口状となり、口径と体部最大径がほぼ等しいもの。

鉢B　口縁部は受け口状となり、口径が体部最大径を凌駕するもの。

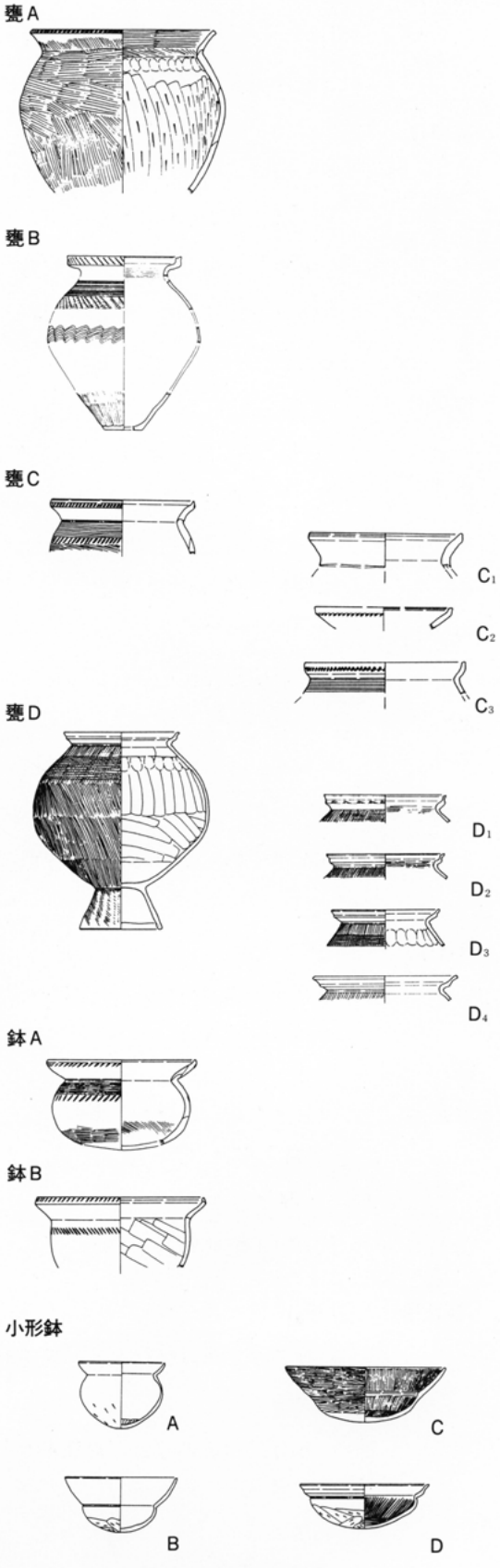
小形鉢

A　短く外傾する口縁をもつもの。

B　いわゆる小形丸底土器。

C　口頸部がやや内湾気味に外方にのび、大きく開いた口縁部をもつもの。

D　畿内系の有段鉢。



第53図　器種分類図(2)

高杯A

杯部が浅く外反し、外反する脚部を有するもの。

高杯B

B１　口径と稜径の差が少なく、杯部は比較的浅い。脚部は比較的長脚となる。

B２　杯部・脚部ともに内湾化が顕著となり、杯部は深くなる傾向が認められるもの。

高杯C

脚部は円錐状に外反し、杯部は浅く、大きく外傾するもの。

高杯D

半球状の杯部をもつ高杯。

高杯E

脚部が短く外反・屈折する有稜高杯。

高杯F

ワイングラス形高杯。

高杯G

裾部で屈曲する脚部を有する畿内型高杯。

小形高杯

半球状の杯部を持ち、脚部が大きく外方にのびるもの。

器台A　外反する脚部を有するもの。

A１　脚部が長いもの。

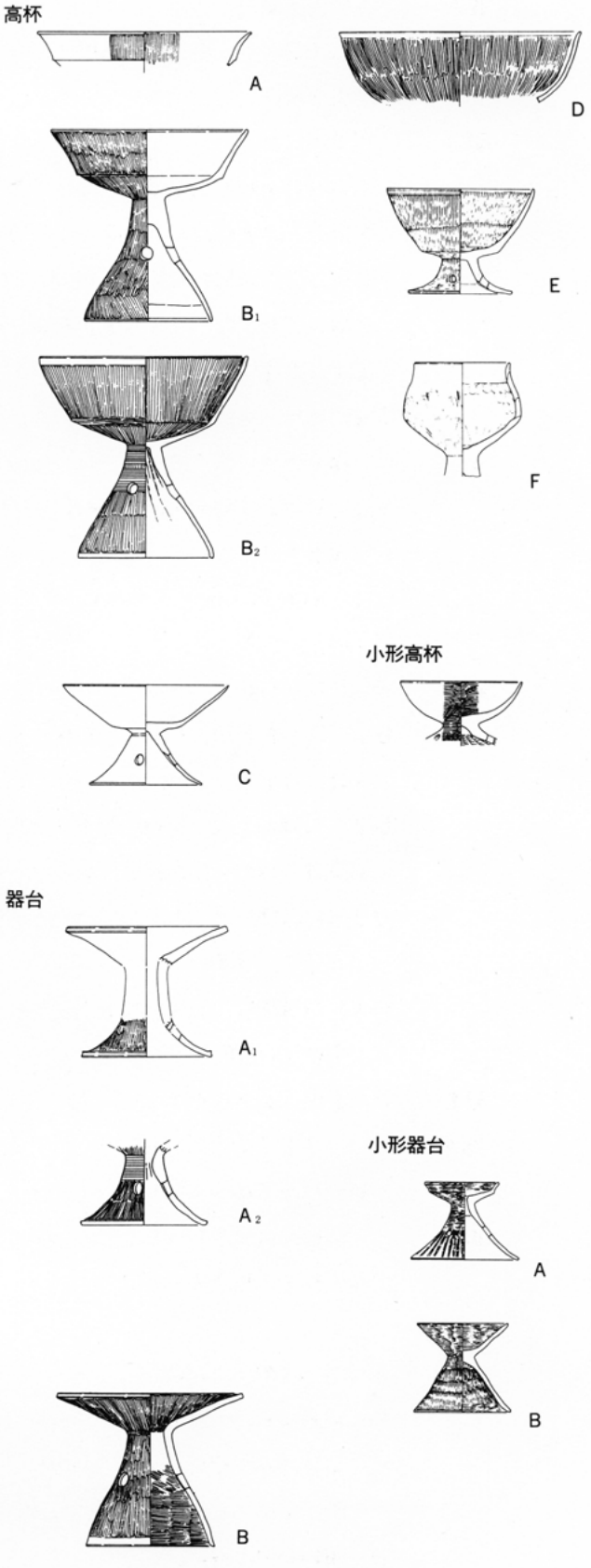
A２　脚部が短いもの。

器台B　円錐状の内湾脚をもつもの。

小形器台

A　外反する脚部に、皿状の受部をもつもの。

B　山陰系の鼓形器台に類似するもの。



第54図　器種分類図(3)

A地区遺構出土遺物

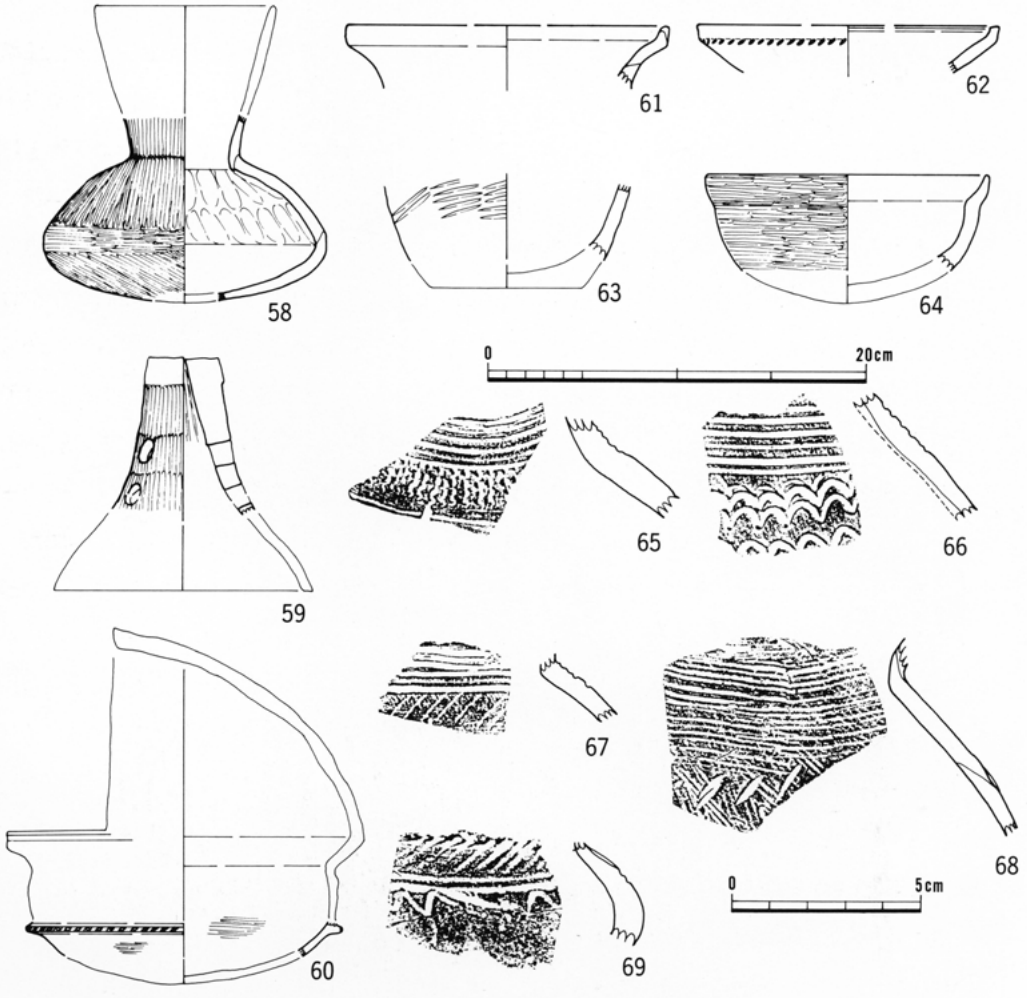
竪穴住居（第55図～第59図）

SB1201　SB1201より出土した土器は、壺、甕、高杯、鉢がある。しかし、全体の形状を窺うことのできる資料は極めて少ない。

壺…58は口径部の大半を欠損するが、長頸壺（壺C）であり、体部は偏平で最大径は中位に持つ。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指押さえで仕上げる。65・66は壺Bの体部片であり、直線文下に貝殻刺突・ヘラ描き波状文を施す。

甕…細片のみであり、鉢との区別が困難であるが、63を除きすべて受け口状の口縁を持つ台付き甕である。61・62は鋭く屈曲し、立ち上がりの短い口縁部片であり、端部には明瞭な面を持つ（甕C 2）。67・68は体部上半の破片であり横線文下部にヘラ、ハケメ原体による刺突を加える。63は外面にタタキを施す平底の甕Dである。

高杯…59は、杯部を欠損するが、内湾気味に下方に広がる脚部片である。2段にわたって、



第55図　SB1201出土遺物（1：4、拓図は1：2）

穿孔する（高杯Ｂ２）。

鉢…64は、浅い体部に、口縁内面を強くナデ上げることによって、短く内湾気味に立ち上がる口縁部を作り出している。69は、受け口系口縁をもつと考えられる鉢であり、ヘラによる刺突、横線、波状文を施している。60は手焙形土器である。細片であり、全体の形状は不明であるが、鉢部を巡る突帯部分と考えられ、突帯上には刻みを施す。

ＳＢ1204　ＳＢ1204からは、比較的良好な遺物がまとまって検出された。大きく壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

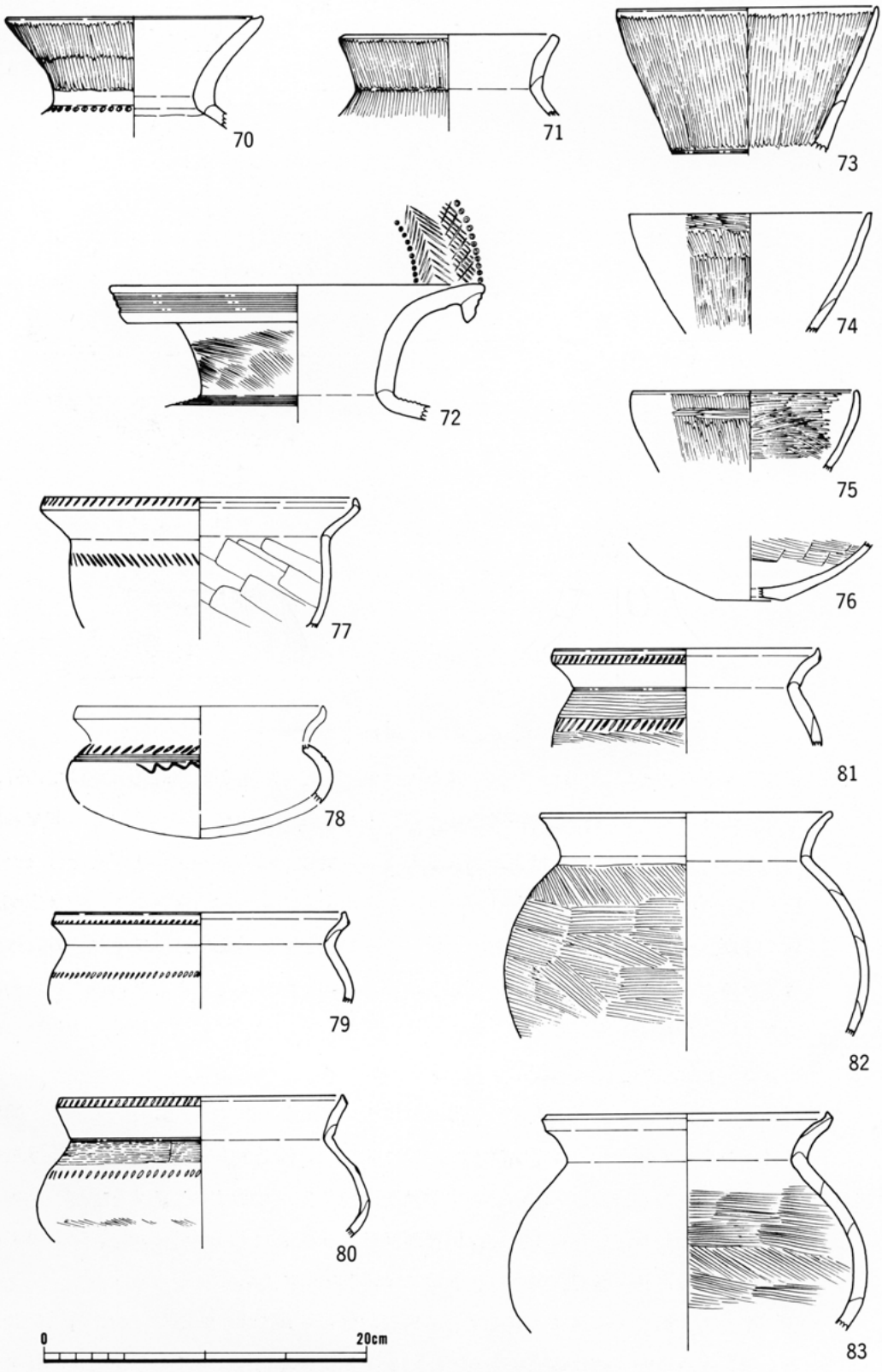
壺…70は、外方へ直線的に広がる口頸部片であり、頸部に円形の刺突を施す。71は、短く外反する口頸部を持ち、外面はヘラミガキによって調整される。72は加飾性豊かな壺Ａ１の口頸部片である。拡張・垂下した口唇部には擬凹線を施し、口縁内面には、ヘラ・竹管による装飾を加える。わずかに残る体部には直線文が確認できる。73～76は、長頸壺の口頸部片であり、緩やかに内湾しながら大きく外方へ開く（壺Ｃ）。ヘラミガキまたはナデによって調整される。

甕…口縁部が受け口状となる甕Ｂと「くの字」状に屈曲する甕Ａとの２つのタイプに分けられる。81は、台部を欠損するが当地域に一般的にみられるものである。口縁部を摘み上げ鋭く屈曲させることによって受け口状の口縁をつくりだしている。口縁下部と体部横線文下に刺突を施す。83は81と同様に受け口状の口縁を呈するが、在地の土器には系譜の置けない異質なものである。体部は球形状となり、器壁は厚く、外面はナデにより仕上げられており、鉢の可能性も考えられる。82は、体部から口縁部にかけて単純につの字状に屈曲するもので、体部外面をハケメ、内面をナデによって調整する。

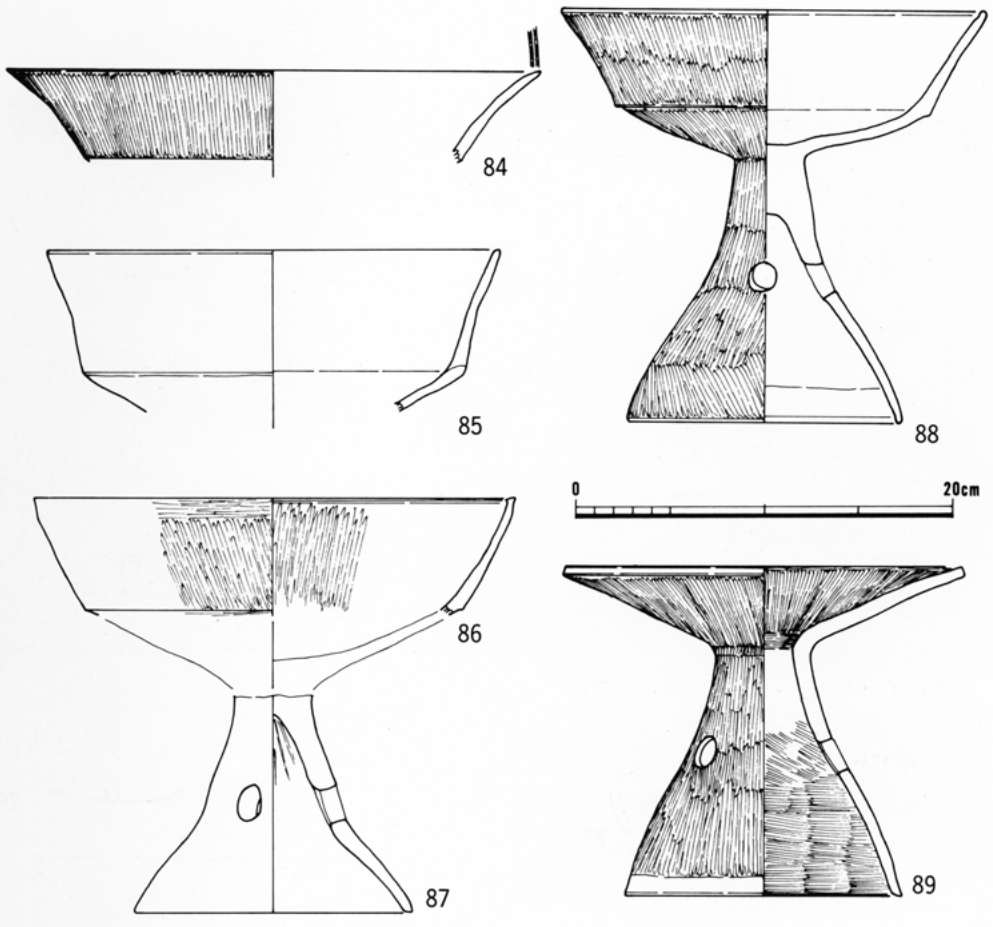
高杯…杯部の形状から、杯部が浅く強く外反しながら立ち上がる高杯Ａと杯部がやや深くなり，内湾気味または緩やかに外反しながら立ち上がる高杯Ｂ１とに分類することができる。84は山中式土器に通有見られる杯部が浅く、杯部上半が外反するものであり、口唇部に２条の沈線を施す。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ調整によって調整する。88は、唯一全形を窺うことができる資料である。杯部下半で明瞭な段を持ち、上半部は緩やかに外反しながら立ち上がる。脚部は長く、円柱から円錐状に大きく開く。外面は縦位のヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。85は杯部のみの残存するが、88と同様に杯部中位下半で段を持ち、上半部は緩やかに外反しながら立ち上がる。内外面ともにナデ調整。86と87は同一個体と考えられる。杯部は中位で段を持ち、上半部は緩やかに内湾気味に立ち上がる。内外面ともにヘラミガキ調整される。脚部は内湾しながら円錐状に広がる。

器台…89は、脚部から鋭く屈曲し大きく外方へ広がる受部を持つ。脚部は高杯と同様に長く、受部との接合部より内湾気味に円錐状に開く。外面および受部内面はヘラミガキによって調整されるが、脚部裾部は強くヨコナデが施され、微妙に外反を示す細部湾曲調整が認められる。脚部内面にはハケメを残す（器台Ｂ）。

鉢…すべて受け口状の口縁を呈するものである。体部が口径より大きく張り出す鉢Ａと逆に口径が体部径を凌駕する鉢Ｂの２つのタイプがみられる。79・80は、鋭く屈曲する口縁



第56図　SB1204出土遺物（1：4）



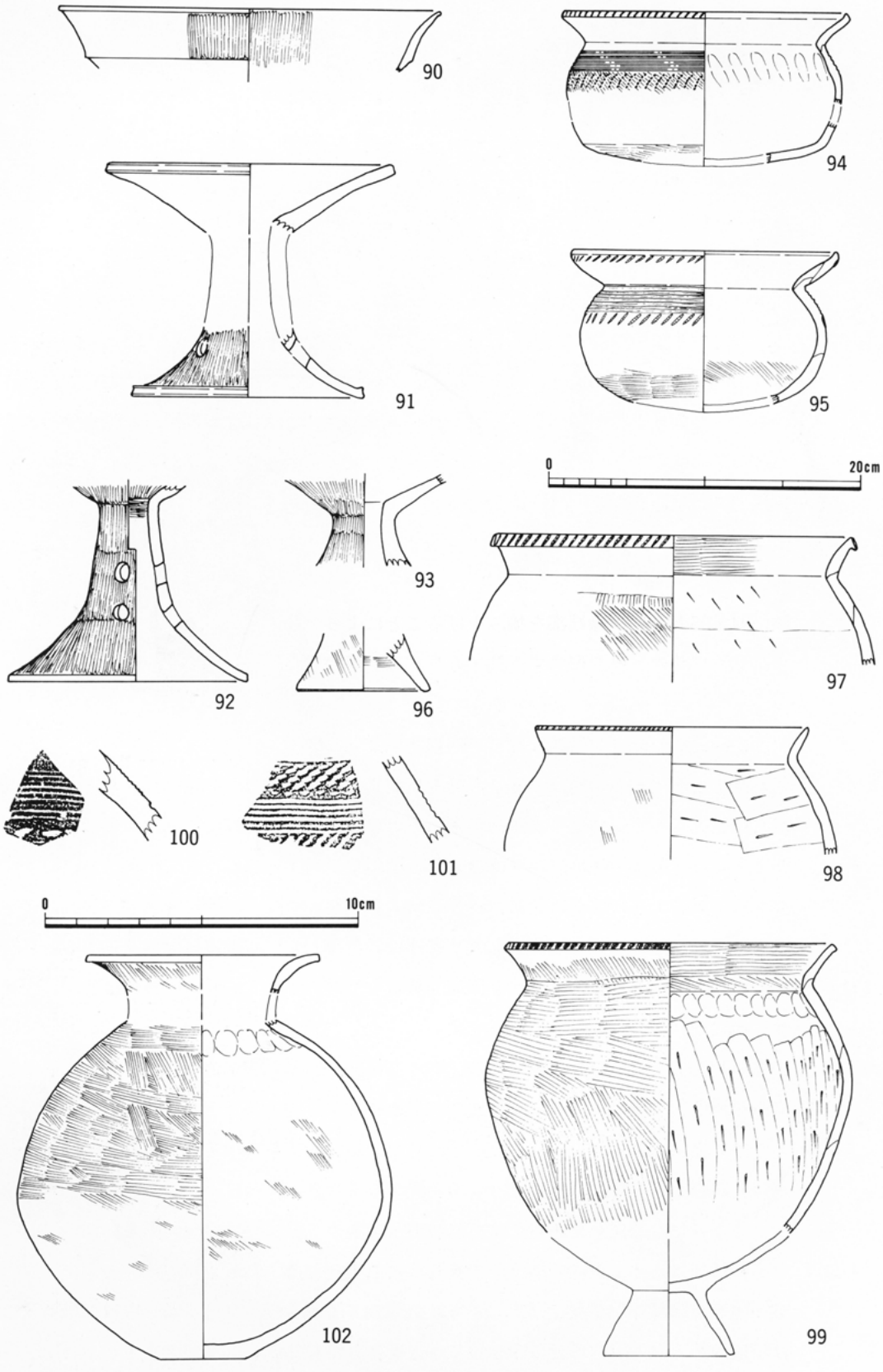
第57図　SB1204出土遺物（1：4）

部を有するが、その手法はいずれも摘み上げ状である。体部から口縁部にかけての外反は緩く、体部もやや偏平化する傾向が窺える。また、体部の文様は、ヘラによる刺突を施すのに対し、この種の土器に特徴的な体部上半部の横線文はみられず、ナデまたは板ナデ調整されている。78は体部片であり、ヘラによる刺突・横線・波状文を施す。77は頸部から強く外反させた口縁部を鋭く屈曲させ受け口状口縁とし、端部には刺突を加える。体部は張りを持たず、上半部にはハケメ原体を利用した刺突が加えられる。外面はナデ、内面は板ナデにより調整する。

SB1206　SB1206より出土した土器は、壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

壺… 102は、頸部を欠損するが、ほぼ完形に復元することのできた壺B1である。頸部からほぼ直立気味に立ち上がり、緩やかに外反する口縁部を有すると考えられ、口縁端部は平坦で明瞭な面を持つ。内面はヨコナデ調整が施され、外面はハケメを残すが、下半部はナデによって打ち消している。体部は球形状であり、最大径は中位にある。100・101は壺Bの体部片であり、直線文やヘラ、櫛等による刺突が施される。

甕…すべて体部から単純に「くの字」状に屈曲する甕Aのみであるが、口縁部の形状は微妙な違いをみせる。97は体部から緩やかに屈曲し、口縁端部は平坦で垂下し、ハケメ原体による刺突が加えられる。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ調整が施される。98の口



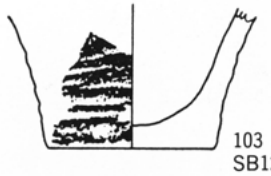
第58図　SB1206出土遺物（1：4）

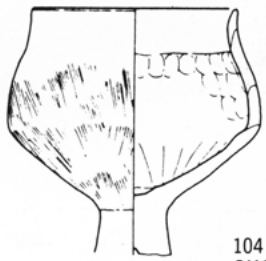
縁端部は、面を持たず丸く収めるもので剝落が著しく調整は不明瞭な部分もあるが、口縁内外面はともにヨコナデ、体部外面はハケメ、内面はヘラケズリが施される。99は台部を欠損するが、ほぼ全形を窺うことのできる資料である。口縁は大きく外傾し、端部には明瞭な面を持ち、ハケ原体による刺突が加えられる。体部はやや楕円状であり、横位または縦位の粗いハケが施されている。口縁内面には横位のハケ、体部はヘラケズリによって調整される。96は「ハの字」状に開く台部片である。

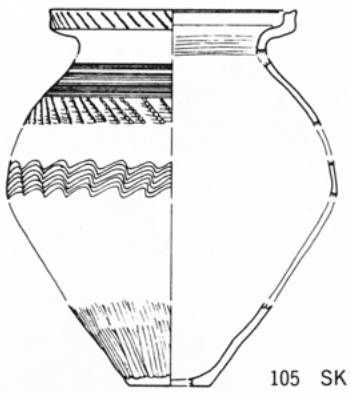
高杯…90は山中式土器に通有みられる高杯Aである。浅い杯部の上半部片であり、中位で段を持ち、口縁は外反しながら立ち上がる。内外面ともに縦位のヘラミガキによって仕上げている。

器台…全形を窺うことのできる資料は少ないが、いずれも同様の形態を示すと考えられる。91は脚部上半部を欠損する。受部は脚部より鋭く屈曲し、端部は平坦で面を持つ。内外面ともにナデ調整される。脚部は外反しながら円錐状に開き、端部は平坦に仕上げられる。外面にはヘラミガキが施される。92は脚部のみ残存する。外反しながら大きくラッパ状に開き、端部は面を持つ。透孔は2段3方に穿つ。外面は縦ヘラミガキ、内面はナデによって調整される。93は、受・脚部の屈曲部片である。

鉢…94・95ともに口縁端部を摘み上げることによって、受け口状の口縁を形成する鉢であり、この種の鉢に特徴的な、体部上半部の櫛描き横線文、口縁部分と横線文下の刺突が明瞭に認められる。94は体部から強く屈曲する口縁を有するもので、体部中位に最大径を置き、下部で鋭く屈曲して底部にいたる。95も同様に体部から強く屈曲する口縁部を持つが、体部は球形状を呈する。調整は、いずれもナデが基本であり、体部下半にはハケメを残す。


103
SB1209


104
SK1202


105　SK1201

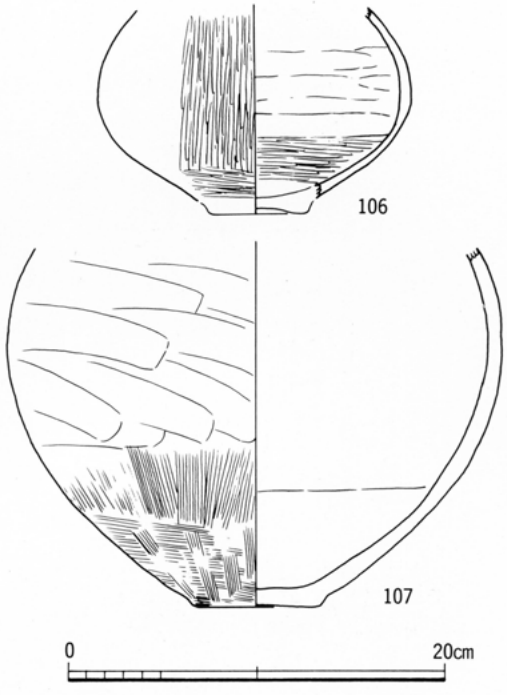
第59図　II期出土遺物（1：4, 103は1：2）

SB1209　SB1209出土土器は、細片が多く、図示しえたのは、第59図103のみである。103は器面上にタタキを施す甕Eであり、底径は4.6cmを測るのみで、小形品である。山中式後期に属すると考えられる土器細片とともに出土した。

土坑（第59図）

SK1201　SK1201は、ピット状の小土坑であり、内部より第59図105が押し潰れた状態で単体で出土した。105は、口縁部を鋭く屈曲させ、受け口状にした甕Bであり、端部は平坦に収め、ハケ状工具を利用した刺

突列を施している。体部の形状は、最大径が体部中位上半にあり、やや肩が下がった形態となる。底部は平底である。体部上半部には櫛描き横線文、口縁部と同様の工具を利用した刺突列、波状文等加飾性豊かな文様を描いている。体部下半部はヘラミガキで調整している。



第60図　SD1201出土遺物（1：4）

SK1202　SK1202からは、第59図104のワイングラス形高杯（高杯F）が単体で出土した。104は脚部の大半を欠損するが、杯部は完形に近く残存する。杯部の形状は、脚部より緩やかに屈曲しながら口縁部に至り、口縁直下でわずかに外反するこの種の土器に特徴的な形状を示している。外面はハケメ調整の痕跡をよく残しており、また、内面には指圧痕が明瞭に確認できる。杯部はかなり深くなっており、山中式後期に位置付けられよう。

溝（第60図）

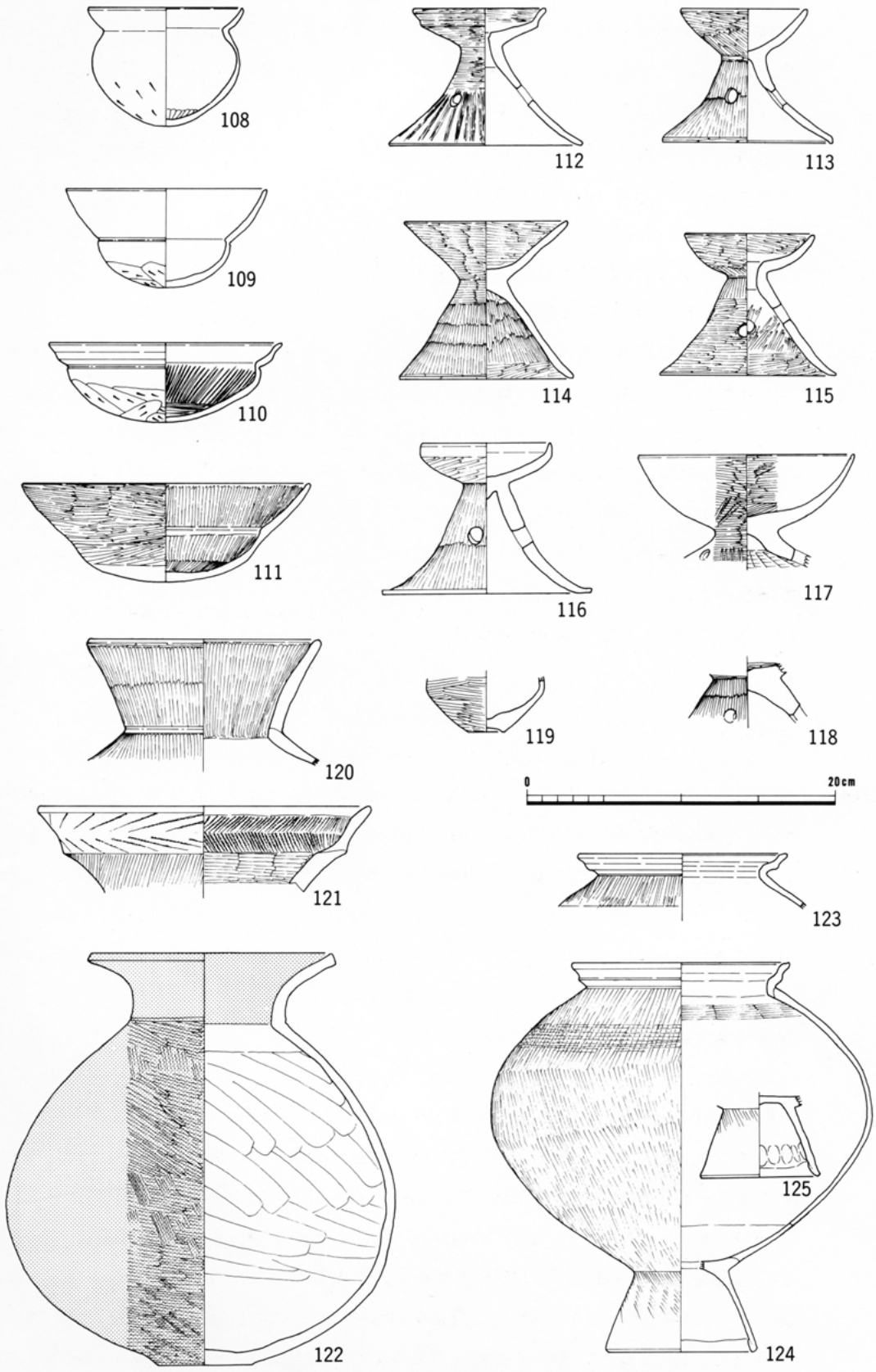
SD1201　SD1201からは、第60図106・107の壺が2点出土した。106は、長頸壺（壺C）の体部片であり、ほぼ中位に最大径をもつ。107は体部上半以上を欠損するが、壺Bと考えられる。体部下半はハケメを明瞭に残すが、中位以上は板状工具を利用してナデ調整を施している。

B地区遺構出土遺物

土器集積（第61図）

SX1201　総数18点の遺物が、人為的に据え置かれた状態で出土した。祭祀的色彩の強い遺物とされる小形丸底土器、小形器台、小形鉢等は、一定の範囲内よりまとまって出土しており注目される。出土遺物は、大きく壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

壺…119のようなミニチュア品もみられるが、大きく壺B・Eとに分けられる。121は、いわゆる柳ヶ坪型壺（壺E）の口頸部片である。口頸部なかほどで、屈曲、外反し有段口縁となる。口縁内外面に櫛歯刺突の列点文を羽状に施し、この種の土器に特徴的な文様をつくりだしている。122は、体部から強く外反する口頸部を有する壺B1である。体部最大径は下半部にあり、やや下ぶくれ状の形態となる。頸部と体部の境界には1状の沈線を巡ら



第61図　SX1201出土遺物（1：4）

し画する。外面は横ナデ、ヘラミガキ調整、体部内面は板ナデ調整で仕上げる。胎土はよく精選されており、外面および口縁内面には赤彩を塗布し器面を飾る。120は、壺Ｂ２である。体部は欠損するが、やや外傾し直線的にのびる口頸部を有する。体部と頸部の境界には１条の沈線を巡らす。内外面ともに縦位のヘラミガキ調整を施す。

甕…すべて、口縁部がＳ字状に屈曲するいわゆるＳ字甕である（甕Ｄ）。Ｓ字甕分類の指標となる口縁部の形状は、123・124ともに口縁中段以上は上外方へ大きく拡大し、端部が肥厚するもので、口縁部、体部との屈曲部には明瞭な沈線が巡る。これらはＳ字甕Ｃ類の特徴をよく示しているといえよう。ただ全体的に器壁が厚化し，体部最大径も下方に移る傾向が認められ、より新しい様相が窺える。 124は全形を窺うことのできる資料であり、全体的に器壁は厚化し、体部最大形は中位にある。外面の調整は粗いハケメを３～４回に分割し、右下から左下に引き上げた後、口縁部との屈曲部から左下に引き下ろして羽状にし、体部上半部には横位のハケメを施す。内面は、ナデにより平滑に仕上げ、台部の端部は折り返す。125は台部のみであり、124と同様に端部折り返して調える。

高杯…117は、半球状の椀形を呈する杯部に、大半は欠損するが、裾部径が杯部口径を凌駕するほど大きく開いた脚部を有する小形高杯である。杯部は内外面ともに丁寧なヘラミガキが加えられる。118は、脚部の一部のみの残存であり、概ね117と同様の形状を呈するものと考えられる。

器台…５点出土した。いずれも口径・器高が８～10㎝程度の小形器台である。114を除き、緩やかに外反しながら裾が大きく開く脚部を有する（小形器台Ａ）。受部の形状はバラエティーに富む。112は、脚部より鋭く屈曲する皿状の受部を持つもので、脚部から受部にかけて貫通孔を残す。113・115は、半球状の浅い受部を持つものであり、115は貫通孔を有する。116は、畿内系と考えられる資料であり、やや丸みを帯びた受部に、摘みあげた口縁部を持つ。114は、直線的に外方にのびる受部および脚部を有するもの（小形器台Ｂ）で、山陰系鼓形器台の影響を感じさせるが、脚部がやや長脚の傾向を示す。いずれも外面の調整はヘラミガキ、内面はナデまたはヘラミガキを施す。胎土は精選されており、焼成も良好である。黄白色を呈するものが多いが、116のみ赤褐色の色調を示す。

鉢…４点出土し、すべて丸底状の底部を持つ。小形器台と組み合わせて使用されたものと考えられる。108は、丸みを帯びた体部に、内湾気味に外方へ開く短かめの口縁を有する小形鉢Ａである。109は、いわゆる小形丸底土器・坩などと称されるもの（小形鉢Ｂ）で、偏平な球状の体部に、口径が大きく、内湾気味に外方へ広がる口縁部をもつ。口縁部と体部の境界には、１条の沈線を配し画する。体部下半はヘラケズリ、その他はナデにより薄く平滑に仕上げている。110は、畿内系の有段鉢（小形鉢Ｄ）であり、浅い椀状の体部に２段に屈曲する独特な口縁部を有する。体部下半はヘラケズリ、内面には暗文風の細いヘラミガキが施される。111は、浅い偏平球の体部に大きく直線的に外方に広がる口縁部を持つ（小形鉢Ｃ）。内面中位で稜をつくり、口縁と体部を画する。外面は、底部付近を除き横方向のヘラミガキ、内面は縦位のヘラミガキを施す。これらは、いづれもよく精選された胎土を使用して

おり、焼成も良好である。色調は、110が赤褐色を呈する以外、黄褐色、黄白色を示す。

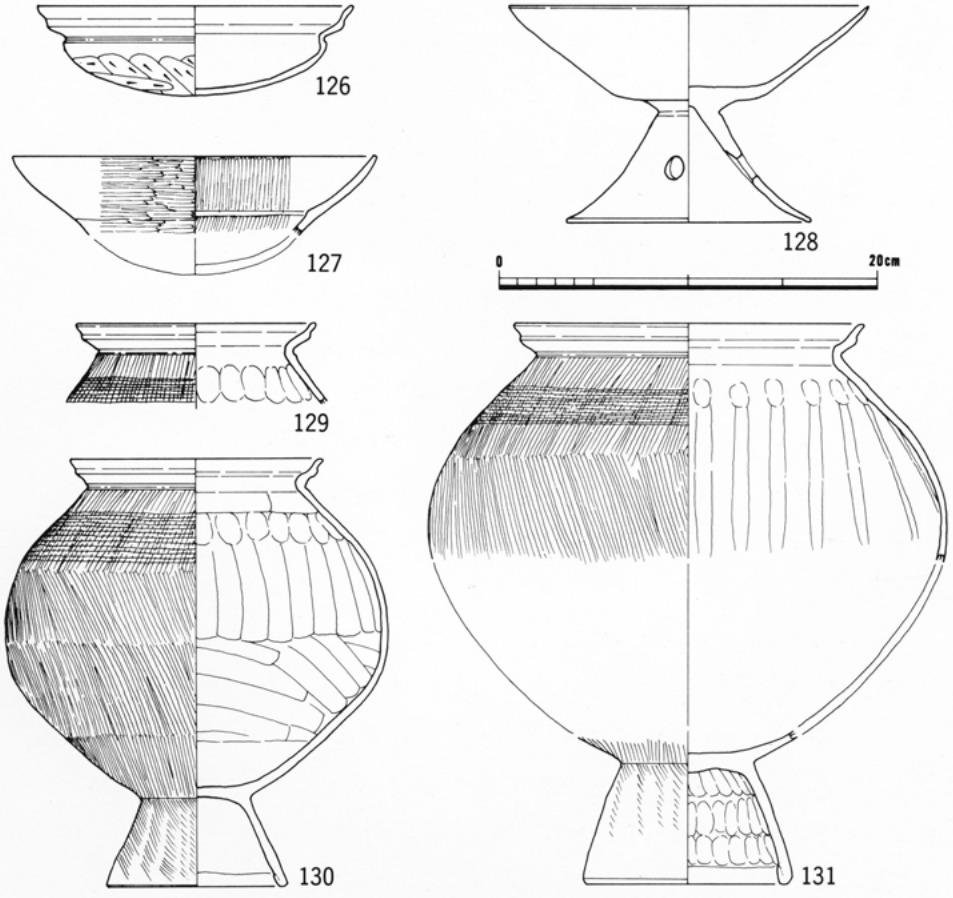
土坑（第62図）

S K 1204　　ＳＫ1204より出土した土器は、大きく甕、高杯、鉢がある。

甕…３点出土したが、いずれもＳ字甕である（甕Ｄ）。いずれも口縁部中段以上が上外方へ拡大し、端部は肥厚する口縁を持つ。また、体部と口縁部の境界には沈線を配しており、全体的に器壁の厚化が認められる等より、ＳＸ1201出土資料と同様にＣ類新段階に位置付けられる。130は、全形を窺うことができ、体部最大径は中位にある。外面は粗いハケメを羽状に配した後、上半部に横位のハケメを施す。内面は板状工具によるナデ調整で平滑に仕上げる。131は、体部下半を欠損するが、やや大形のＳ字甕である。

高杯…128は、やや短かめの外面する脚部に、外傾しながら直線的にのびる浅い杯部を有するもので、内外面ともにナデ調整。高杯Ｃ。

鉢…126は、畿内系の有段鉢。椀形の浅い体部に、２段に屈曲し外反する独特な口縁部を有する（小形鉢Ｄ）。体部下半は、ヘラケズリ調整。127は、体部を欠損するが、大きく外方に広がる口縁部を持つ小形鉢Ｃ。内外面ともにヘラミガキ調整。



第62図　SK1204出土遺物（1：4）

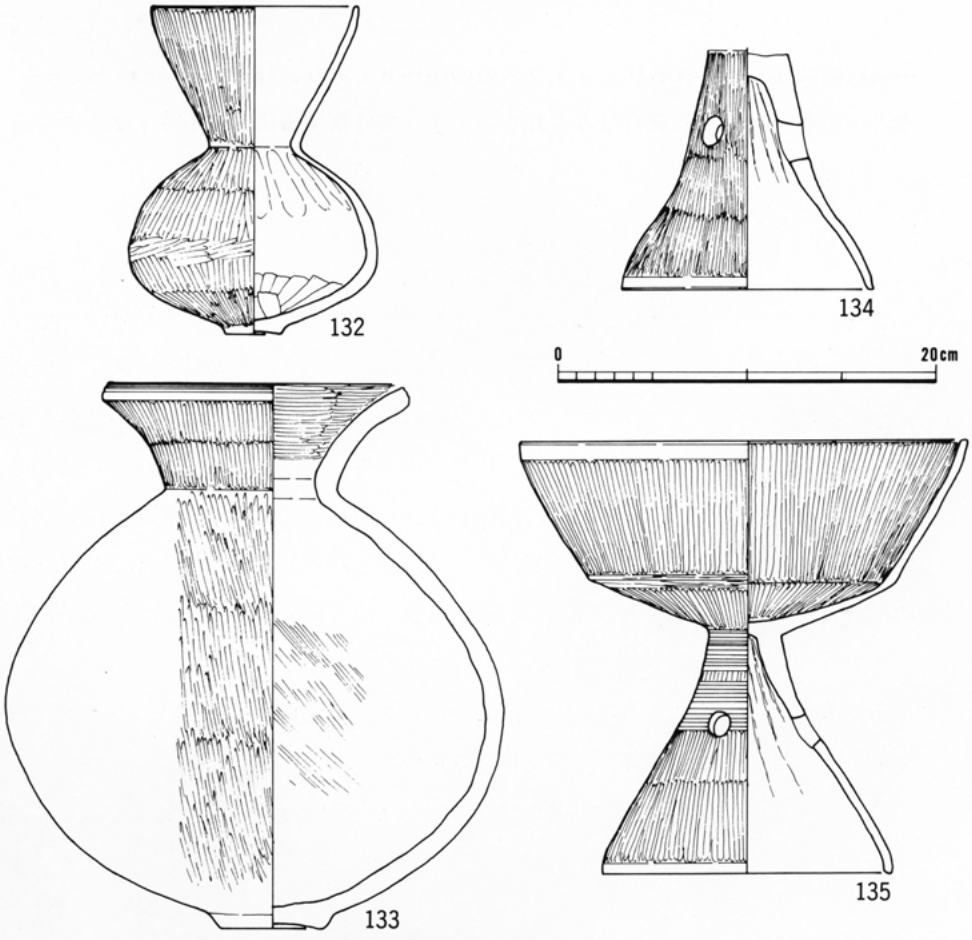
C地区遺構出土遺物

方形周溝墓（第63図）

SZ1201　　ＳＺ1201出土土器には、壺、高杯がある。

壺…132は、長頸壺（壺C）であり、口頸部は、大きく外方に開き、口縁部付近で緩やかに内湾する。体部は最大径が中位より下方に移り、やや下ぶくれ状の形態を示す。底部は上げ底である。外面はヘラミガキ、内面はナデ、指圧痕、板ナデ等によって調整される。133は、壺Ｂ２であり、口頸部は体部より強く屈曲する。口縁端部はやや肥厚し、面を持ち凹線が巡る。内外面ともにヘラミガキで調整される。体部の形状は、最大径を中位に持ち、ほぼ球形状を呈する。外面は縦位のヘラミガキ、内面はハケメが残る。

高杯…135は、全形を窺うことができる。杯部は下半で明瞭を段を残し、内湾気味に外方へ広がる。脚部は円錐状に大きく開き、横線文が２段にわたって施される（高杯Ｂ２）。外面および杯部内面はヘラミガキによって調整される。134は、脚部のみであるが、135と同様の形態を呈すると考えられる。いずれも口縁部と脚部裾部付近はヨコナデが施され、わずかに外反させる細部湾曲調整や内湾脚調整技法が明瞭に確認できる。



第63図　SZ1201出土遺物（1：4）

包含層出土遺物（第64図～第71図）

(1)　A地区（第64図）

出土状況　A地区は、五条川右岸の微高地状にあたり、多数の竪穴住居跡を検出し、居住域にと相当する地点である。包含層より出土した遺物も、それらの遺構とほぼ同時期と考えられる山中式後期から廻間Ⅰ式前半期に比定される遺物が出土した。

出土遺物　甕…147～149は、口頸部が「くの字」に屈曲する甕Aであり、すべて口縁端部には刺突を施す。147は、台部を欠損するが、概ね全形を窺うことができる。体部から口縁にかけての屈曲は緩やかであり、口縁端部には刺突を施す。体部はやや長胴化しておりハケメ調整が施される。内面はケズリ調整。150・151は受け口状口縁を有するもので、口縁端部は摘み上げ状に仕上げる甕C１。153～156は台部片である。

鉢…152は受け口状口縁を有する鉢Bで、口径が体部径を凌駕するものである。

高杯…高杯は、大きくA・B１・B２・Fの４タイプに分類することができる。136は、杯部が浅く外反する高杯Aであり、内外面ともに縦位のヘラミガキが施される。143の脚部片は136と同様の杯部を持つものと考えられる。137は、杯部がやや深化する傾向がみられ高杯B１に相当するものである。146は、内湾した長脚の高杯であり高杯B２。138・139は山中式段階に通有みられるワイングラス型の高杯Fであり、139は赤彩が施される。

器台…全形が判明する資料はみられない。すべて外反する脚部を有する器台Aである。

(2)　B地区（第65図～第71図）

出土状況　遺構の項目でも述べたがB地区は、自然堤防から旧河道へと落ち込んでいく変換地点に位置し、89C区で検出された集石遺構や89Ea区で確認された祭祀的色彩の強い遺物を出土した土器集積といった特殊な遺構がみられる空間である。遺物の出土量も他の調査区に比して遥かに多い。また、完形に近く復元できるものも多々みられ、そういった遺物の出土状況は、遺構に伴ってはいないが、廃棄されたというよりは、据え置かれた状態で出土する場合がみられた（201、235、261等）。特殊な遺構の存在、遺物の出土状況、旧河道への変換点への立地等、B地区は日常的というよりは、非日常的な空間として利用されていた可能性が考えられる。

出土遺物は、多岐にわたり、山中式後期から廻間Ⅰ～Ⅲ式に比定されるものが中心であり、若干、松河戸式段階まで下る遺物もみられる。

以下、大きく89C区の集石遺構を中心とした地点と89Da・Ea区を中心とした地点とにわけて述べていきたい。

①89C区包含層出土遺物（第65図～第66図）

89C区を中心とした地点からは、山中式後期～廻間Ⅰ式前半期の遺物が多量に出土している。

出土遺物 壺…157・158は、垂下・拡張口縁部をもつ加飾性豊かな壺A1である。口縁内面は、まだ段を有さず、ヘラ描きの羽状文が施される。164・165は、長頸壺であり、163は、口縁端部をヨコナデし、微妙に外反させた壺D。他はすべて体部片であり、最大径はほぼ中位にある。161は壺の蓋か。

甕…くの字甕（甕A）、受け口系甕（甕C）があるが、S字甕（甕D）は1点もみられない。166～172はくの字甕であり、すべて口縁端部に刻みを施すものである。168は、台部を欠損するが、概ね全形を窺うことができる資料であり、体部内面はヘラケズリ調整が施される。173～176は受け口状の口縁を有するものであり、173は、口縁部が内湾気味に立ち上がる甕C3であり、174・175は口縁端部を摘み上げ状に整形する甕C1である。

高杯…183・184は杯部が浅く、口縁部が外反する高杯Aである。いずれも内外面ヘラミガキで調整する。185は、半球状の杯部をもつ高杯Dであり、口縁端部はヨコナデを施し微妙に外反させている。187は口縁端部に沈線を巡らすものであり、沈線の多条化はまだみられない。189は、全形を窺うことのできる資料であり、口径と稜径との差が少なく、杯部の深化もそれほど進んではいない高杯B1である。脚部は長く、円柱状から円錐状に大きく開く。186は脚部が内湾気味に開き高杯B2と考えられる。

器台…190は受部のみの残存。192～196は脚部片であり、192はやや長脚となる器台A1。193～196は短く外反する脚部を有する器台A2である。

その他…178～182はミニチュア品である。

②89Da・Ea区包含層出土遺物（第67図～第71図）

89Da・Ea区からは、廻間Ⅰ～Ⅲ式を中心として、山中式後期、松河戸式段階の遺物がみられた。

出土遺物 壺…197～202は、長頸壺であり、いずれも大きく外方に拡がる口縁部を有する壺Cである。198～200は精選された胎土を用いた精製土器であり、櫛刺突の鋸歯文、横線文等を組み合わせた文様構成をもつ。201・202は全形を窺うことができる資料であり、いずれも長く外方に広がる口縁部を有し、体部最大径も下方に移る。204は、頸部の一部のみしか残存せず判然とはしないが、二重口縁壺（壺F）と考えられる。205～208は、口縁部が、二重口縁的な形状を示し、羽状の櫛刺突を施す柳ヶ坪タイプの壺Eである。211～213は、いわゆるパレス・スタイルの壺A2であり、212の体部には櫛刺突の鋸歯文、横線文が施され、体部

最大径も下方にあり下ぶくれ状となる。

甕…すべてS字甕であり（甕D）、89C区でみられた様相とは全く異なる。218～221は、押し引き刺突をもったA類（D１）。222～233は口縁部上段・下段が発達し、上段のヨコ方向への突出が顕著となるB類（D２）である。234～256は口縁部の屈曲が外方へ大きく拡張するC類（D３）に比定できる資料であり、257～262は口縁端部に明瞭な面をもつD類（D４）である。

鉢…286～293はすべて小形鉢である。286・287は口縁部が短く外傾する口縁部をもつもの、288・289はいわゆる小形丸底土器（小形鉢B）であり、288は289に比べ大きく外方に開く口縁部をもつ。290・291は、口頸部が直線的に外方にのび、大きく口縁部が開くものであり、内面に稜をつくり体部との境界にする独特な形状を示す。292は口縁部を複雑に屈曲させた畿内系の有段鉢（小形鉢D）。293は口頸部がやや内湾気味に外方に大きく広がる浅鉢（小形鉢C）である。

高杯…268は、短く外反する脚部を有する有稜高杯Eであり、後の小形高杯の祖形と考えられる資料である、266・267・269・271・275・277は杯部が深く、内湾する脚部をもつ高杯B２である。272・273は杯部内面に沈線を施したものであり、273は外反する短い脚部をもつ。274は半球状の杯部をもった小形高杯であり、278・279は松河戸式期よりみられる、脚裾部で屈曲する畿内型高杯Gである。

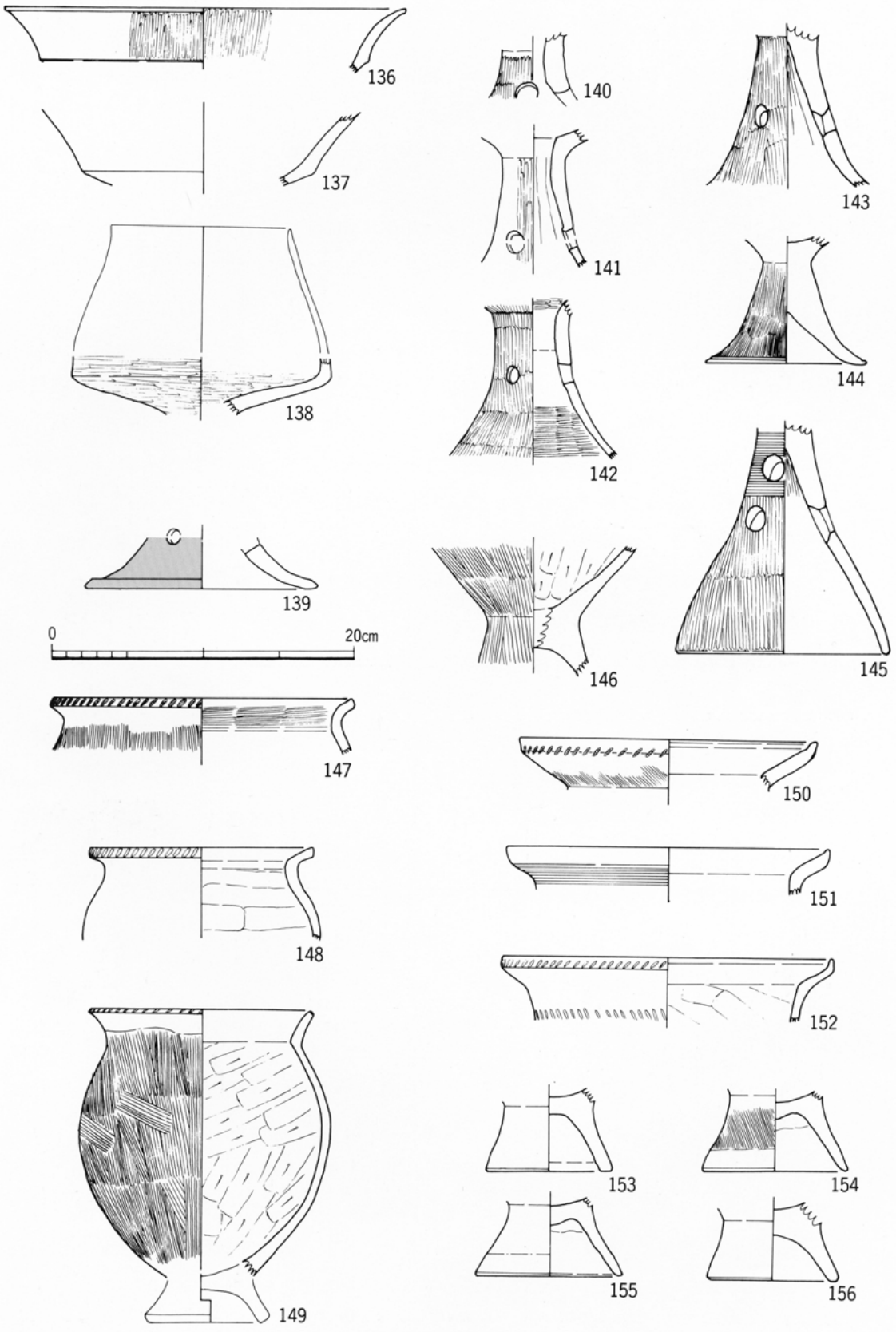
器台…280は、外反する脚部を有するもの。281～285は小形器台であり、281は山陰系の鼓形器台（小型器台B）。283は半球状の受部片。 284～285は受部を欠くが緩やかに外反する脚部片である。

その他…294は、駿河系土器の可能性が考えられるもので、壺の口頸部から体部片である。器面上には、単斜方向の縄文（原体ＬＲ）を２列、その下部にはS字状の結節文を配し、頸部には２個一対の円形浮文を施す独特な文様構成をもつ。包含層出土のため厳密な時期比定は困難であるが、概ね廻間Ⅰ～Ⅱ式の範疇で捉えられるであろう。

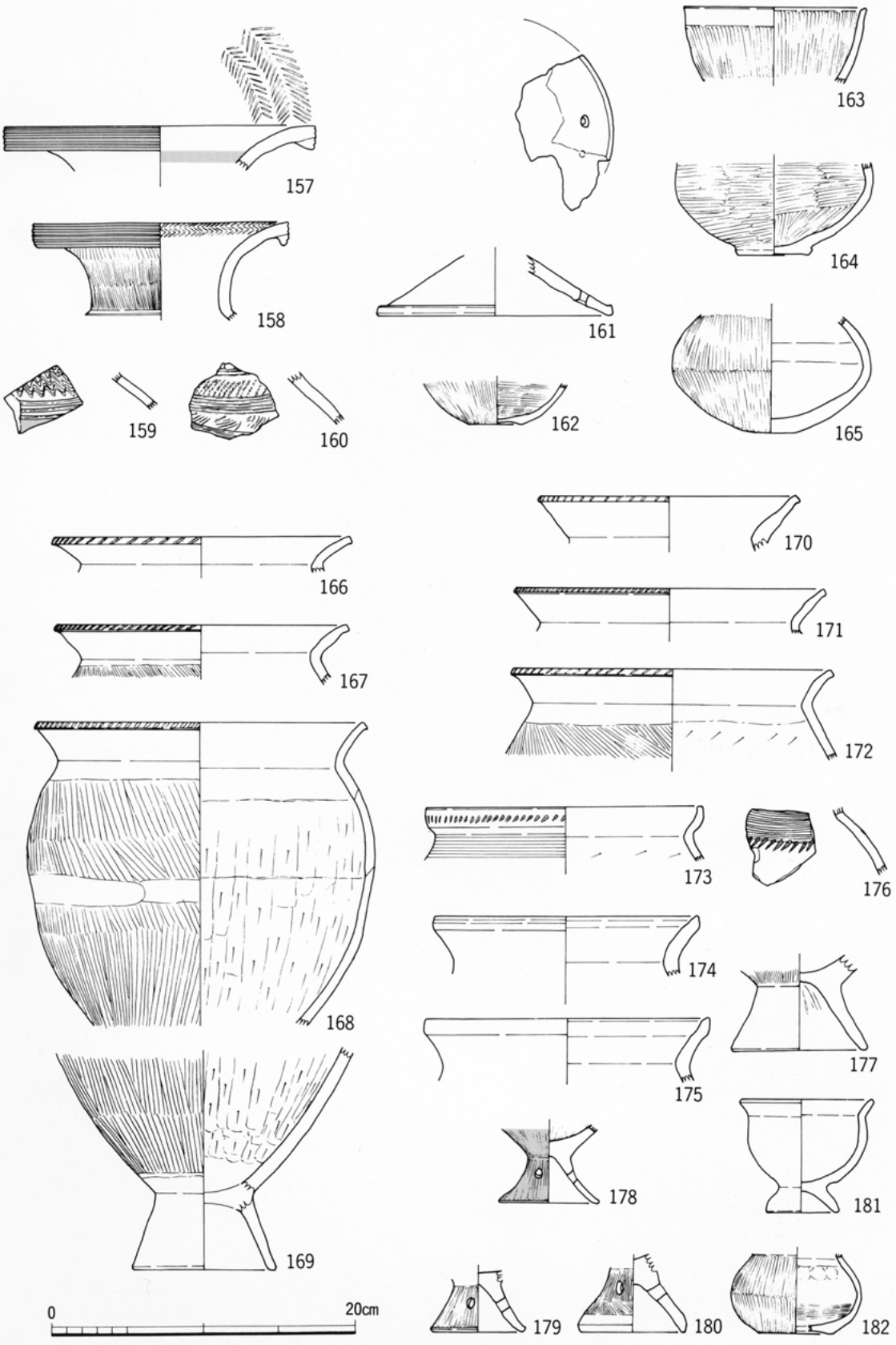
(3)　C地区（第71図）

出土遺物　C地区の包含層出土遺物は少なく第71図295～298がみられたにすぎない。295は、口縁部および体部下半を欠損するが、体部最大径が50cm近くを測る大形の壺形土器である。体部上半部には、簾状文・波状文・櫛描き横線文等が施され、簾状文など古い要素もみられるが、山中式段階に比定されると考えられる。296はいわゆるパレス・スタイルの壺体部である。体部最大径は下半部にあり、下ぶくれ状の形状を呈する。体部上半部には櫛刺突による羽状文、横線文が施される。297・298は高杯であり、298は半球状の杯部をもつ高杯D。298は杯部を欠損するが、外反する脚部を有する高杯Aである。脚裾部には赤彩の痕跡が残る。

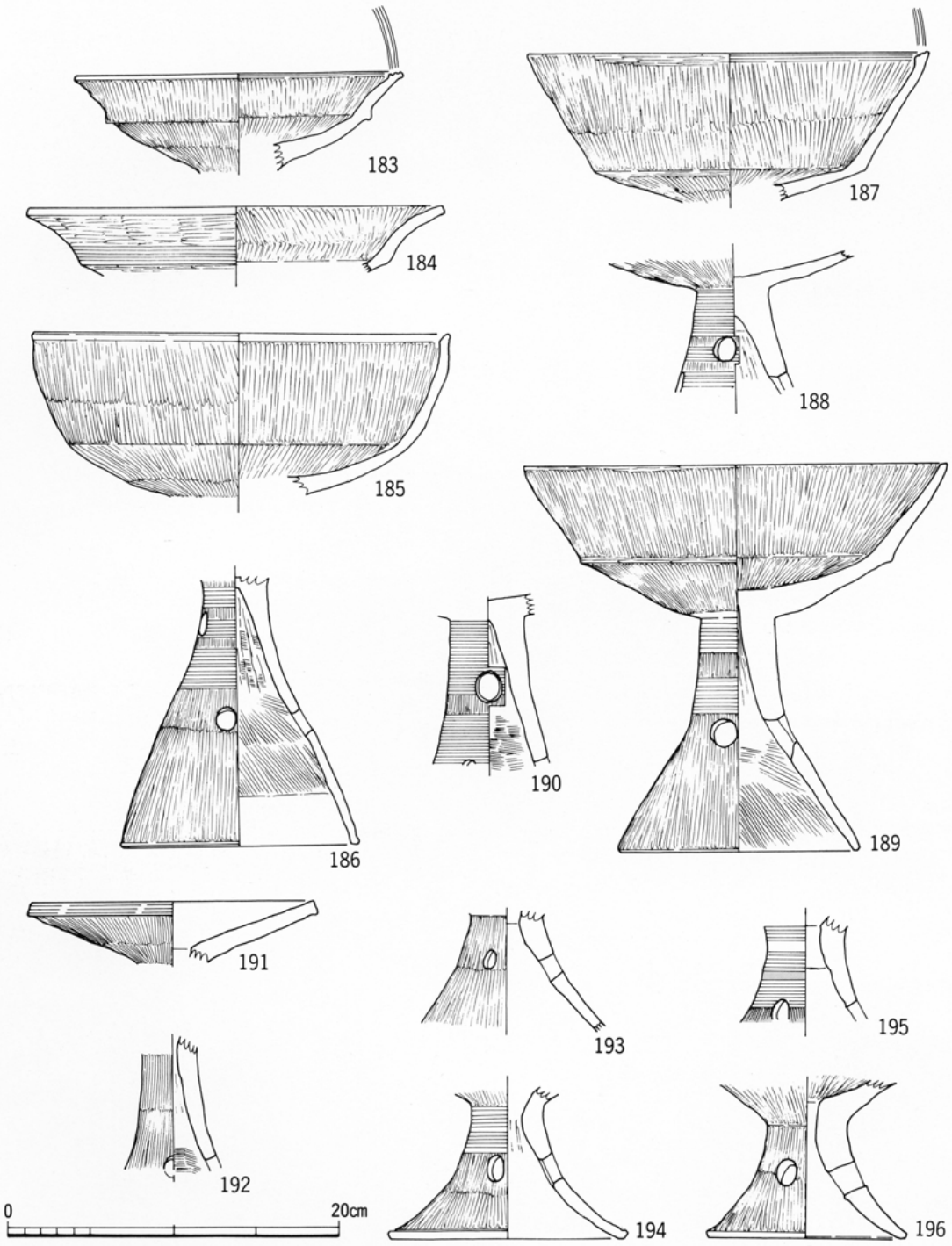
（服部信博）



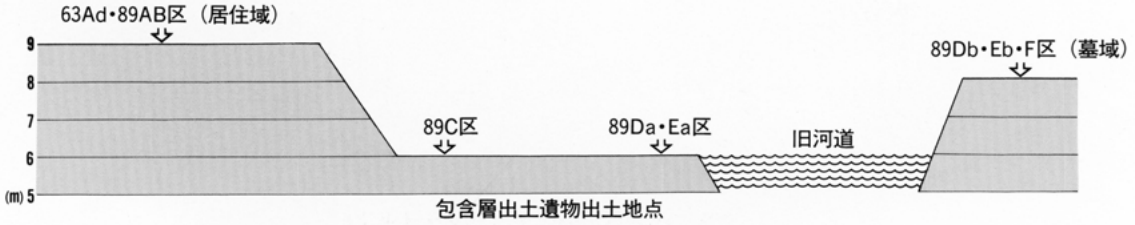
第64図　A地区(63Ad、89AB区)包含層出土遺物（1：4）

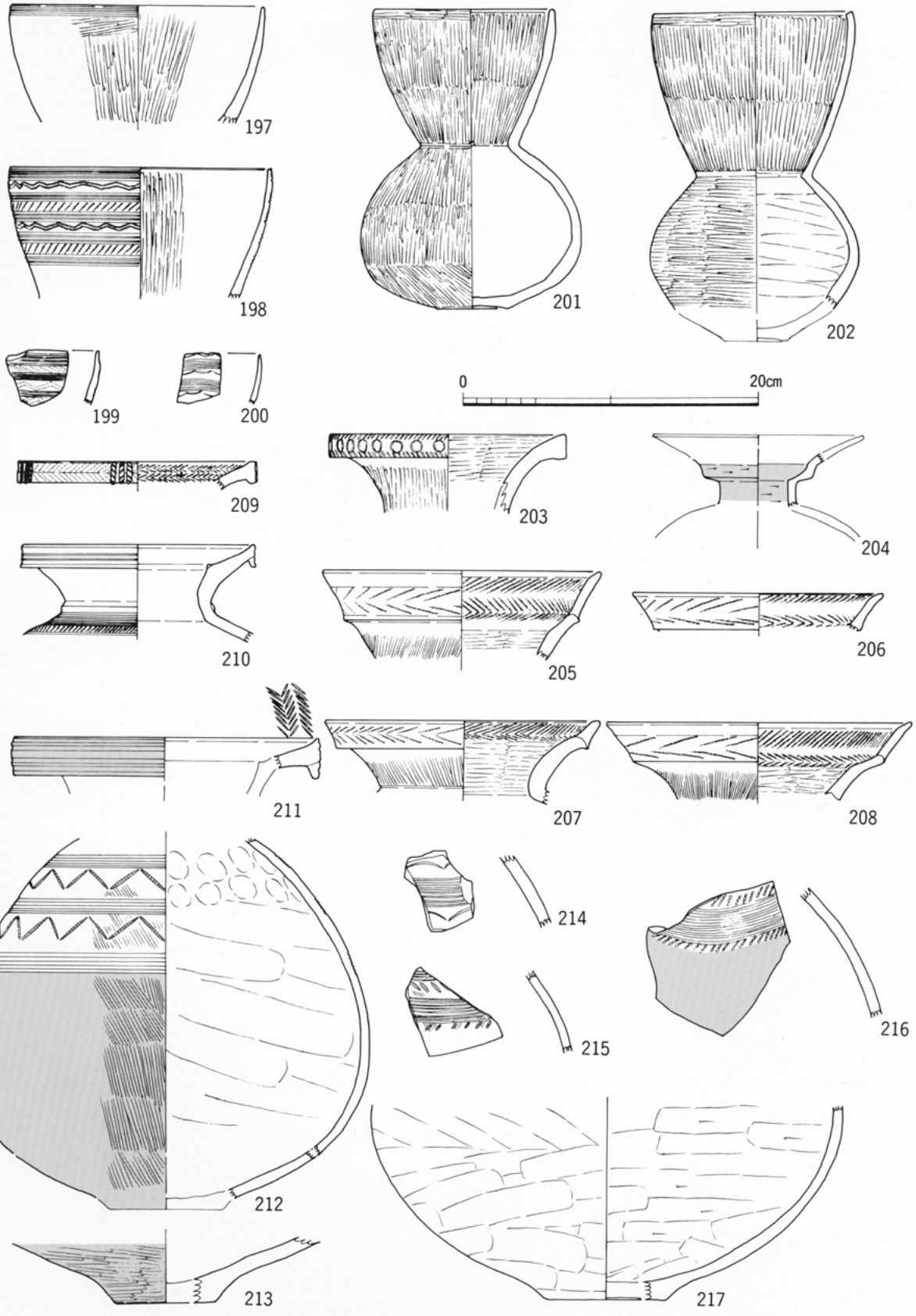


第65図　B地区(89C区)包含層出土遺物（1：4）

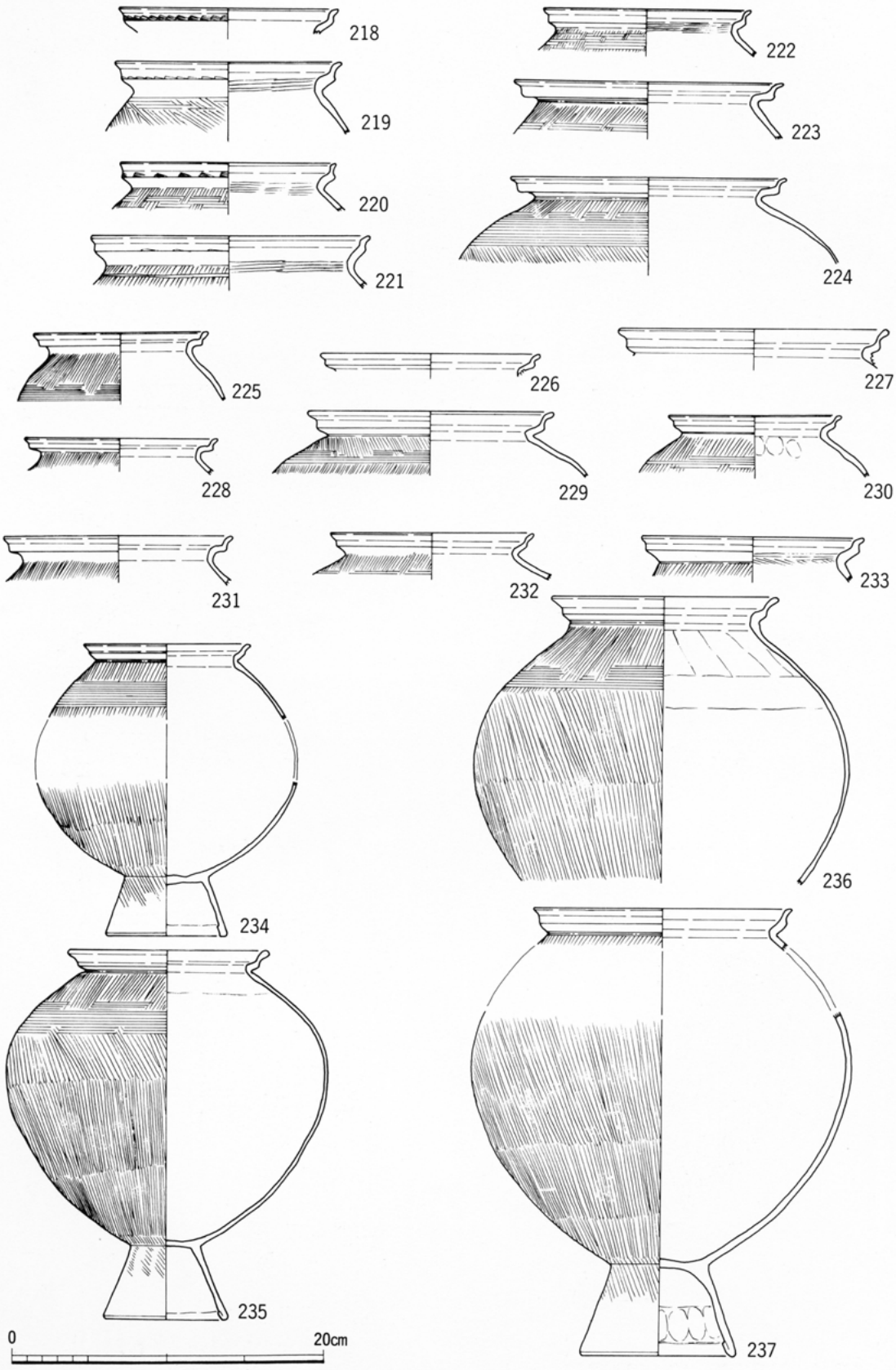


第66図　B地区(89C区)包含層出土遺物（1：4）

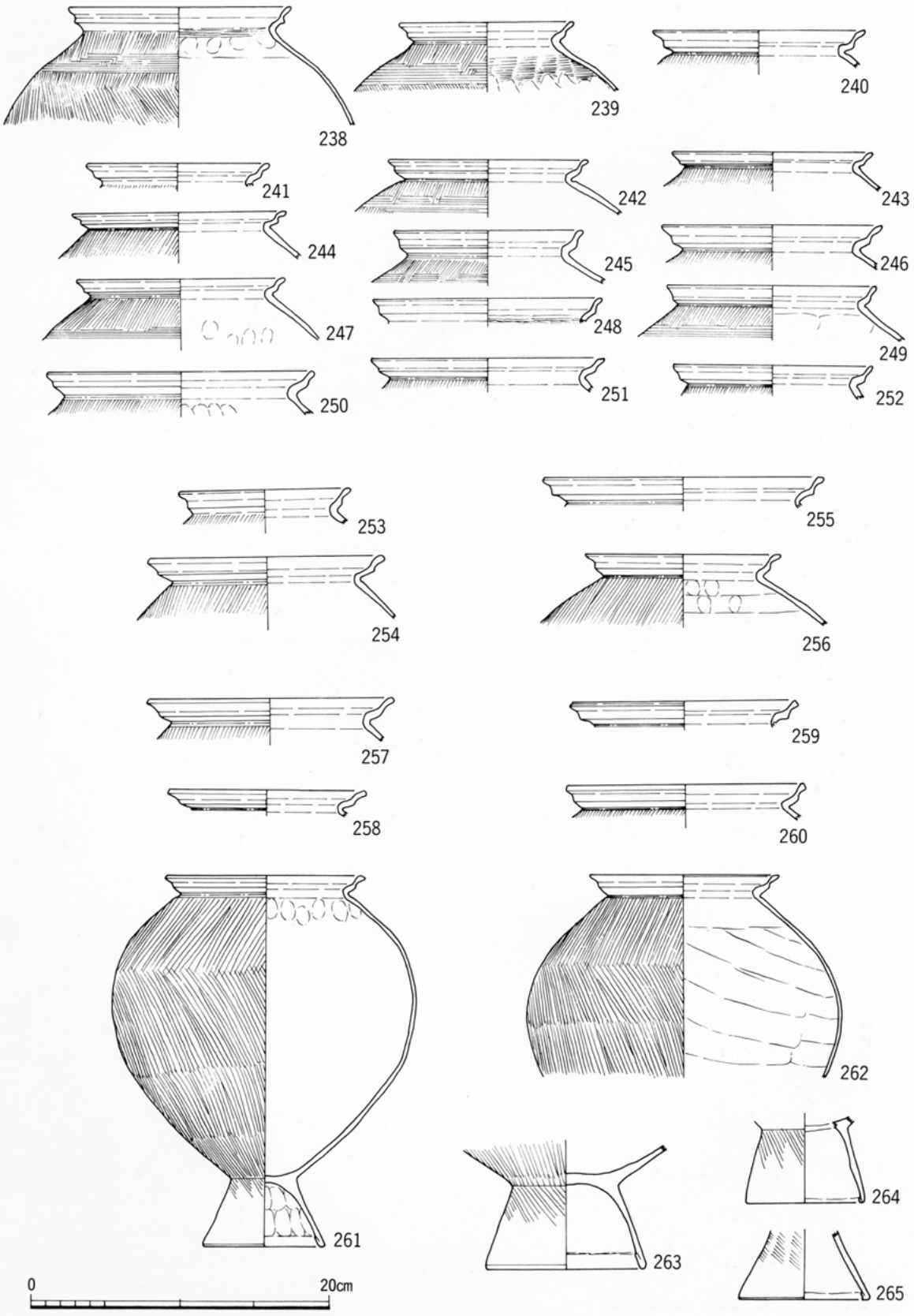




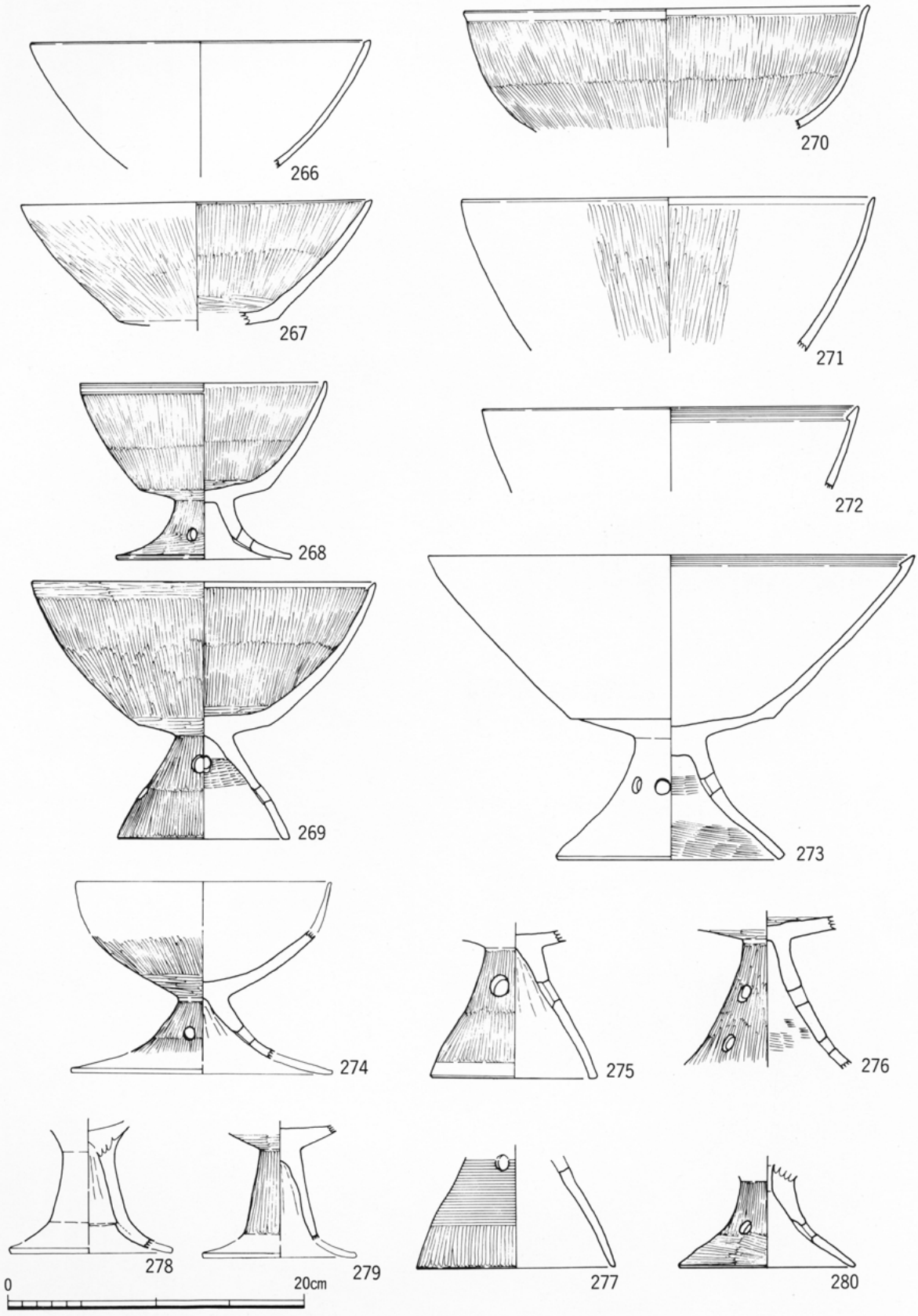
第67図　B地区(89Da・Ea区)包含層出土遺物（1：4）



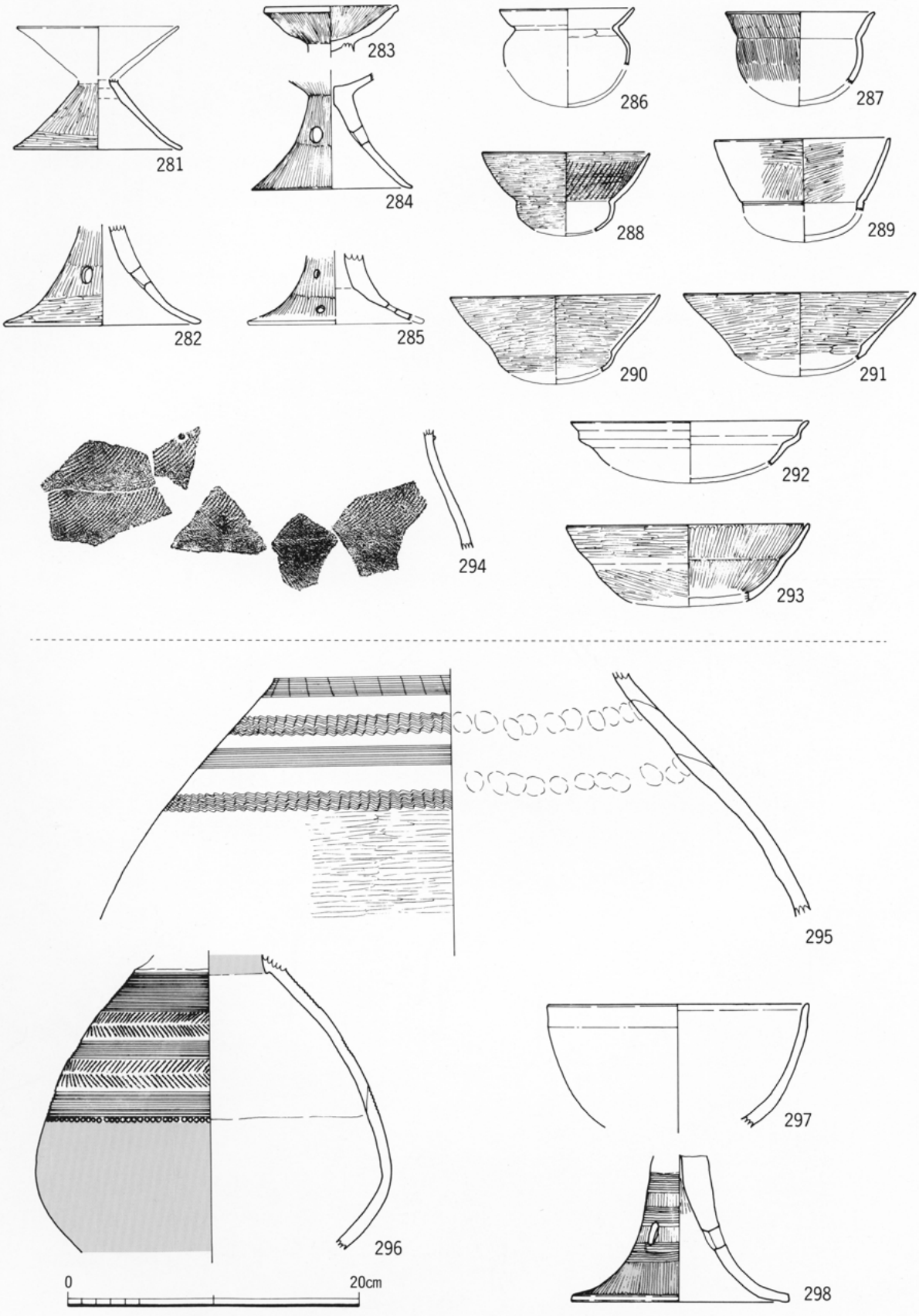
第68図　B地区(89Da・Ea区)包含層出土遺物（１：４）



第69図　B地区(89Da・Ea区)包含層出土遺物（1：4）



第70図　B地区(89Da・Ea区)包含層出土遺物（1：4）



第71図　B地区(89Da・Ea区)、C地区(89Db・Eb・F区)包含層出土遺物（1：4）

3　Ⅲ期の出土遺物

古墳・集石墓群（第25図～第82図）

S Z1301　埴輪…図版303～317は円筒埴輪で、318・319は形象埴輪の一部と考えられる。円筒型埴輪は全て「尾張型」円筒埴輪であり、全形を復原できる資料は認められないものの、２凸帯３段の通有の形態を推定できる。312・313から推測すると口径36cm・底径25.5cm・器高33cmで、基底から第１段・２段・３段の長さは、それぞれ11.5cm・８cm・14cmを測る。形態の特色は口縁部に向かって比較的直線的に立ち上がり、第３段つまり最上段が最も大きく、中間である第２段が狭く、透孔は大きく２方向に穿つ。こうした凸帯分割法による独特な形は、尾張型埴輪の小型品に普遍的に認められるものである。

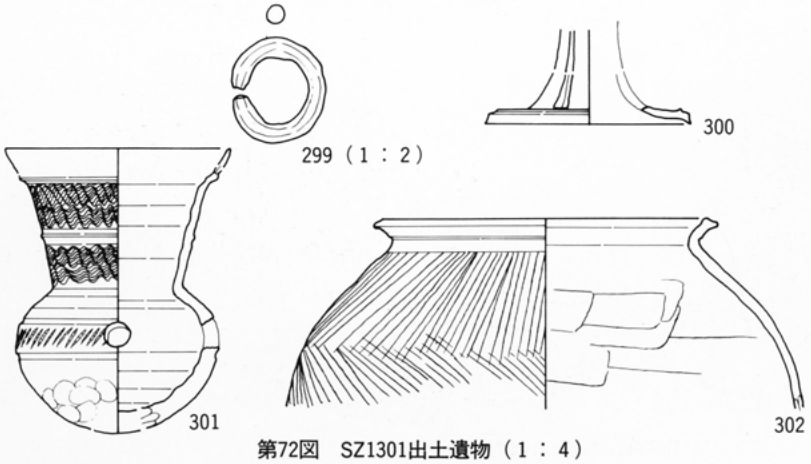
外面調整はタテハケのちヨコハケを全器壁面に施す。内面調整は最終的にはヨコ方向の動作により全器壁面を調整するものであり、その動作はヨコハケあるいはヨコ指ナデの２者が認められる。なおヨコハケの前にナナメハケを成形段階に用いる資料が、310・313・315に認められる。底部調整は内外底面に回転ケズリが施される資料が多い。

底部設定技法として味美技法がみられる。313・ 314・315・316には味美技法による底部設定と、その後の道具離脱をともなう「段」が認められる（底部設定Ａ１）。

凸帯は突出高と側面長比が１：２となり、鋭利なヨコナデ調整。その他311は、窖窯焼成の硬質埴輪で、色調は灰色を呈する。透孔は、楕円形状に大きく穿孔し、またその向かって右側にヘラ記号が認められる。

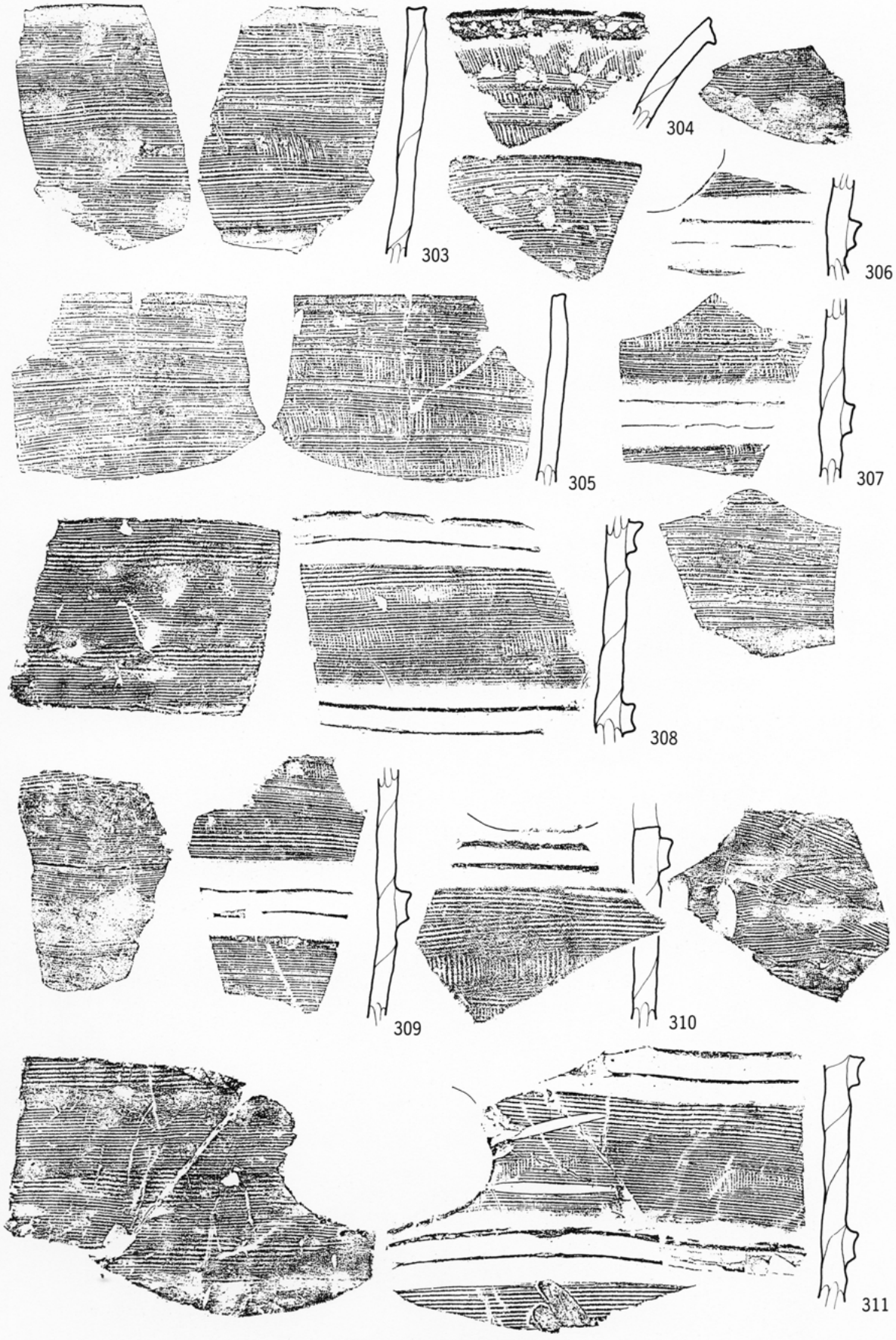
以上の円筒埴輪の特色は、尾張型埴輪の分類においても古い様相を呈する資料であり、具体的には内面調整におけるヨコ方向の調整にほとんど省略がみられず、味美技法が明確化し、基底外面にズレがみられない。凸帯は１：２で鋭利、底部調整は回転ヨコケズリを幅広く施すなどから尾張地域における埴輪編年Ⅲ－２期に中心をおく資料と考えておきたい（５世紀後葉）。

なお304は朝顔型埴輪の口縁部で、図化していないのが花状部等の破片も確認できる。

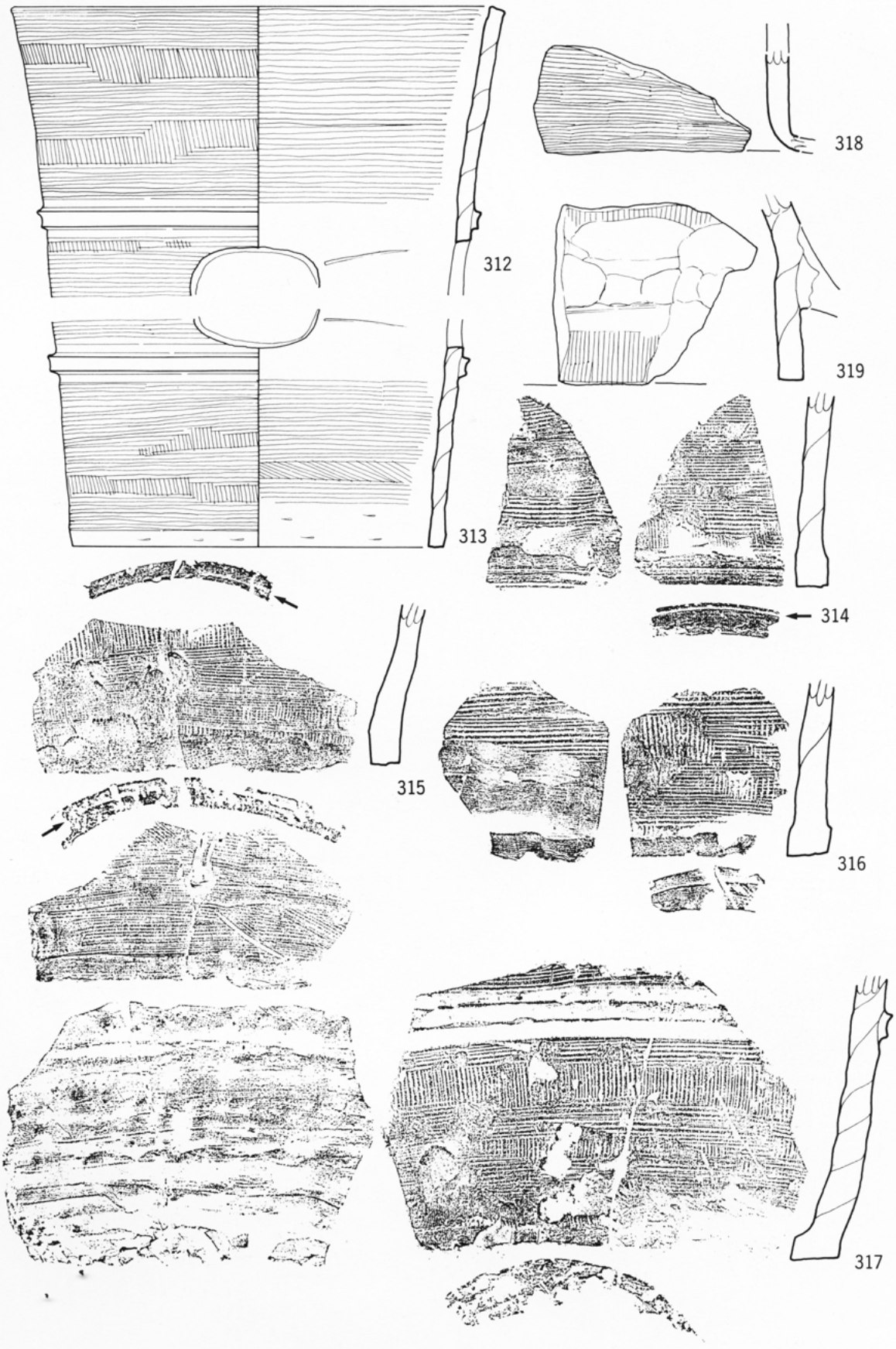


第72図　SZ1301出土遺物（１：４）

その他、周溝内より、陶邑編年ＭＴ－15号窯併行の須恵器（301）、高杯脚部片（300）、宇田型甕１段階に比定される（302）、および金属製品として、金メッキが施された耳飾り・金環（299）等が出土している。　（赤塚次郎）



第73図　SZ1301出土遺物（1：3）



第74図　SZ1301出土遺物（1：3、実測図は1：4）

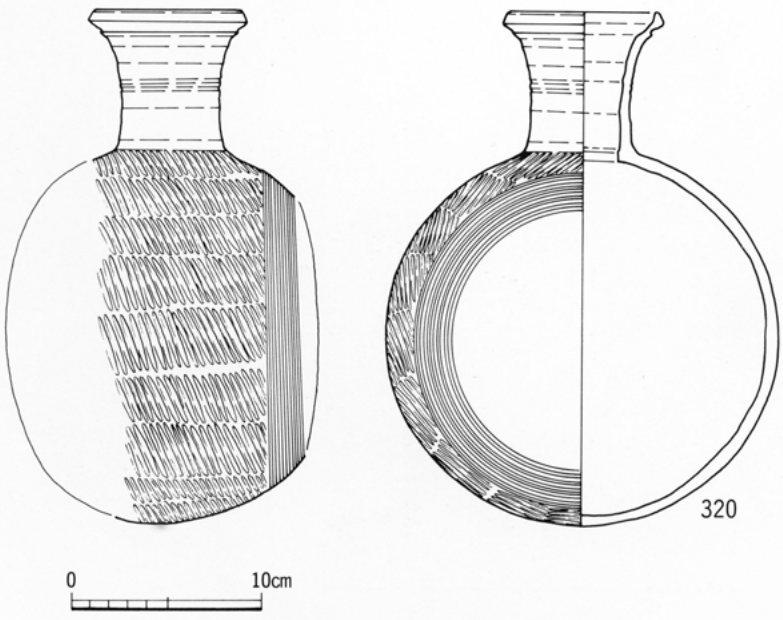
ＳＺ1302　第76図に図示した遺物が一括して周溝内より出土した。遺構の項でも述べたが、周溝最上層には、７世紀中葉を相前後した時期に集石墓群が築造される。出土遺物は周溝最下層に貼りついた状態では検出しておらず、すべて墳丘上から転落した状態で第19図14層より出土した。

出土遺物としては須恵器・土師器がある。

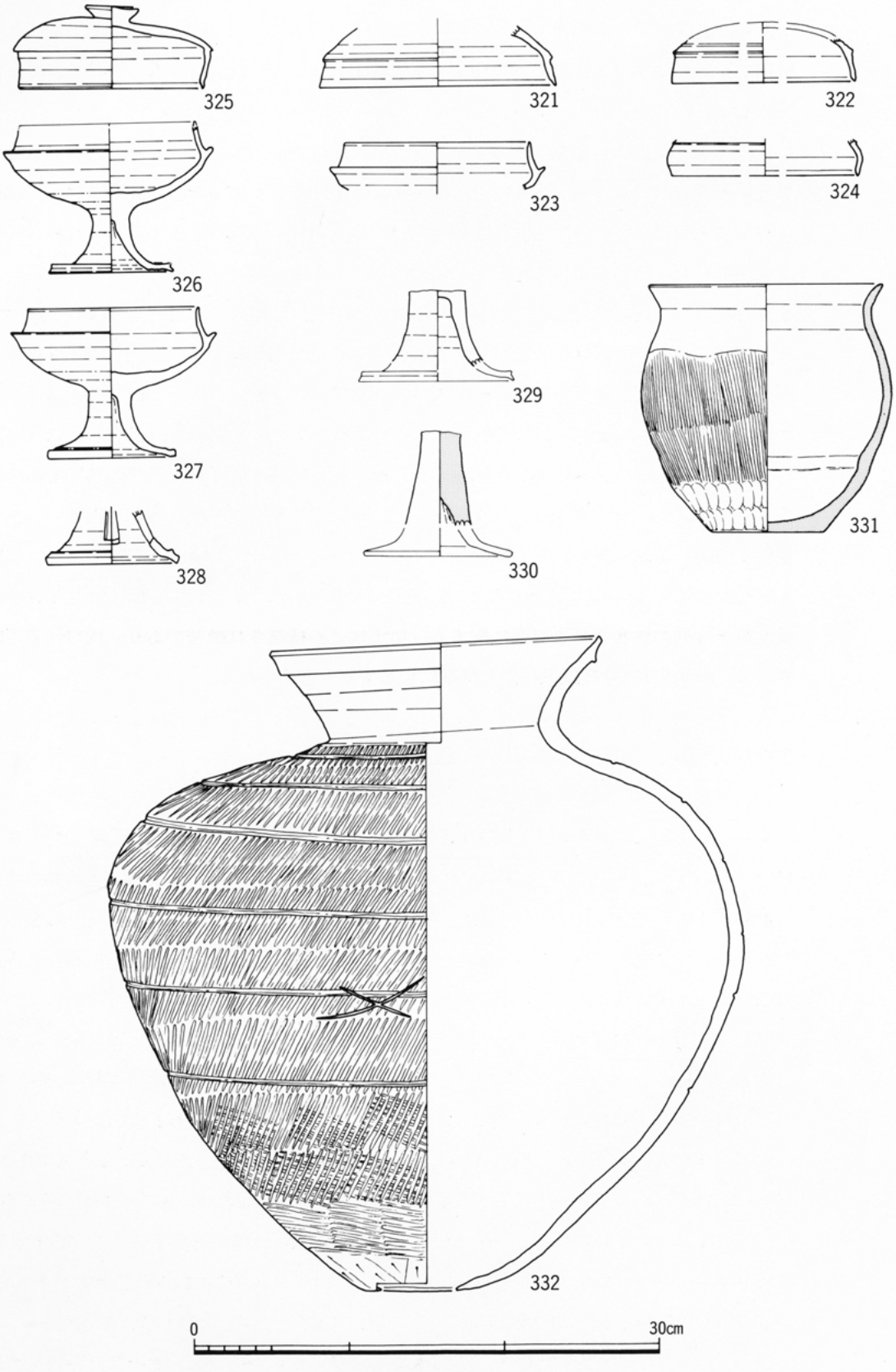
須恵器…321・322・ 324は杯蓋であり、いずれも天井部は欠損し、口縁部と画する稜の張り出しは短く鋭さに欠ける。324は内彎する口縁部を有する。323は杯身であり底部を欠損する。口縁部の立ち上がりは、やや内傾し受部は上外方へのび、端部は丸く収めている。325は有蓋高杯とセットをなす蓋であり、口縁はほぼ垂直にのび、稜の張り出しは短く丸い。天井部には、自然釉がかかり偏平なつまみがつく。326～329は高杯であり、326・ 327は全形を窺うことのできる資料である。脚部に比して杯部は比較的大きく一見バランスが悪い。杯部は、ほぼ323と同様の形状を呈し、底部下1/3にヘラケズリ調整が確認できる。脚部は短く外反する。328は短脚１段透孔をもつものである。332は、大形の甕であり、底部は焼成後穿孔される。口縁部は大きく外方にのび、体部には６条の沈線とタタキを施し、中央には×印が刻まれている。

土師器…331は平底の甕である。短く外反する口縁部と、内湾しながら底部にいたる形状を呈し、体部にはハケメ、指圧痕が残り、体部上半から口縁部はナデ調整が施される。335は脚裾部で屈曲する高杯である。

集石墓群　第75図320は、集石墓群を構成する主体部の一つであるＳＸ1308より出土した須恵器提瓶である。体部中央部分の大半を欠損するが、概ね口縁部から底部に至るまでその形状を窺うことができる。口頸部はほぼ直立気味に立ち上がり、口縁下部で緩やかに外反する。口頸部中央には不明瞭ながら２条の凹線が巡る。体部は偏平球状の形態を呈し、同心円状のカキメ調整、及びタタキが施されている。口頸部は内外面ともにナデによって調整される。また、口頸部との体部の接合痕も明瞭に確認することができる。胎土は精選され緻密であり、灰白色の色調を呈する。時期的には口頸部の形状等よりⅠ―17号窯古段階に併行するものと考えられ、７世紀中葉に比定できよう。



第75図　SX1308出土遺物（１：４）



第76図　SZ1302出土遺物（1：4）

SZ1303　ＳＺ1303からは、第77図333～344が、周溝内より、転落した状態で出土した。須恵器と土師器がある。

須恵器…334～336は、天井部を欠損するが杯蓋であり、いずれも稜を有するがその張り出しは短い。口縁端部は丸く収めるが、226は明瞭な段をもつ。337～339は、杯身であり、口縁部はいずれも内傾しながら立ち上がる。受部は上外方にのび、端部は丸く収める。体部下半にはヘラケズリが施され、やや丸みを持った底部となる。340は甕の体部片であり、穿孔部は突出した形状を呈する。これらの資料はやや時期幅をもつと考えられ、概ねＨ―44～Ｈ―50号窯式に相当すると考えられる。

土師器…341は宇田型甕、342～344は、いわゆる長胴甕である。344は全形を窺うことのできる資料である。口縁部は、短く外傾し、端部は平坦で面を持つ。ヨコナデにより調整される。体部は長くのび、底部は丸底である。体部外面の調整はタテハケが主体であり、内面の上位にはヨコハケの痕跡が確認できるが、下半部は器面があれ、不鮮明となっている。

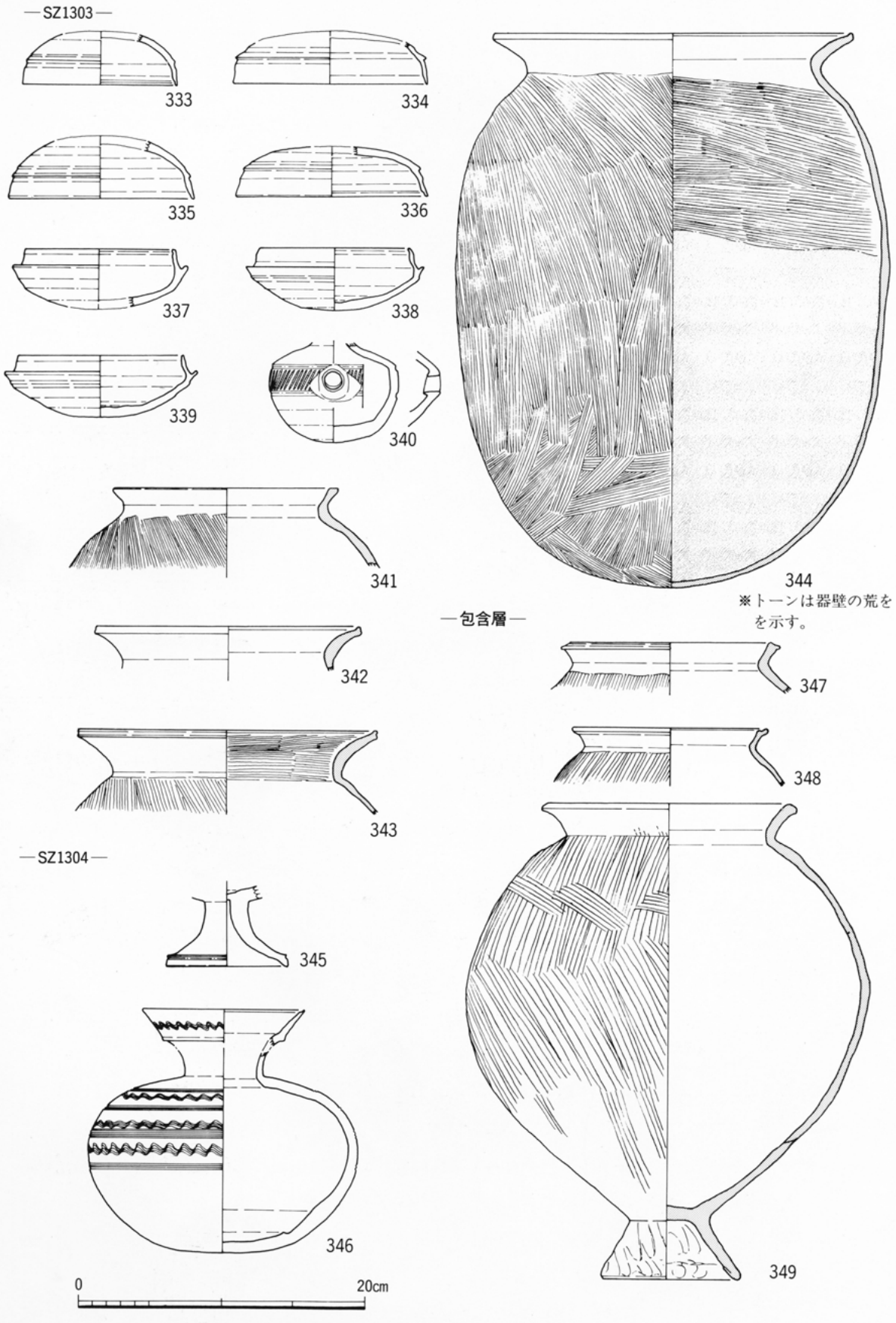
SZ1304　ＳＺ1304からは、第77図345・346が出土した。また図示はしていないが円筒埴輪の細片も出土している。 345は、短く外反する高杯脚部片であり、裾部には明瞭な面をもち、１条の沈線が巡る。346は、口頸部の一部を欠損するがほぼ全形が判明する資料であり、口頸部に比して体部は大形、偏平球状の形状を呈する。口縁部には波状文、体部には４列の沈線文帯と３列の波状文帯を交互に配する。胎土はよく精選され緻密であり、灰白色の色調を呈する。東山111号窯に併行する時期に相当すると考えられる。

包含層出土遺物（第77図～第78図）

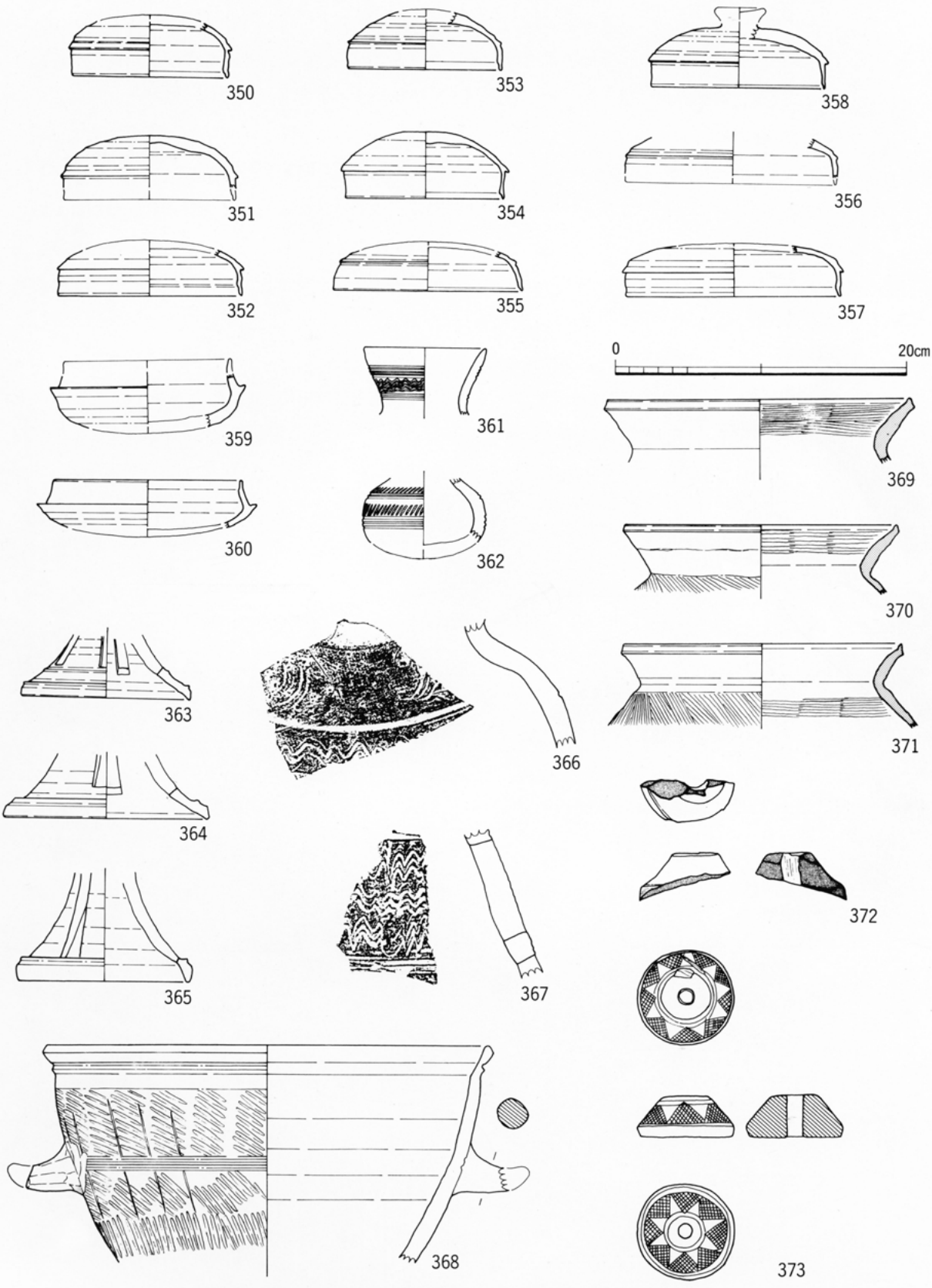
図示した遺物は、すべて五条川左岸に設定した89Ｅｂ・Ｆ区から出土したものである。第77図 347～348は宇田型甕であり、349は全形を窺うことができる。349は、短く外傾する口縁部をもち、端部は平坦で面を持つ。体部は卵状に長くのび、体部下半は下から上へのハケ、上位は上から下へのハケ調整を行い、部分的に斜めの方向のハケメが認められる。台部は短くハの字状に開く。

350～357は須恵器杯蓋片であり、350～354は、器高が高く、口縁内面には明瞭な眼をもつもので、概ねＨ―11号窯式に併行する資料と考えられ、359の杯身をほぼ同様の時期に相当する資料と考えられる。355～357は、偏平な器形となり、明瞭な稜をもつ。Ｈ―61～Ｈ―44号窯式に比定されよう。358は摘みのつく蓋である。361は直口壺、362は体部片である。363～365は、短脚１段透孔をもった高杯脚部片、367は器面に波状文を施す器台片か。368は、把っ手のついた甑片であり、体部中央に２条の沈線とタタキを施す。また、366は、壺等の体部片であり、器面上にヘラ描き文様を描き、初期須恵器の可能性が考えられる。369～371は土師器長胴甕の口頸部片であり、いずれも端部は平坦で面をもつ。

372・373は、石製紡錘車であり、373は側面および下面に斜格子文で充塡した鋸歯文が描かれている。



第77図　SZ1303・1304・包含層出土遺物（1 : 4）



第78図　89Eb・F区包含層出土遺物（1：4，拓図・石製品は1：2）

4　Ⅳ期の出土遺物

Ⅳ期の遺物は、ほぼ各調査区で確認することができたが、それに伴う遺構は少なく、また、遺物の出土量も少なかった。以下、遺構出土と包含層出土資料とに分け、説明していきたい。

ＳＤ1401　374は、須恵器の杯身であり、Ｏ―10号ないＩＧ―78号窯式に比定できよう。

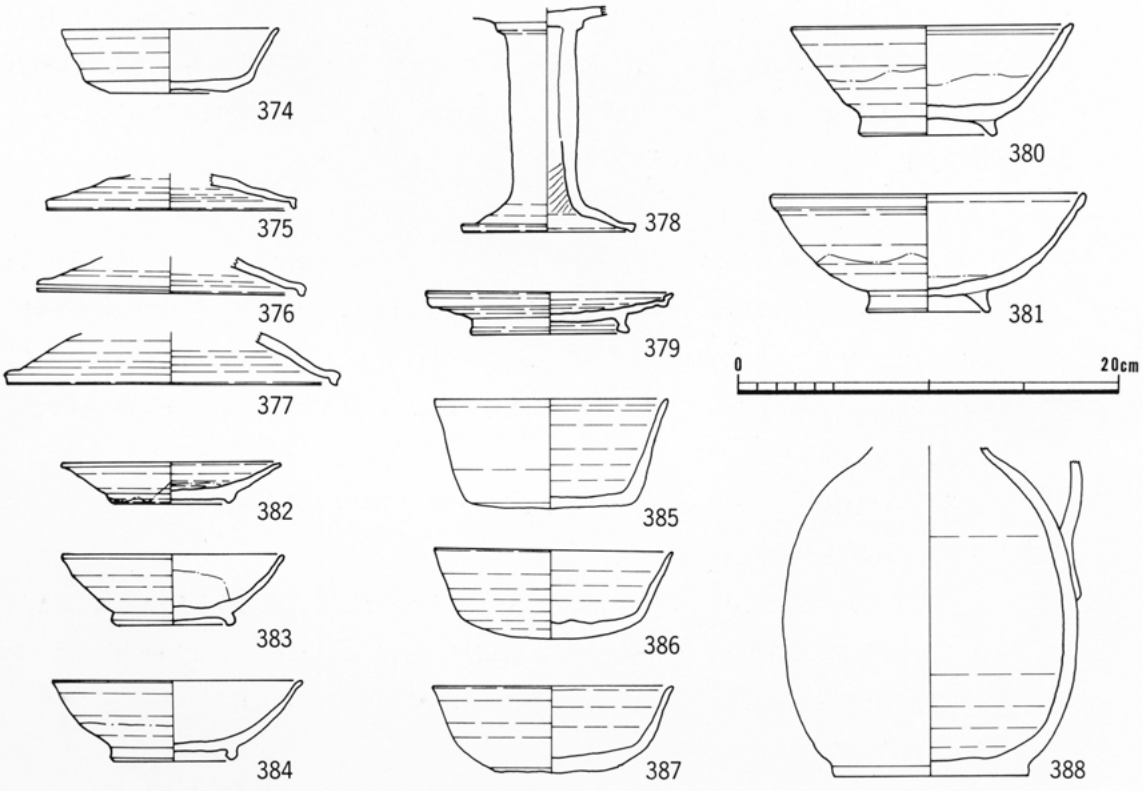
ＳＫ1401　比較的まとまった遺物が検出されており、375～377は蓋、378は高杯脚部、379は高台のついた盤である。すべて９世紀第１四半期に相当し、ＩＧ―78号窯式に比定できよう。

ＳＤ1501　382・383の２点が出土している。いずれも11世紀前葉に比定でき、Ｈ―72号窯式に併行すると考えられる。

ＳＸ1501　性格不明の集石内より検出したものであり、380・381ともにやや深めの体部をもった椀である。381の口縁部は、肥厚し玉縁状となる。百代寺窯式に比定できよう。

包含層　384～388は、包含層出土である。384は、Ｏ―53号窯式と考えられる灰釉陶器。385～387は、Ｉ―41～Ｃ―２号窯式に相当する須恵器杯身。388は、Ｋ―90号窯式に比定することができようか。

（服部信博）



第79図　Ⅳ期の出土遺物（１：４）

5　Ⅴ期の遺物

Ⅴ期の遺物は、五条川右岸では遺構に伴うものは少なく、左岸の溝や井戸からの出土が多い。遺物としては、灰釉系陶器、いわゆる山茶椀・小皿が多く、他に古瀬戸・常滑・土師質のいわゆる伊勢型鍋などの出土が見られる。

器種分類　まず、灰釉系陶器のみ器種分類をしておく。

椀A　無釉の椀。灰釉系陶器の椀、山茶椀。

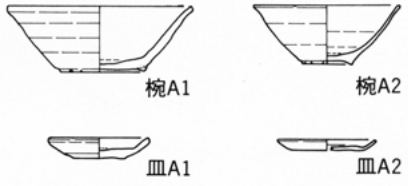
A１　器壁は厚く、表面はザラザラした荒肌手。籾殻痕が残る高台がある。

A２　器壁は薄く、表面は滑らかな均質手。籾殻痕が残る高台である。

皿A　無釉の皿。灰釉系陶器の皿、小皿。

A１　器壁は厚く、表面はザラザラした荒肌手。

A２　器壁は薄く、表面は滑らかな均質手。



第80図　器種分類（Ⅴ期の遺物）

ＳＥ04（第84図、389～402）

椀Ａ１、皿Ａ１、土師器鍋が井戸の埋土や井戸枠付近から出土した。椀には397や398のように底裏や見込みに、墨書が認められるものが含まれる。401は全体の作りは他の山茶椀と同じであるが、口縁の一部をつまみだし、片口椀となっている。402は土師質鍋で、いわゆる伊勢型鍋。口縁部の形態から新田分類の５類に相当する。

ＳＤ26（第89図、403～412）

椀Ａ１・Ａ２、皿Ａ２、古瀬戸壺、常滑窯の甕、土師質鍋が出土した。403は皿Ａ２。404～408は皿Ａ１。408は褐色である以上は、厚手の山茶碗に類似するが、高い台を持つ。409・410は灰釉の古瀬戸で、409は水注、410は壺の口縁部であろう。411は常滑窯産の甕である。412は内・外面に指押さえの後が残る土師質鍋。口縁部の形からこれも伊勢型鍋である。

ＳＥ03（第15図、413～416）

椀Ａ２が出土した。413～416はいずれも美濃窯産で明和１号窯式に相当する。

ＳＤ26（第85図、417～423）

椀Ａ２、皿Ａ１・Ａ２、縁釉皿、古瀬戸壺、常滑甕が出土した。417と420は皿Ａ２と椀Ａ２。418と421は皿Ａ１と椀Ａ１である。419は口縁部のみに灰釉を施した縁釉皿。

422は灰釉の古瀬戸の壺。423は常滑窯産甕で口縁部の形状から14世紀後半頃に比定される。

ＳＥ06（第85図、424～429）

椀Ａ２、皿Ａ２、古瀬戸の壺が出土した。424～428の皿・碗はいずれも均質手で、椀は籾殻痕の残る高台がつく。429は古瀬戸の壺。鉄釉が掛かるが焼成は良くない。

6　Ⅵ期の遺物

Ⅵ期の遺物としては、調査区全域から土器・陶磁器が出土し、溝の中からは木製品も大量に見つかった。記述に当たっては、材質別にまとめるが、土器・陶磁器については一括して述べる。遺物は遺構に伴なって出土したものを中心に概観する。なお瓦はまったく出土しなかった。金属製品も腐食してほとんど形をとどめない銭貨があったほかは出土を見なかった。

(1)　土器・陶磁器

土器には、土師質土器と瓦器があり、陶磁器には中国産などの輸入陶磁器と国産の陶器がある。器種は椀、皿、鉢、壺、甕、鍋に大別できる。説明を簡略化し、重複を避けるため次に器種分類をしておく。

器種分類

椀B　高台があり、口縁部にくびれがある施釉の椀。いわゆる天目茶椀。

- B１　体部外面下半部に鉄錆釉の化粧掛けを施した椀。
- B２　高台裏が内反りになっている椀。
- B３　体部外面下半部に鉄錆釉の化粧掛けを施さない椀。

椀C　高台があり、口縁部にくびれがない施釉の椀。

- C１　体部が丸みを帯びた椀。丸椀。
- C２　体部が丸ノミで蓮弁を現した椀。
- C３　体部が丸みを帯びているが偏平な椀。平椀。
- C４　体部が直線的に開く偏平な椀。
- C５　腰部が折れる椀。

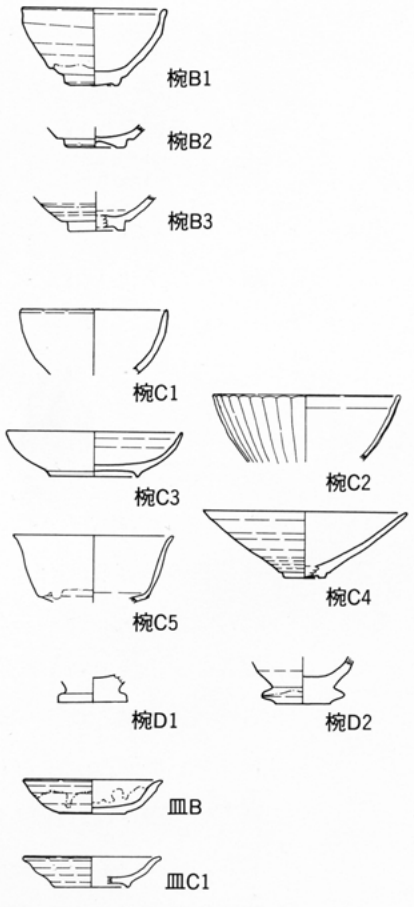
椀D　高台が横に広く作られる椀。

- D１　底部が台状に広く作られる椀。
- D２　台部の中間が鍔状に広がる椀。

皿B　口縁部だけに施釉した縁釉皿。

皿C　内面は全面に施釉した皿。

- C１　付高台で口縁部が外反するもの。いわゆる端反り皿。



第81図　器種分類（Ⅵ期の遺物－１）

C２　付高台で、見込み部に花文の印を押すもの。

C３　削り込み高台いわゆる碁笥底で、口縁部が外反するもの。

C４　口縁部が外へ折れ曲がり、端部が短く立ち上がるいわゆる折縁皿。

皿D　内面に同心円の圏線の入った皿。

土師質皿

皿A　手づくねの皿。非ロクロ成形。

A１　体部外面は指押さえで調整。

A２　体部外面を１段に横ナデする。体部は摘み上げるように作る。口径は約6.5cm。

皿B　ロクロ成型の皿。底部に糸切痕が残る。大量生産のためか規格品が多い。

B１　口径が約８cm

２　口径が約9.5cm

３　口径が約11cm

４　口径が約12.5cm

５　口径が約14cm

６　口径が約15.5cm

７　口径が約17cm

８　口径が約21.5cm

鉢A　体部が逆ハの字状に開く施釉の鉢。

A１　口縁部が直線的に伸びる鉢。

A２　口縁部内側に端部が小さく突出。

A３　口縁部内側に段か突帯が付くもの。

鉢B　体部が直立するもの。

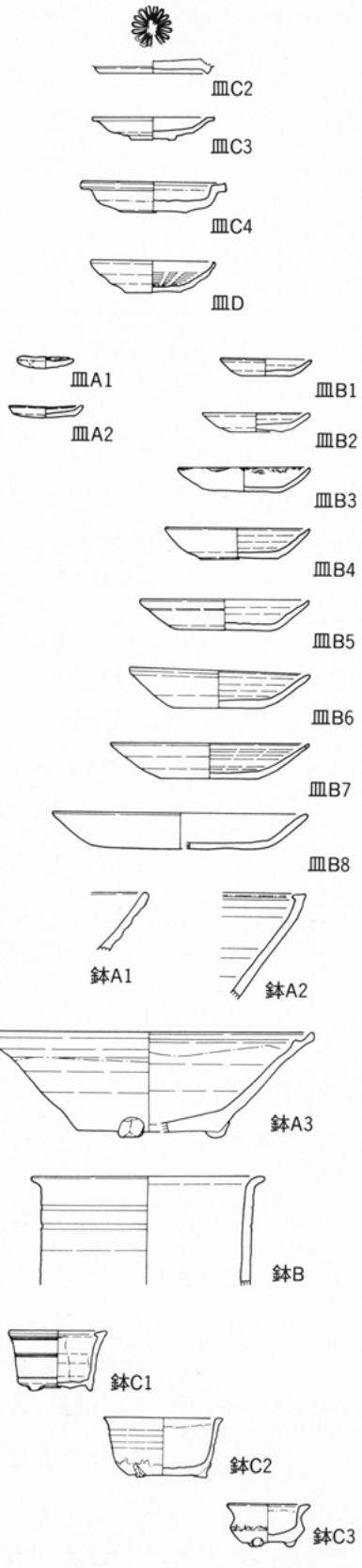
鉢C　小型で体部が直立するもの。香炉。

C１　口縁部が外側へ小さく突出する。

C２　口縁部が内側へ折れ曲がるもの。

鉢D　体部が逆ハの字状に開き、内面に摺目をもついわゆる擂鉢。

D１　口縁部が内側へ折れ曲がり、やや



第82図　器種分類（VI期の遺物－２）

口径に比べ器高の高いもの。

D２　口縁部が内側へ折れ曲がり、体部は外反気味に大きく開くもの。

D３　口縁端部が内外面に僅かに突出。

D４　口縁部に縁帯があるもの。

壺A　高台をもち、肩に耳が付くもの。

B　やや頸部が長く、耳が付かないもの。

C　肩がほとんど張らないもの。

D　体部に注口を持つ水滴。

E　口縁部が僅かに立ち上がる肩衝茶入れ。

瓶

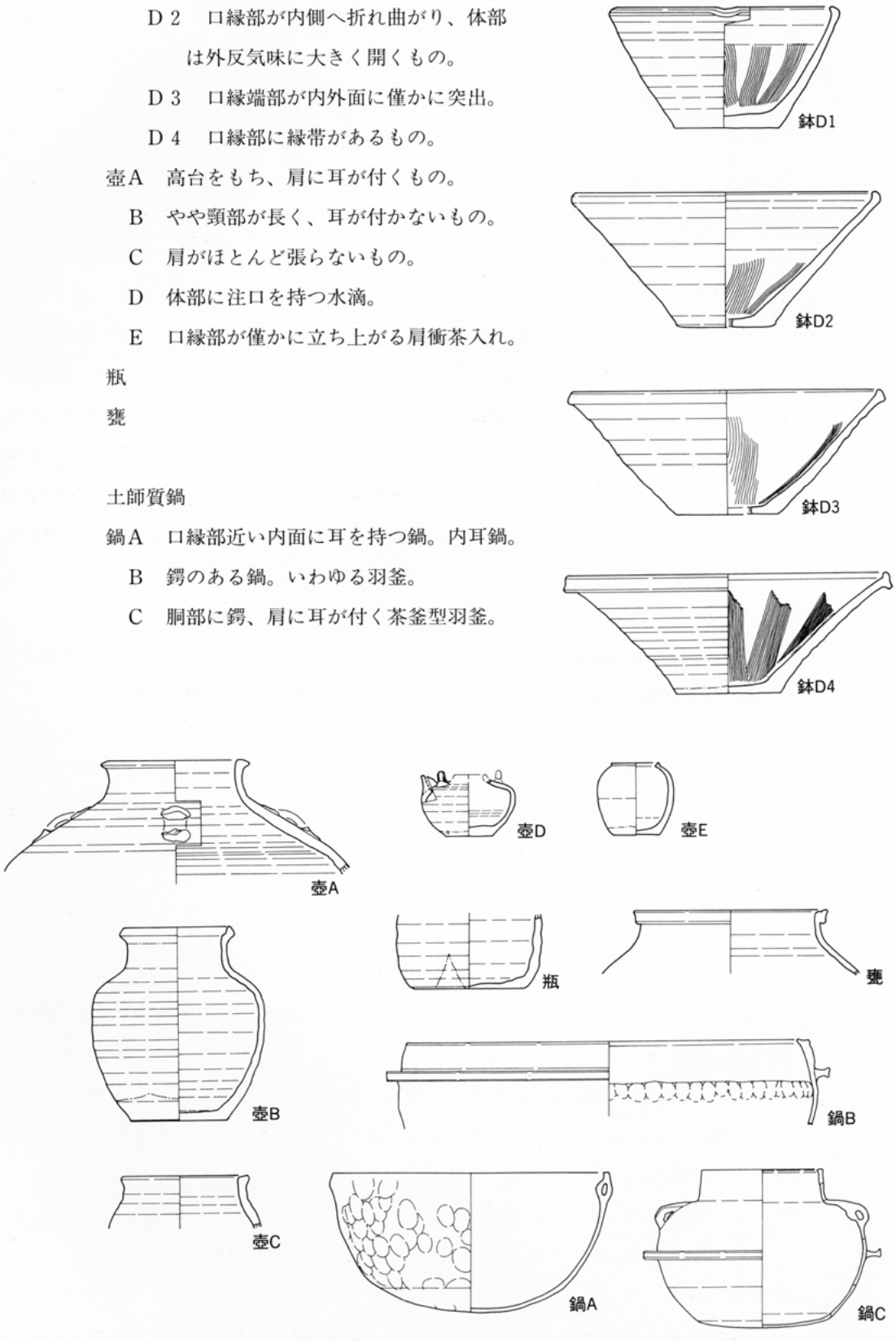
甕

土師質鍋

鍋A　口縁部近い内面に耳を持つ鍋。内耳鍋。

B　鍔のある鍋。いわゆる羽釜。

C　胴部に鍔、肩に耳が付く茶釜型羽釜。



第83図　器種分類（VI期の遺物－３）

SX01（第86図、430～454）

62B区と63Bc区で検出した焼土面の広がりからの出土遺物。幅８ｍ、長さ3.2ｍの範囲で焼土と炭化物に混ざって検出された。壁土の焼けた固まりもかなり含まれることから、建物が焼け落ちた痕跡と考えられる。椀B,、土師質皿Ｂ３、Ｂ７、鉢Ｄ１、Ｄ３、Ｄ４、瓶のほか、胎土から信楽窯産と推定される壺が出土している。この他に注目すべきものとして貿易陶磁がある。実測図を描けないような細片を含めても土師質皿29点、天目茶碗３点、擂鉢３点、鉢６点、壺８点、その他25点の合計74点。これに対して、貿易陶磁は青花31点、白磁７点、青磁25点、合計63点を数える。439～443は青花皿。碁笥底で、見込みには２条の界線があり、その内側に花文が描かれる。小野分類の皿C群に属する。447・445・447はもう少し大ぶりで、端反り口縁部の内外面に界線が在り、外面には花文がえがかれている。446は椀で端反り口縁部の内外面に界線があり、外面には花文が認められる。小野分類の椀B群に属す。450は灰色の胎土で、陶器と磁器の中間のような焼きである。口縁部は外方へ開く。端部は角にヘラ切りされ、厚く釉がかかり、細かい貫入が入る。朝鮮半島からの輸入品である。452は壺の蓋で、上面には鎬文が施される。453は椀で、外面には刻線蓮弁文がある。454・455は鉢の一部で、いずれも見込みに花文が線刻される。455は、高台裏は蛇の目に釉が掛かる。

SD01（第87図、455～463）

灰色粘質土から、土師器皿Ａ２、Ｂ２、Ｂ４、皿B、D、椀Ａ１、Ｂ１が出土。455は指押さえの跡が明瞭に残る。457は底裏に墨書あり、底径から推測すると土師質皿Ｂ４か。462は灰釉が掛かった丸椀。463は腰部に鉄錆釉が掛かる。大窯Ⅰ期。

SD02（第87図、464～469）

灰色粘質土の同じレベルで出土。輸入磁器椀が１点出土。他に皿D、鉢Ｄ４、鍋B、Cが出土。466は外面に芭蕉文が描かれる。鍋はいずれも鍔より下部に厚く煤が付着。

SD03（第88図～第90図、470～552）

遺物は非常に多く、一括投棄されたことが明瞭な土師質皿は200点以上もまとまっていた。土師質皿Ａ１、Ｂ３～７、椀Ｂ１、Ｃ２、Ｃ３、Ｃ５、壺B～D、鉢B～D、鉢Ａ２、Ａ３、Ｃ２、Ｄ２、Ｄ３、鍋A、C、土鈴、輸入磁器が出土。535、536は灰釉が掛かり、青磁椀を模倣して外面には蓮弁文を丸ノミで削って表現している。543は焼成が不良な黄褐色の青磁椀である。544は厚手の青磁の鉢で、鮮やかな青色の釉の下には線刻した花文が見られる。547は窖窯の製品で口縁は欠損しているが鉢Ａ３であろう。底裏には「やうしやうとのの者可」と墨書が残る。

SD04（第91図、556・557）

遺物は少なかった。556は土師器皿Ｂ４。557は青緑色の釉が厚く掛かった酒会壺。

SD05（第91図、558～566）

土師質皿Ａ１、Ｂ１、Ｂ５、皿C、鉢Ａ３、Ｃ２、壺Dの他に青花椀、青磁鉢が出土。563は灰釉の香炉で、内面は口縁部のみ、外面は腰まで施釉される。粗雑な作りの足が付く。565

は口縁部は無いが灰釉の皿で、畳付き以外は施釉され削り込み高台である。566は青花椀で外面に花文が描かれている。557は青磁の鉢で内側口縁部直下に浅い沈線が１条線刻されている。

SK03（第91図、568～586）

土師質皿Ａ１、Ｂ１～８のほかには天目茶椀口縁部の細片と鉢Ｃ３が各１点出土したのみである。土師質皿は最高８枚程重なって出土。土師質皿をまとめて捨てた廃棄土⊞坑観がある。油煙がついて黒く汚れた皿はＢ２に多く認められ、規格品の皿を特定の目的で使用していた可能性がある。

SD06（第92図・第93図、587～632）

土師質皿Ａ１、Ｂ１～６、椀Ｂ１、Ｂ３、Ｃ１、Ｃ２、皿B、青磁の椀、皿が出土している。土師質皿は４か所集中して見つかり、そのまとまりごとに残存状況の良いものを図示した。619～621は天目茶椀で大窯Ⅰ期のもの。622は腰から下は鉄錆釉の化粧掛けは行われず、輪高台の削り込みも著しい。大窯Ⅲ期に比定。これが、掘り直された溝の最下層から炭化物の細かな粒や焼土と共に出土したことから、岩倉城落城年代である永禄２（1559）年には大窯Ⅲ期の製品が市場に出回っていたことの根拠になるとの推定がされている。

626は椀Ｃ２。灰釉の丸椀で、丸ノミで蓮弁が表現されている。627は口縁部内側に線刻がみられる青磁の皿。628の青磁の椀である。629は窖窯期の灰釉鉢である。634は擂鉢と同じ薄い照りのある錆釉がかかる。円形浮文が２個と菊花文が押印される。全形は不明。

SD07（第93図、635～639）

遺物は少なく僅かに土師質皿Ｂ１、Ｂ２、皿Ｃ３、D、青磁椀が出土した。

SD19（第94図、640～645）

椀Ｂ１、Ｃ４、鉢Ｄ２、Ｄ４、壺Aが出土。

SD15（第94図、646～649）

鉢Ｄ１のほかには瓦質の高い台が付いた壺647や丁寧な作りで立派な脚が付いた長方形の瓦質火鉢649が出土。

SD08（第95図、650～670）

土師質皿Ａ１、Ｂ１、皿Ｃ２、Ｃ４、D、椀Ｂ１、Ｂ２、椀Ｄ１、壺Ｄ１、壺A、C、鉢Ｄ２、瓶、そのほか白磁皿、青花椀・皿が主に青灰色シルト層から出土した。

SD09（第96図、679～681）

皿Ｃ１、瓶、青磁680が出土した。

SD10（第96図、682～689）

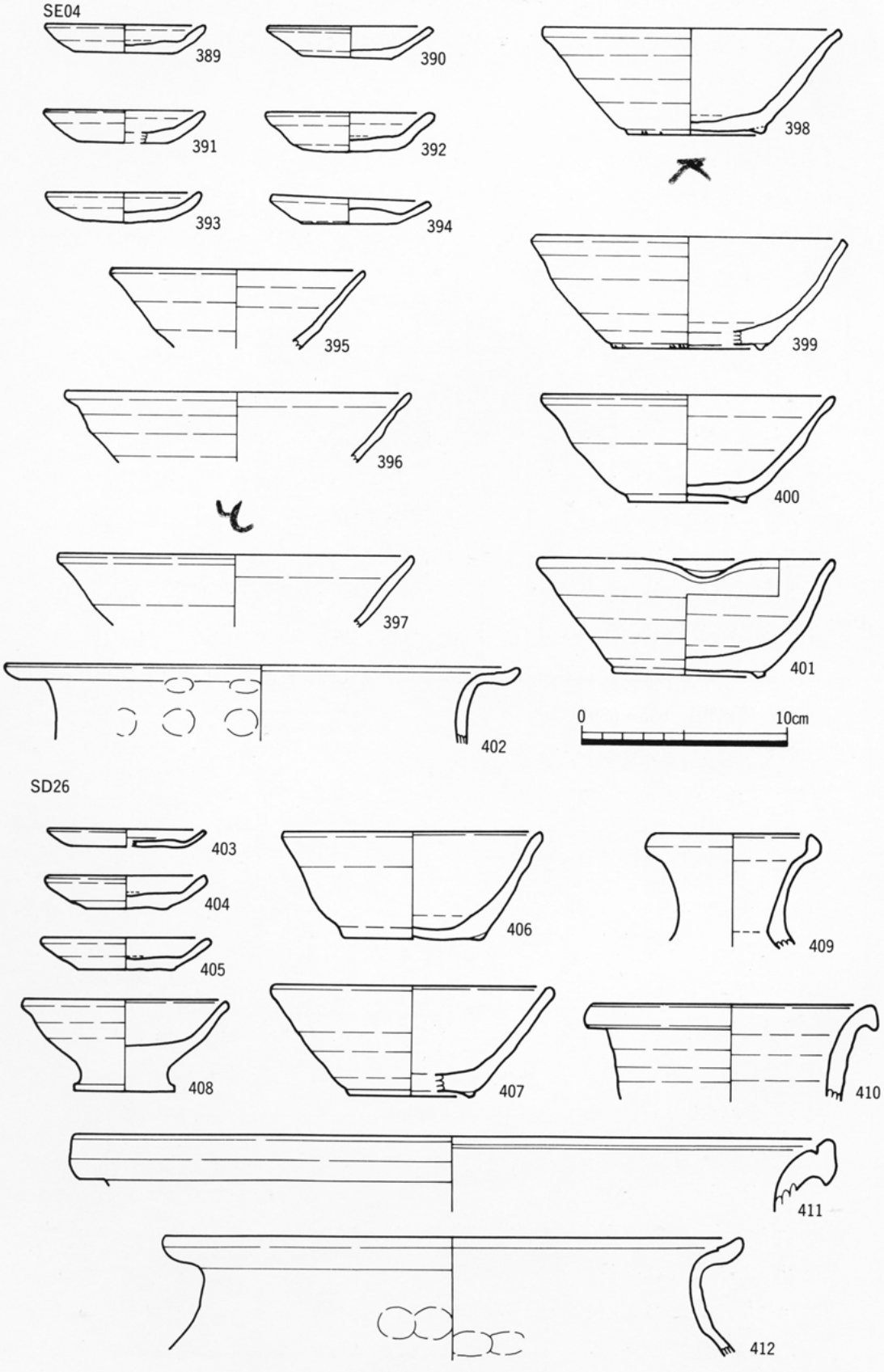
椀Ｂ１、Ｄ２、皿B、壺E、鉢Ｄ３、常滑窯産の甕が出土。

SD20（第97図、690～693）

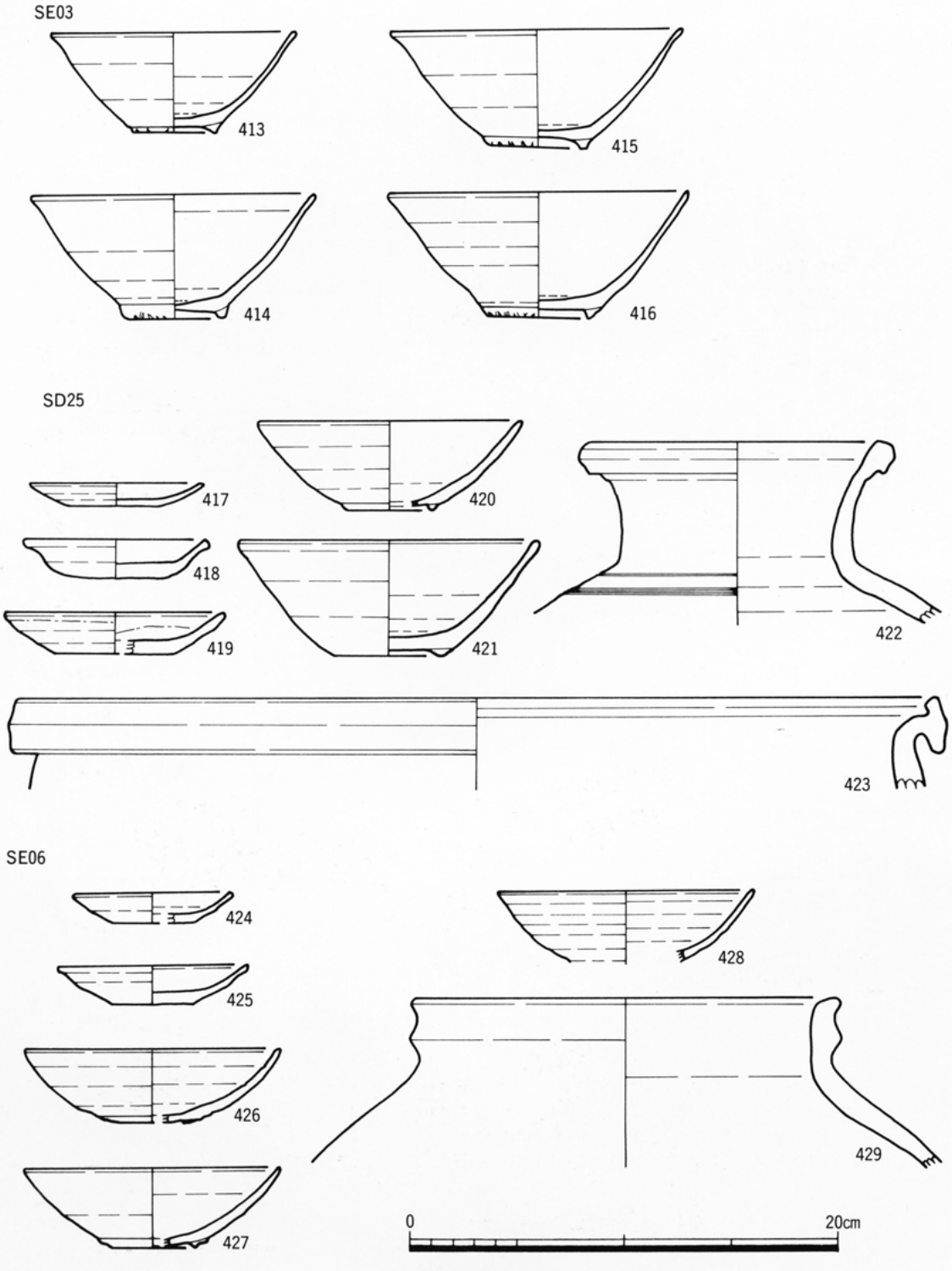
土師質皿Ａ１、Ｂ４、椀Ｂ１、土師質鍋Aが出土。

SD21（第97図、694～703）

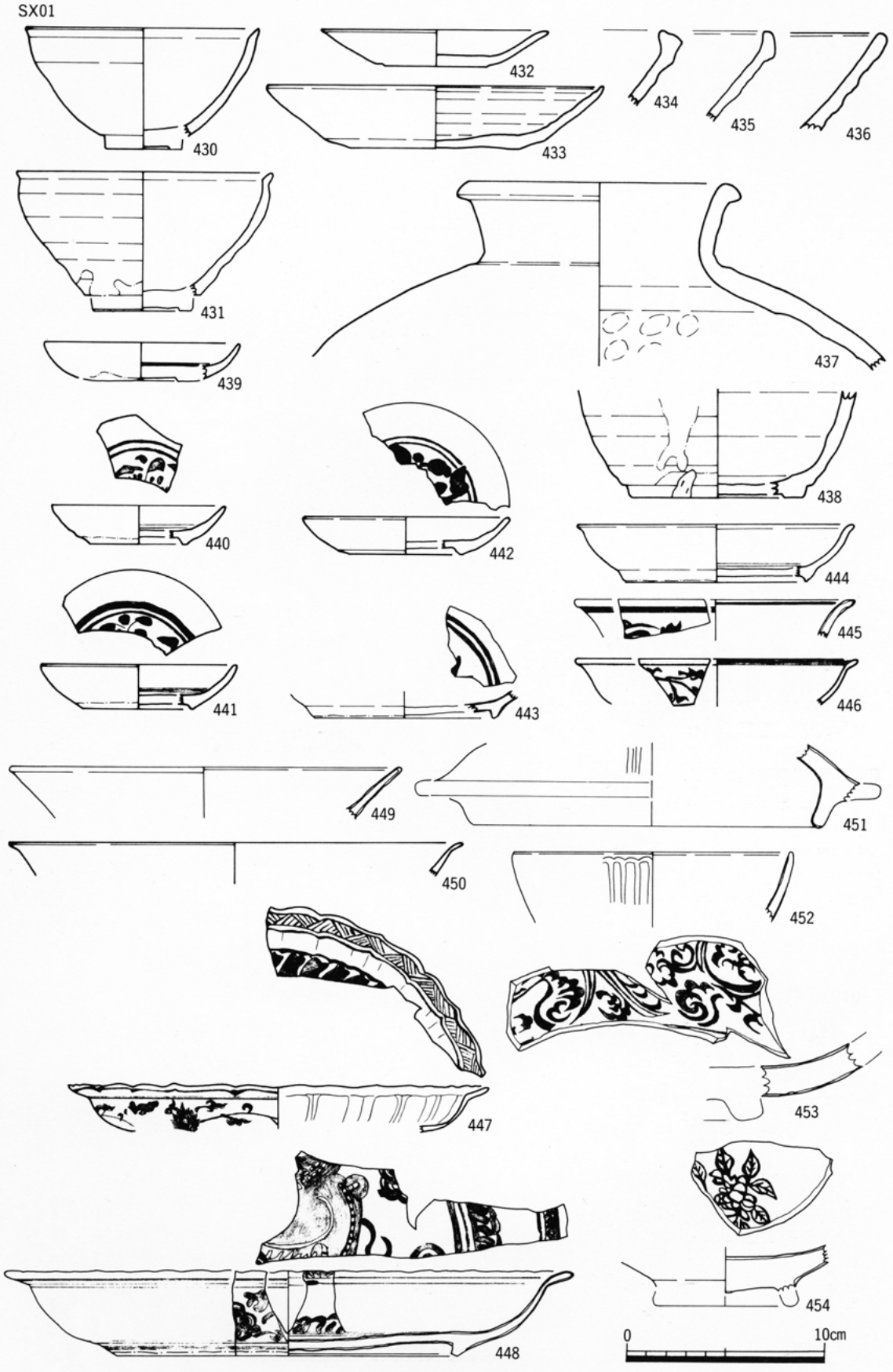
土師器皿Ａ１、Ｂ２、椀Ｂ３、鉢B、Ｄ２、壺C、甕が出土。


SE04
389
390
398
391
392
393
394
399
395
396
400
397
401
402
0
10cm
SD26
403
404
406
409
405
408
407
410
411
412

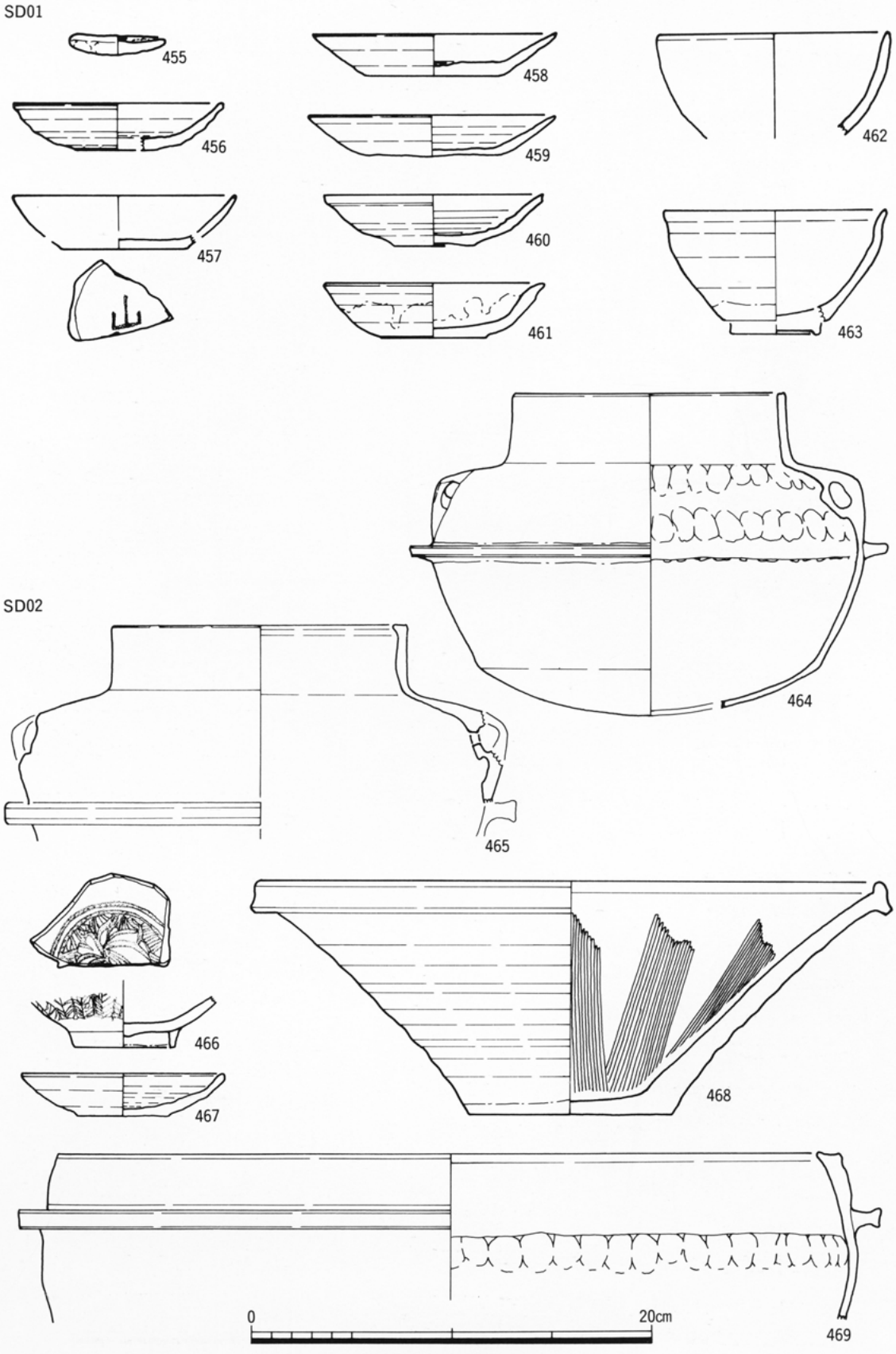
第84図　V期の遺物(1)


SE03
413
415
414
416
SD25
417
420
418
421
419
422
423
SE06
424
428
425
426
429
427
0
20cm

第85図　V期の遺物(2)

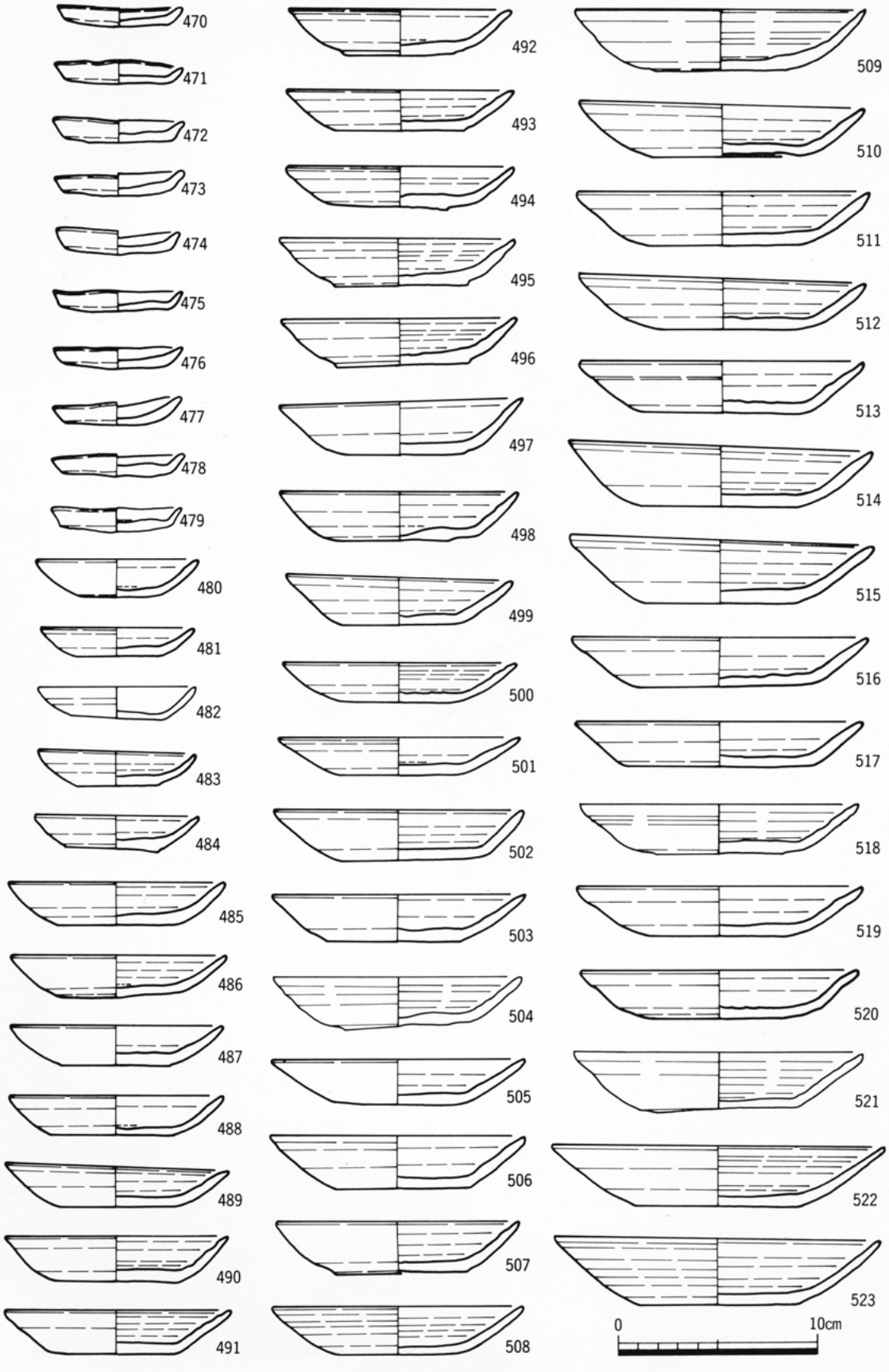


第86図　VI期の遺物(1)



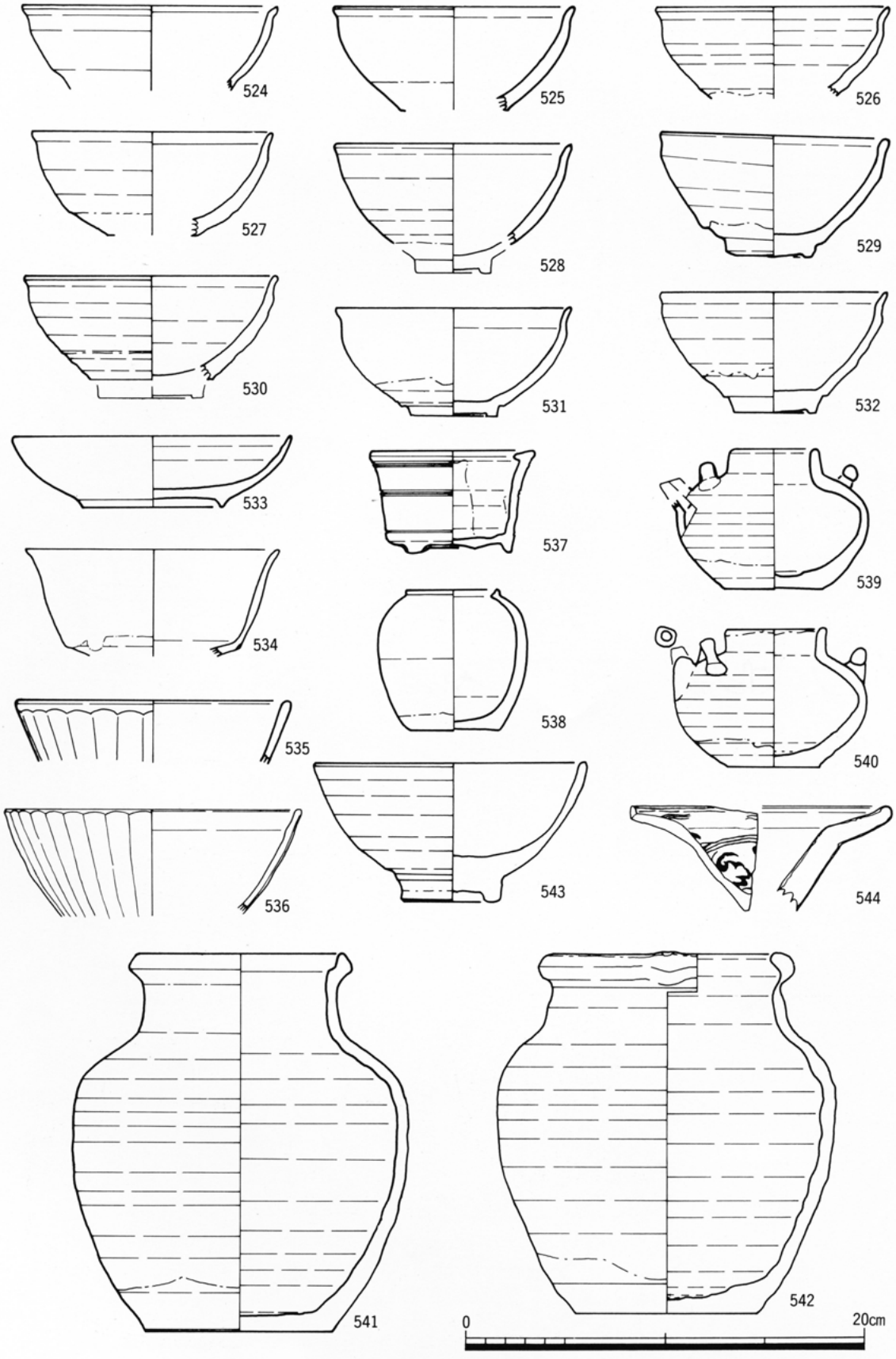
第87図　VI期の遺物(2)

SD03(1)



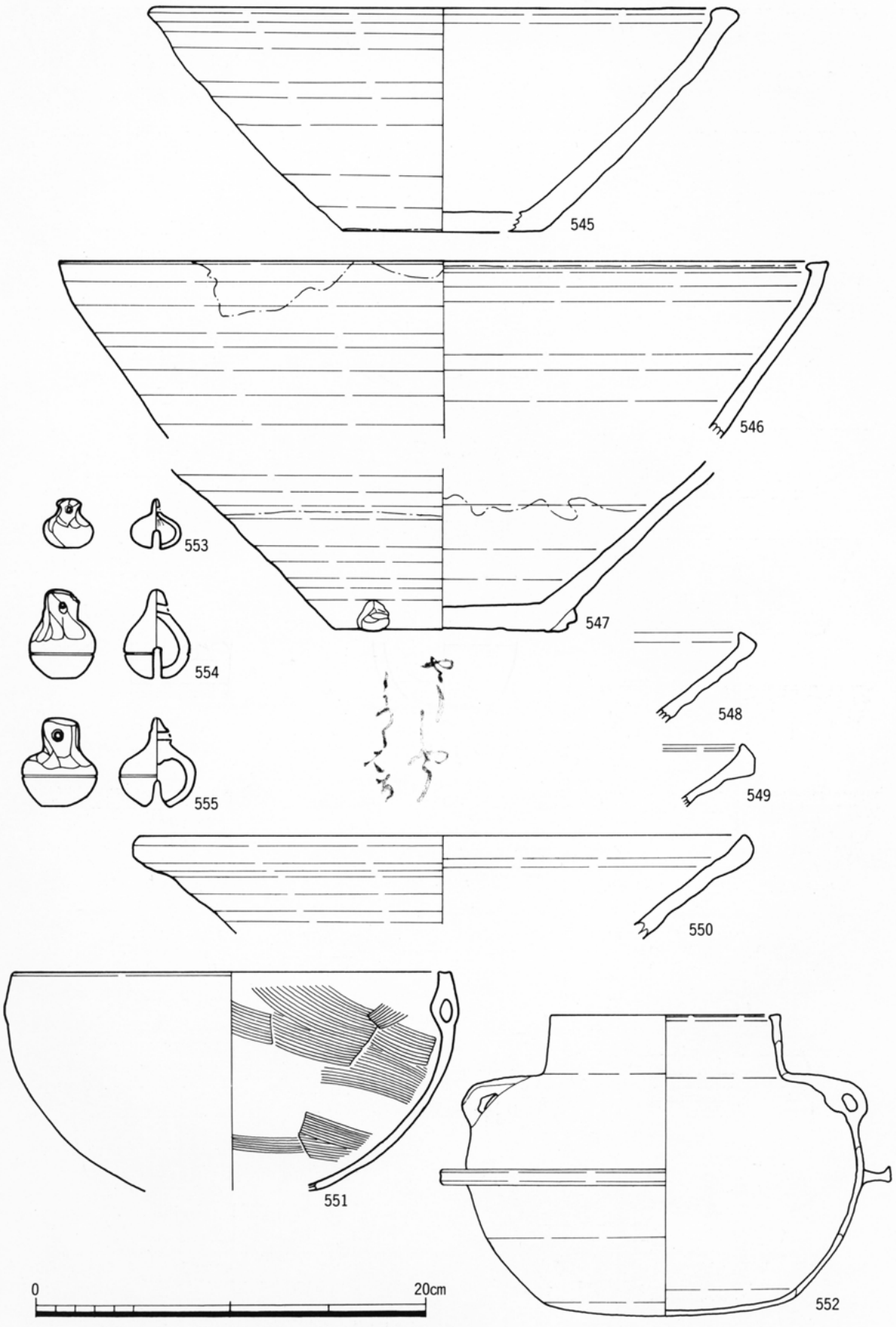
第88図　VI期の遺物(3)

SD03(2)



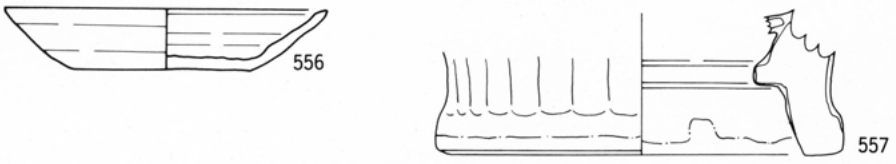
第89図　VI期の遺物(4)

SD03(3)

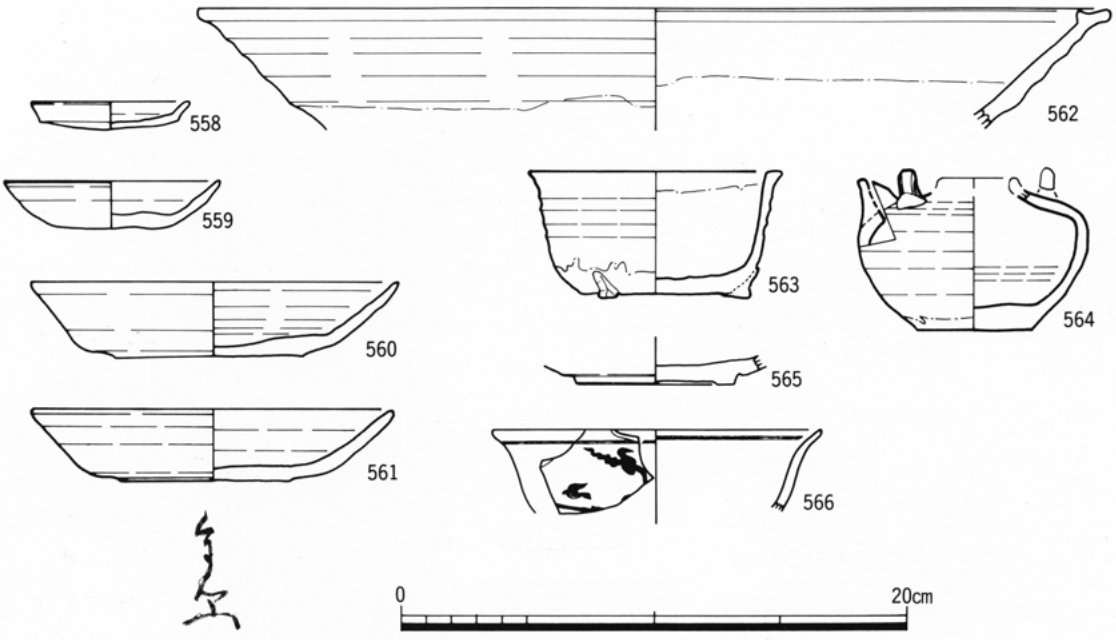


第90図　VI期の遺馬(5)

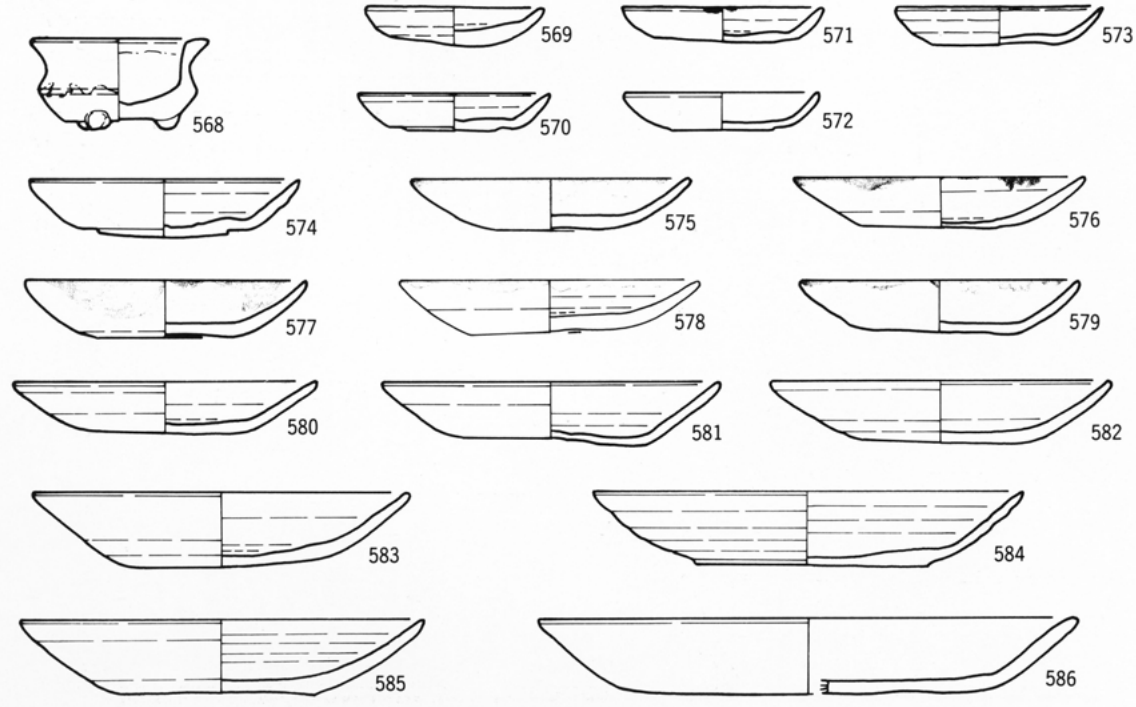
SD04



SD05

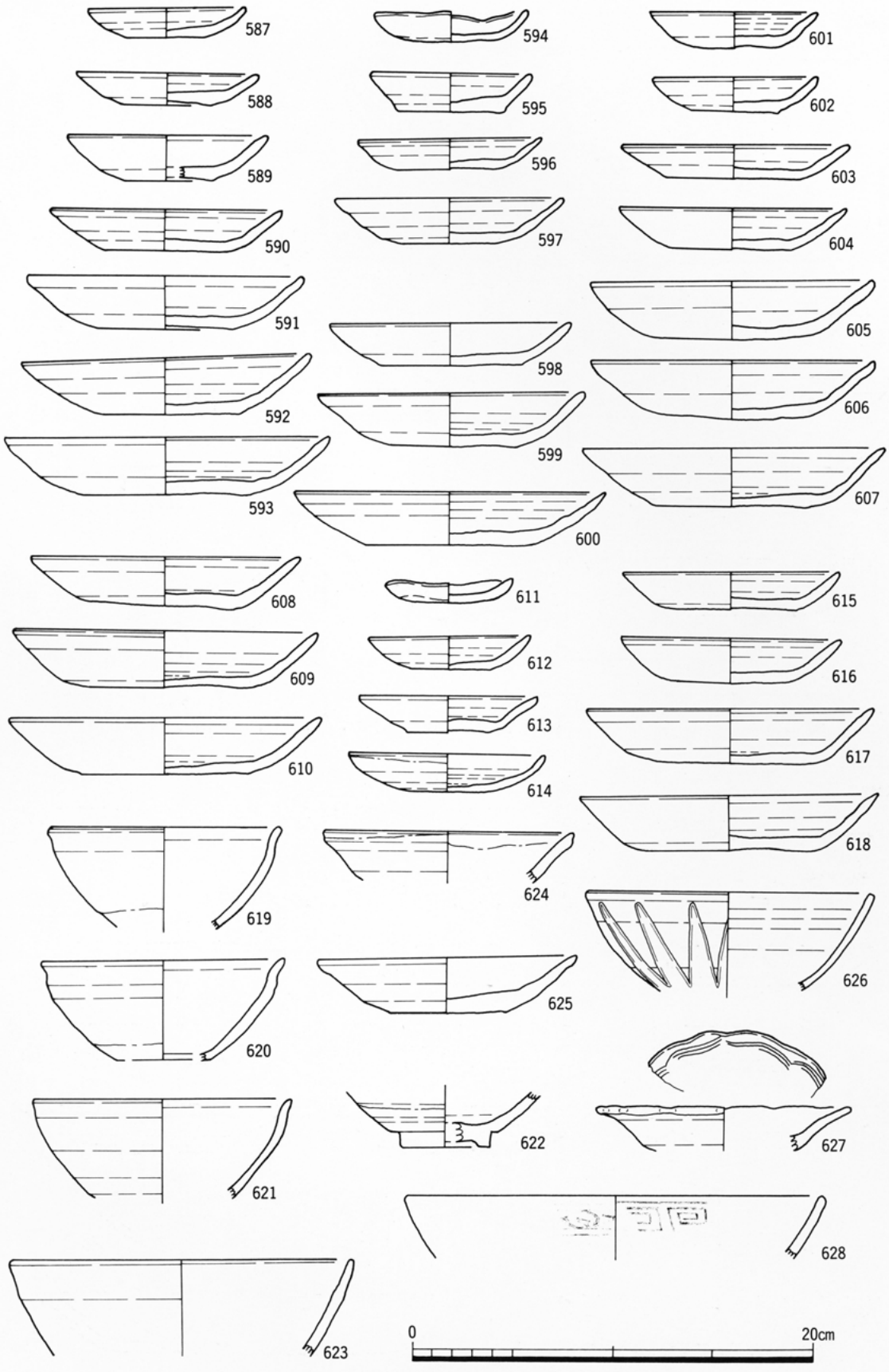


SK03



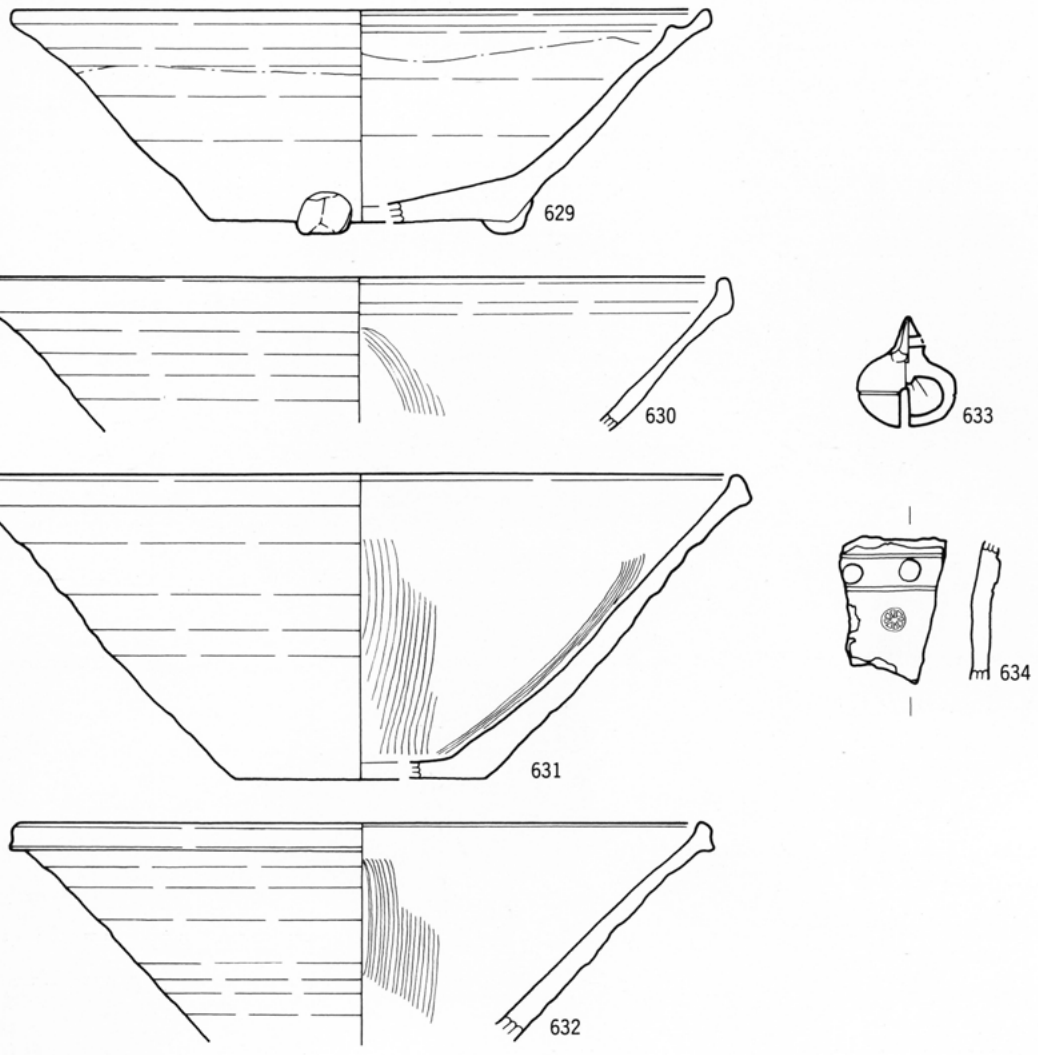
第91図　VI期の遺物(6)

SD06(1)

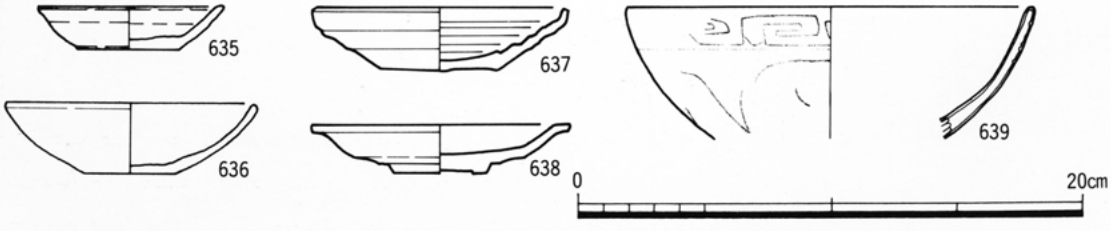


第92図　VI期の遺物(7)

SD06(2)

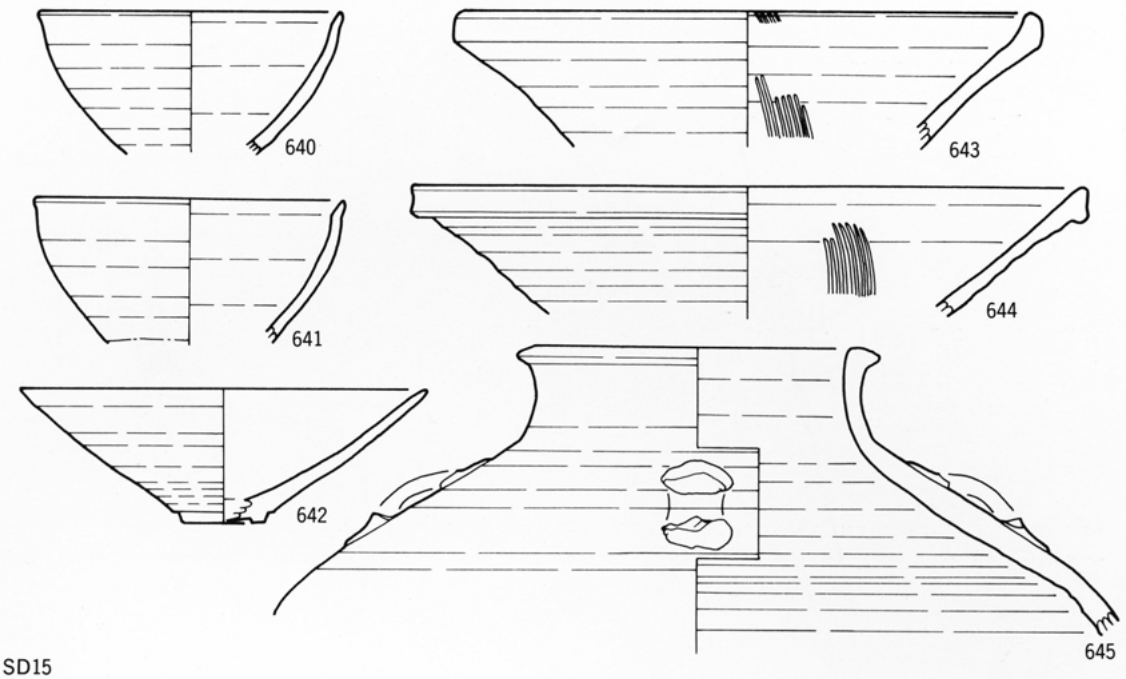


SD07

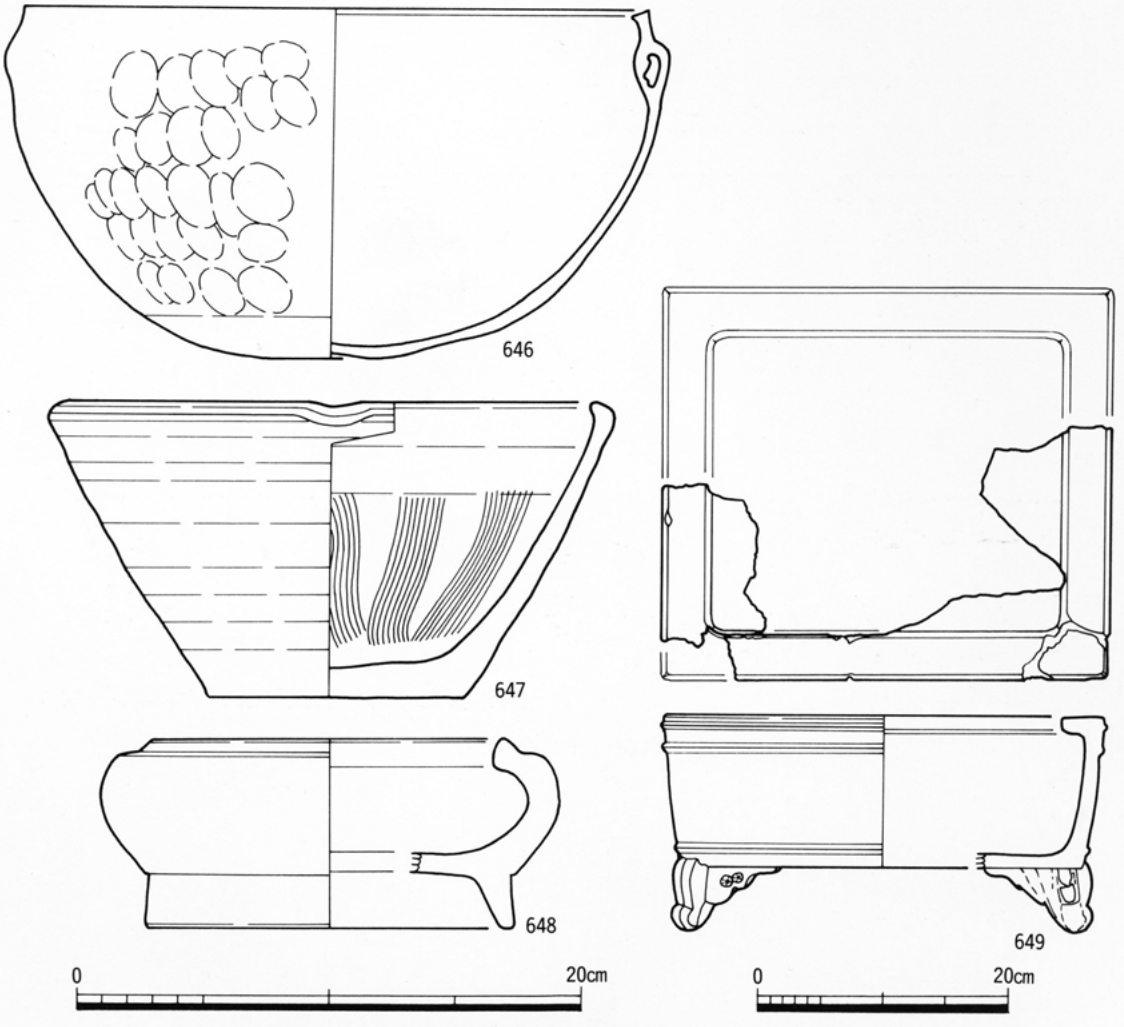


第93図　VI期の遺物(8)

SD19

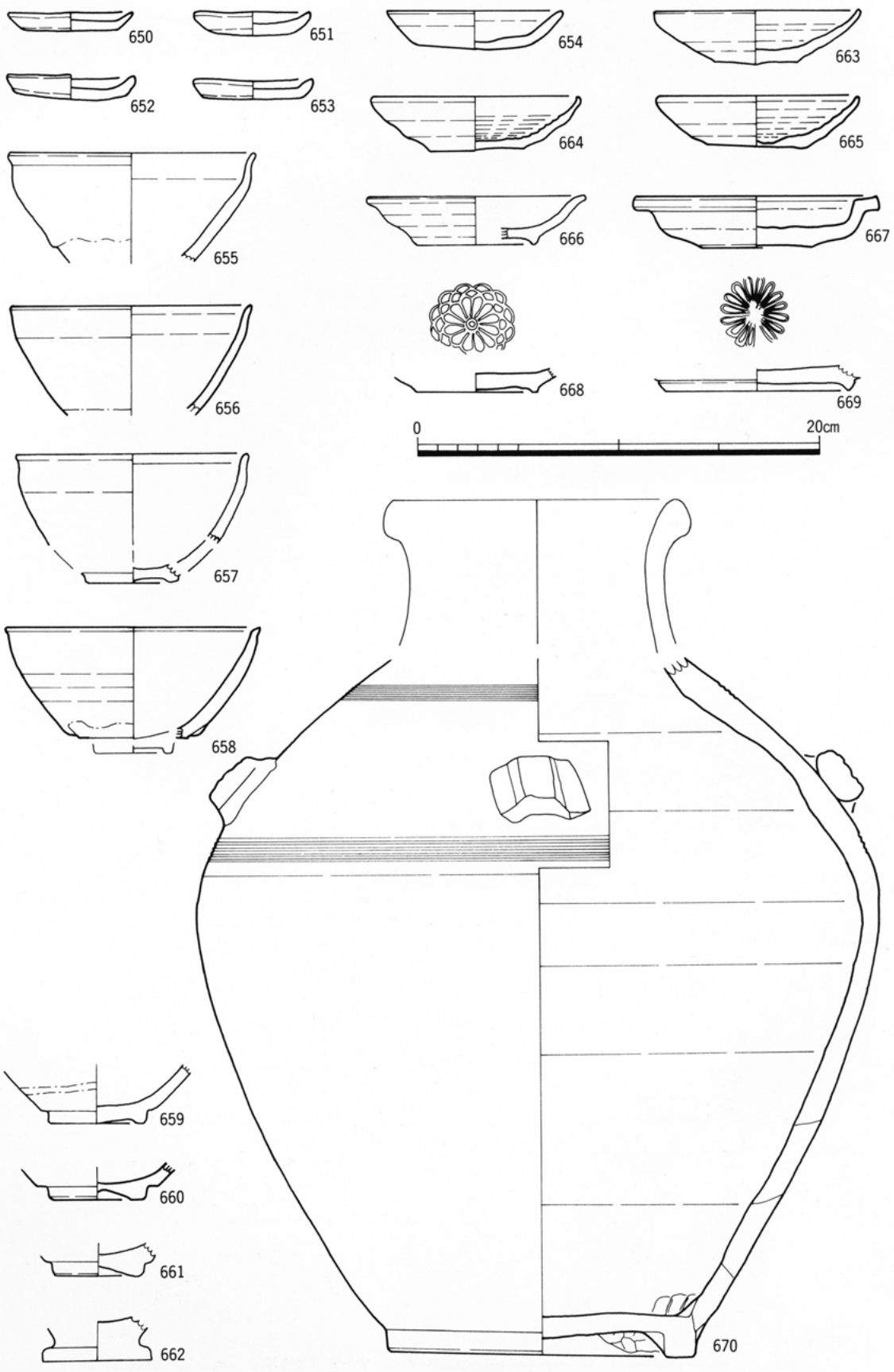


SD15



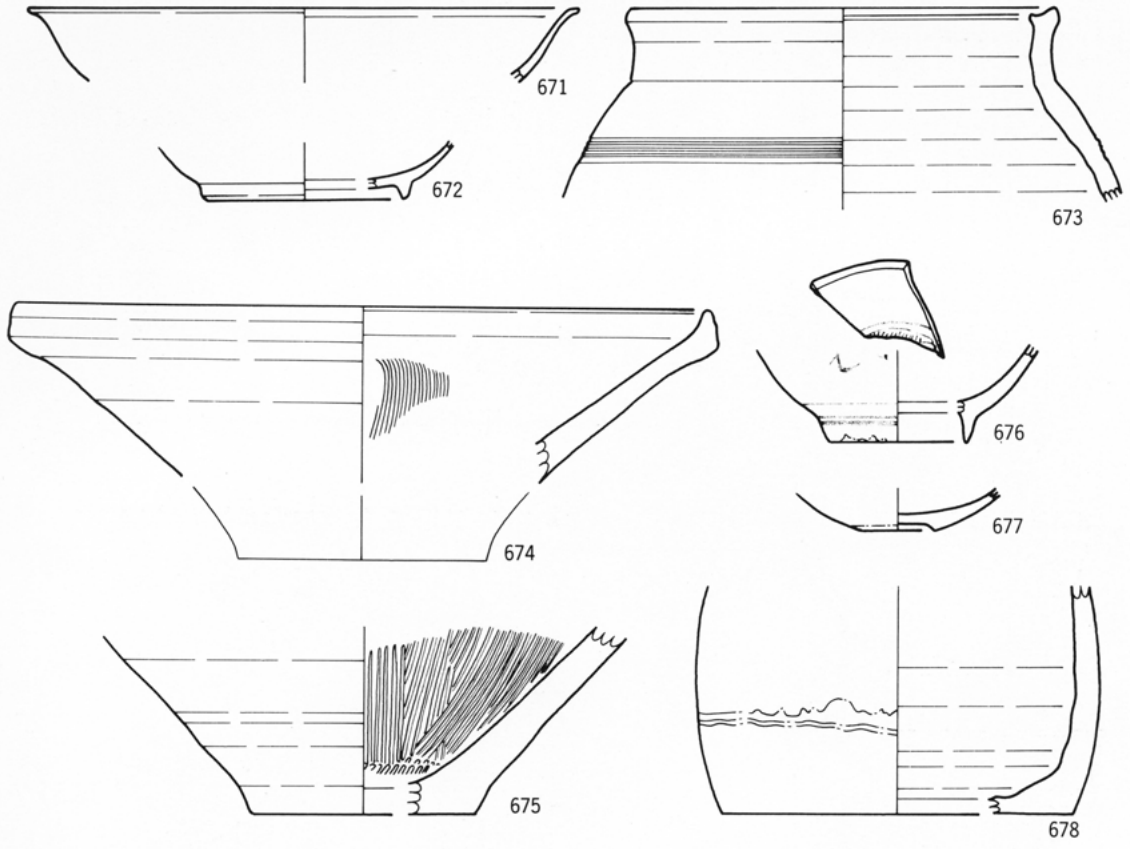
第94図　VI期の遺物(9)

SD08(1)

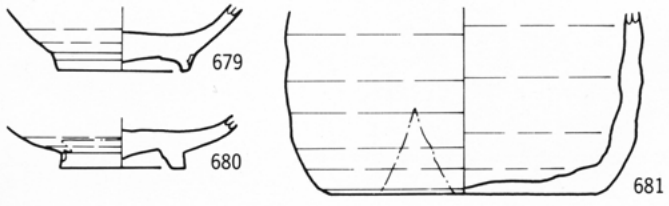


第95図　VI期の遺物(10)

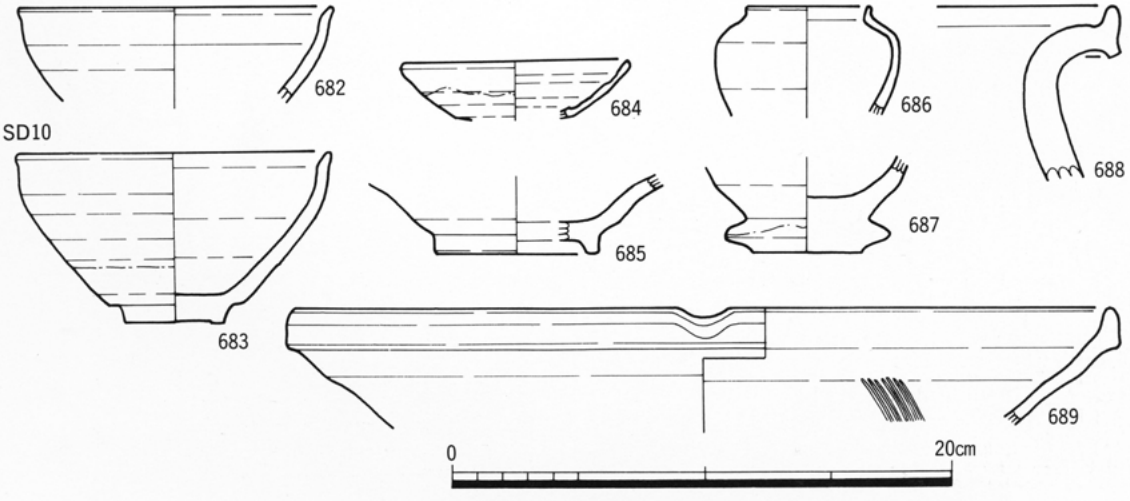
SD08(2)



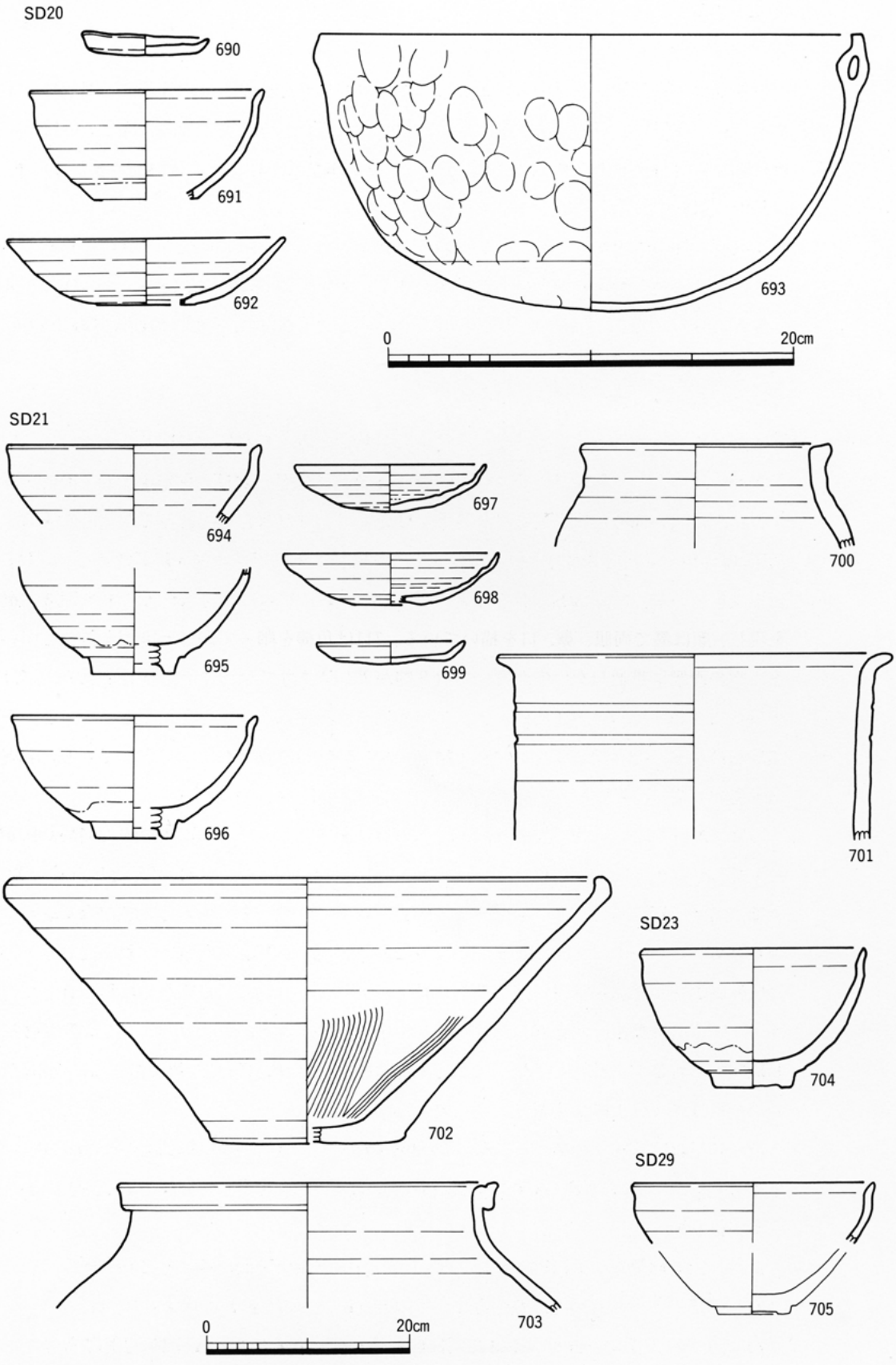
SD09



SD10



第96図　VI期の遺物(11)



第97図　VI期の遺物(12)

(2) 木製品

木製品は、堀や溝、井戸から出土した。とくに本丸内を区画する溝ＳＤ03～06からの出土が多い。器種は、漆椀、曲物桶、折敷、箸、箆、茶筅、下駄、竹箕、竹篭などのほかに呪術関係の資料として人形、刀形、獅子頭、呪符木簡など注目される遺物が含まれている。

ＳＤ01（第99図、706・707）

本丸西の外堀の中からは僅かに２点のみ木製品が出土した。706は高さ　cmの木彫りの地蔵菩薩像で、唇と台座の蓮弁の一部に朱が残る。背中の中央に一孔がある。千体仏の一体と考えられる。707は漆椀。高台が高く、全体に大振り。外面は黒漆、内面は朱漆を塗る。紋様は、蜻蛉と檜扇が朱漆で描かれている。

ＳＤ03（第99図～第102図、708～770）

本丸内の区画を機能として持つこの溝からは非常に多くの木製品が出土した。

708～712は人形と推定できるもの。708は手足はなく頭部と胴部の区別もない。前面のみ平滑に削り頭頂部と下端を削っている。顔は目・鼻・口が傷をつけたところに墨で描く。709は薄い板の頂部と頸部を切れ込みを入れている。手足や顔の表現は確認できない。下端は折損している。710は709よりやや大きな物で薄い板に切れ込みを入れることで頭胸、腰を現し、顔は墨で両眼、鼻、口を描いている。711は角棒を削って頭部と胸部を区別している。胸の両側に貫通しない穴が開いており腕が差し込まれていたことが推定される。脚は表現されていない。削って両眼・鼻・口を表現し、顔を朱に、頭部を黒く塗っている。下端は鋸挽きし、雑な面取りを施す。下端中央の穴に竹の細い棒が折れて残っている。玩具の可能性も高い。712はかなり大型で角材を切っている。顔の表現はない。

713は獅子頭である。頭髪と両眼、鼻の穴を墨で表現している。両耳の位置に斜めに穴があいており、竹ひごの芯を持つ耳が差し込まれていたはずである。顎は頭部とは別造りで、頭部左側から顎の基部の穴に貫通させ、頭部左側まで竹ひごを通すことで顎が動くように作られている。基部の軸穴より僅かに後方に顎の下側から貫通しない穴が開いており、ここに竹ひごを差し込み上下に押すと顎が動く構造になっている。頭部後方は鋸挽きしてあり、この中央には小孔があり、竹ひごが穴の中に残っている。したがって、この獅子頭は頭部後方の竹ひごを保持して使用したと考えられる。714は獅子頭の顎部である。715は朱と黒で虎皮のような紋様を描く。玩具の一部か。

716～718は呪符木簡である。716は途中で折損しているが、いずれも頭部を斜めに削り、下端を丸く削った薄い板に呪句を記したもの。以点の下の梵字が異なるだけで、他は同じ。病気回復を願う呪句らしい。

719～722も頭部を斜めに削ってある薄い板。719、722は下端が折損しているが、丸くえぐれが確認でき、へらの可能性がある。719の片面には斜格子状の細線が刻まれている。

723は刀形。刃部の一部がなくまた柄部が折損しているので全長は不明。丁寧な作りである。玩具の可能性もある。724～726はへら。724・725は薄手で刃部も薄く削られている。

726は厚手で柄部に上下に貫通する１孔がある。723～732もへら状木製品である。

715～739はほぞや小孔がある小さい部材で鳥籠もしくは虫かごの一部と考えられよう。

740・741は用途不明。742は栓か。

743・744は歯を差し込む形式の、いわゆる露卯下駄。どちらも構造はまったく同じ。

746は漆椀。高台は磨滅。外側は黒漆、内面と鶴と亀の紋様は朱漆。746～748は漆塗りの皿。746は内外面ともに黒漆塗りで、外面に朱漆で亀を描く。748も内外面共に黒漆塗りで、内面に朱漆で紋様を描く。747は内面が朱漆、外面が黒漆塗り。

749は厚手の円盤状で、中心に穴が開く。外縁部と両面に黒漆が塗られる。用途不明。

750はしゃもじ、751・752は箸。753は櫛。754・755は茶筅。756は柄杓。

757は黒漆りの隅切りの大型折敷。758・759は小型の折敷。759には上面に歪んだ円形の圧痕が残る。760も小型の折敷。底板の裏面に大きく細い×印の線が刻まれている。

767は桶の底板。側面に木釘の痕跡が４か所に残る。768は薄い板で、片面にまな板がわりに使用されたらしい細い線が刻まれている。蓋もしくは浅い桶の底板か。

769・770は桶の側板。特に769は釘穴が４カ所残りその下に大きな穴が穿たれている。桶の内側の穴の上方がかなり磨り減っていることから、把手が取れた後、穴を開け外側から網を通しこれを把手の代わりとして使用したものと推測できよう。

ＳＤ04（第102図、771～777）

溝の埋土はシルト質のため余り滞水性を示さず、木製品は少なかった。

771は鳥形。薄い板を鳩のような鳥の輪郭に切ってある。目や翼、足などの表現は見られない。尾羽根が折損している。772は人形。角材を使用し、頭部と胴部とは切り込みを入れて区別している。胴部の両側面に小孔があり、腕がつけられていた跡と推定できる。脚は棒の下端を削って尖らせただけで何も表現されない。頭頂部は意図的な切り残しかどうか不明であるが、髷状に残り、墨で黒く塗られた痕跡が認められる。顔も部分的に墨痕があるものの、明瞭な顔の表現は確認できない。

775は包丁などの柄であろう。丸棒の片側に刃を差し込んだ穴が残る。777は一木造りの下駄である。遺存状態が良くない。

ＳＤ05（第103図、778～790）

土橋を挟んでＳＤ04の東にのびる溝である。大部分は調査区外になるため、調査できたのはごく一部にすぎない。溝の端であること、通路脇であるなどの理由からか、遺物は多く、呪術関係資料と推定される木製品が目立つ。箸、折敷、曲物、羽子板がある。　781は羽子板で片面には墨跡が認められる。両側が破損しているため幅が不明。783は折敷で半分しか残らないが、波のような文様の墨の痕跡が認められる。784はかなり遺存状態が良好な折敷。底板の裏面には３文字が記されている。「天巳酉」カ。巳酉が年号を意味しているならば1489年（延徳２）もしくは1549年（天文18）になる。785はやはり折敷の底板に墨で絵を描いたもの。７頭の馬（牛？）が綱で竹につながれている有様を描いてある。絵馬の類か。786～790は折敷を再利用したもの。折敷の底板を割って、一番は場の広いものにスリ

ットを２本入れ、そこに同様な折敷をわったいたを２枚交差させて差し込み＊状に組み合わせている。大小があり、787のように×の組み合わせのものや790のように一枚多く組み合わせたものがある。787の場合、一枚が抜け落ち、790の場合は一枚の差し込んだ板が割れて移動したもので、原則としては３枚の板を組み合わせたものであろう。他に類例を見ないため用途不明。呪術関係の資料か。

ＳＤ06（第104図、794～801）

これも本丸内部を区画する溝。漆椀、折敷、桶、曲物、下駄などが出土した。

794は漆塗りの皿で、内面を朱漆、外面を黒漆で塗る。高台は無く、体部外面に段がある。795は漆椀。内面を朱、外面を黒漆で塗り、外面に朱漆で扇の紋様を描く。799は折敷の底板で、片面にまな板の代用として使用した痕跡らしい細い線刻が残る。800は小型の曲物容器で珍しく底板も外れずに残っていた。801は刀形と言い得るものか。かなり丁寧に仕上げられたなぎなた形で、刃部の削り方から刀とは異なる。先端が鋭利な刃物で斜めに切断されているが、他の部分とは仕上げが違うため、本来は刃部はさらに長い。796・797は露卯下駄で差し歯を固定するための臍穴の数が異なる。797は歯が一枚残る。

ＳＤ07（第105図、802）

本丸東側の内堀に推定される溝。木製品はほとんど出土しなかった。802は内外面友に黒漆で塗られた皿である。

ＳＤ18（第105図、803～807）

この溝も本丸の区画溝と推定される。人形、下駄などが出土した。803・804は薄い花弁状の板でまったく同形・同大である。用途不明。805は人形。体部にまな板のかわりに使用したらしい切り傷が残り、板を横に並べて接合した際の木釘の跡が残る事から、鍋の蓋か折敷の底板を際利用したものであろう。807は一木造りの下駄。

ＳＥ02（第104図、791～793）

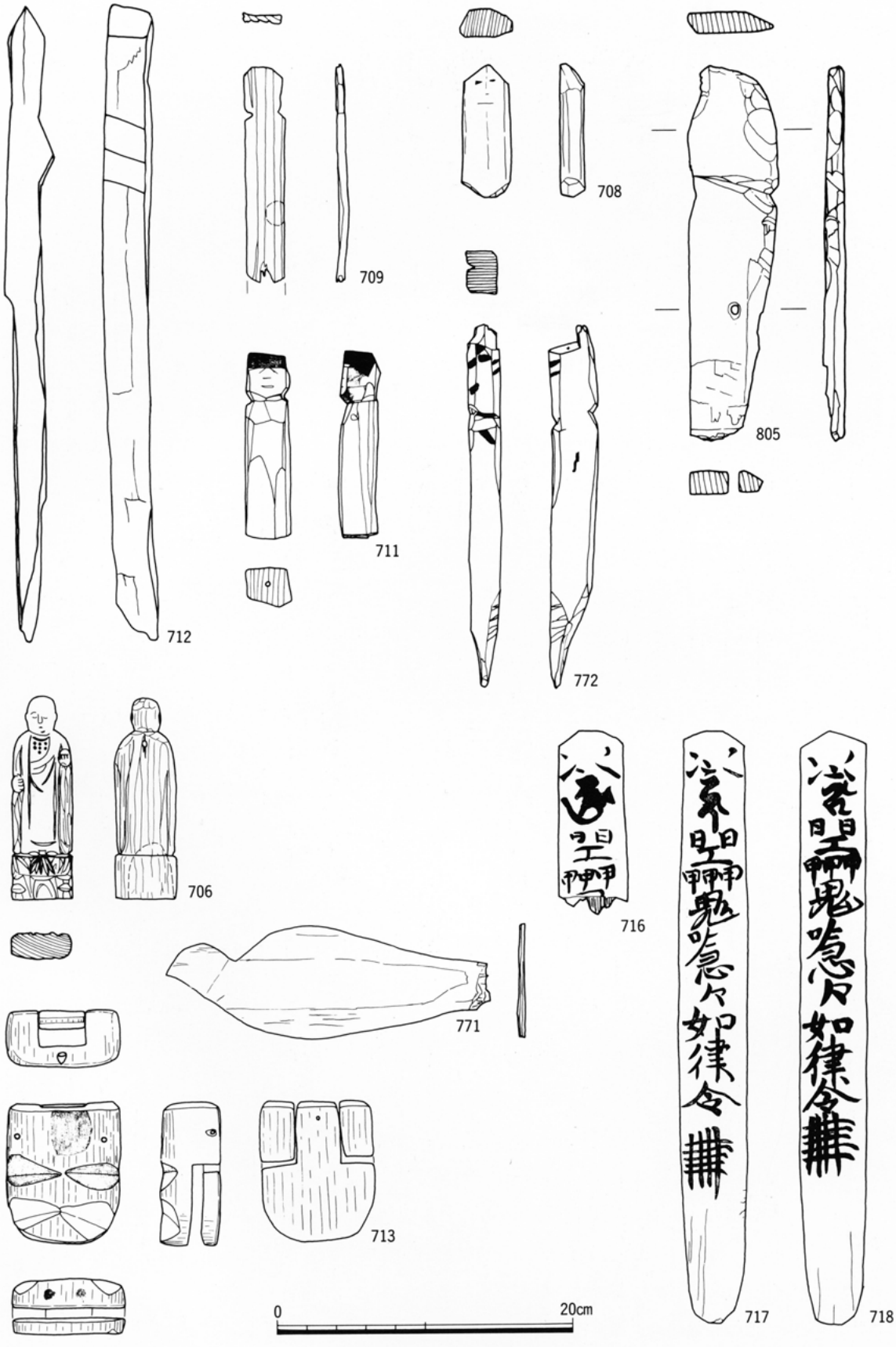
本丸に位置した桶組の井戸で、側板が井戸の廃絶つに際して抜き取られていた。竹のたがとともに791・792の楔や793の曲物の底板が出土した。

(3) 石製品

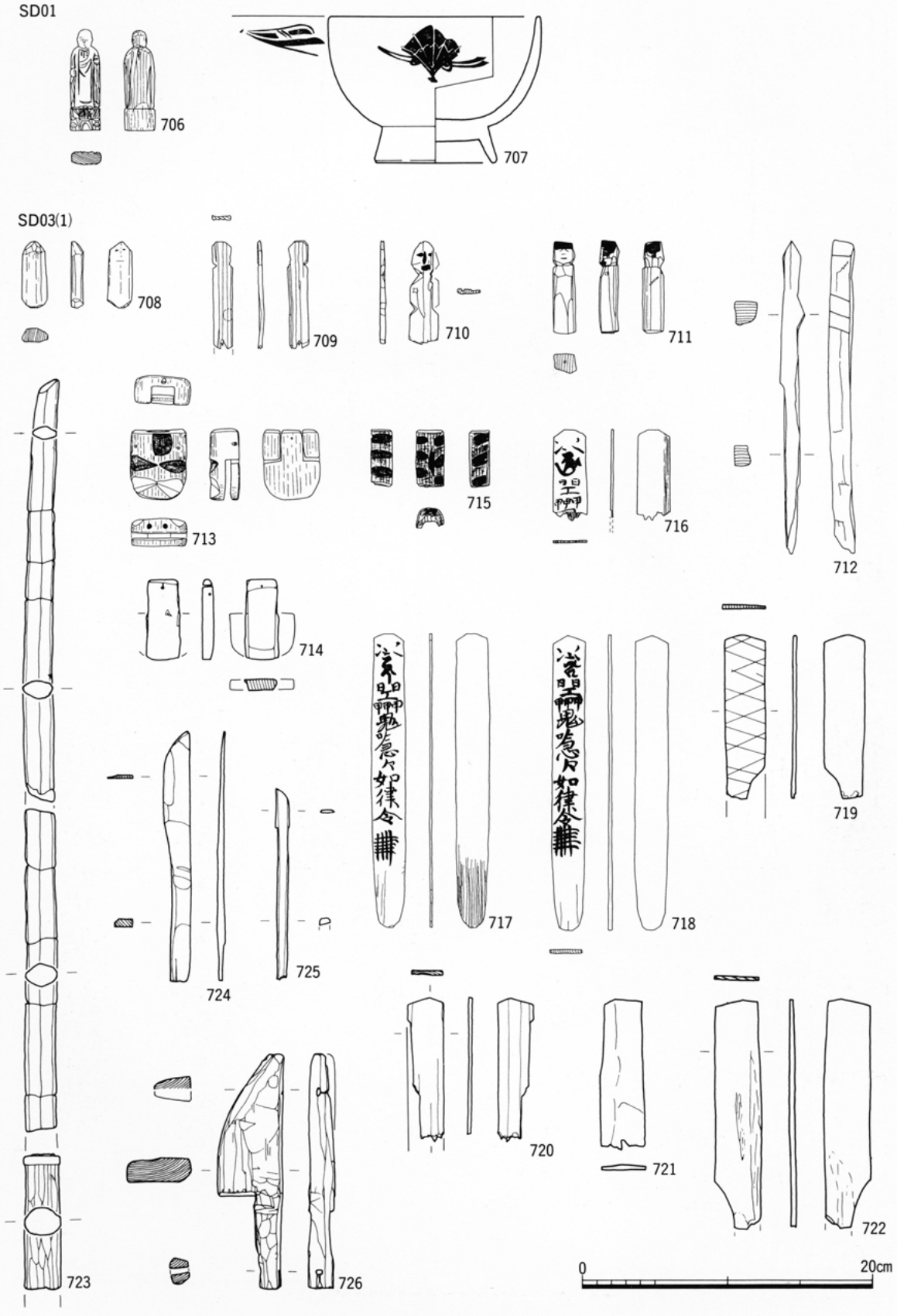
石製品としては砥石、茶臼、ひき臼、五輪塔などが出土した。808と809は砥石で、明黄灰色の粘板岩製の仕上げ砥石である。809の一面には格子状に線刻が認められる。

810は茶臼。SD12出土。直径18.6 ㎝、高さ10.7㎝、上面に直径12.0㎝、深さ1.2㎝の受部があり、中心に貫通する直径2.8㎝の孔があく、側面には把手をさし込むための菱形の孔がある。下面には細い挽目がある。811は石臼。花崗岩製。直径32.0㎝、高さ6.4㎝。上面に直径24.0㎝、深さ2.7㎝の受部がある。全体に茶臼より粗いつくり。

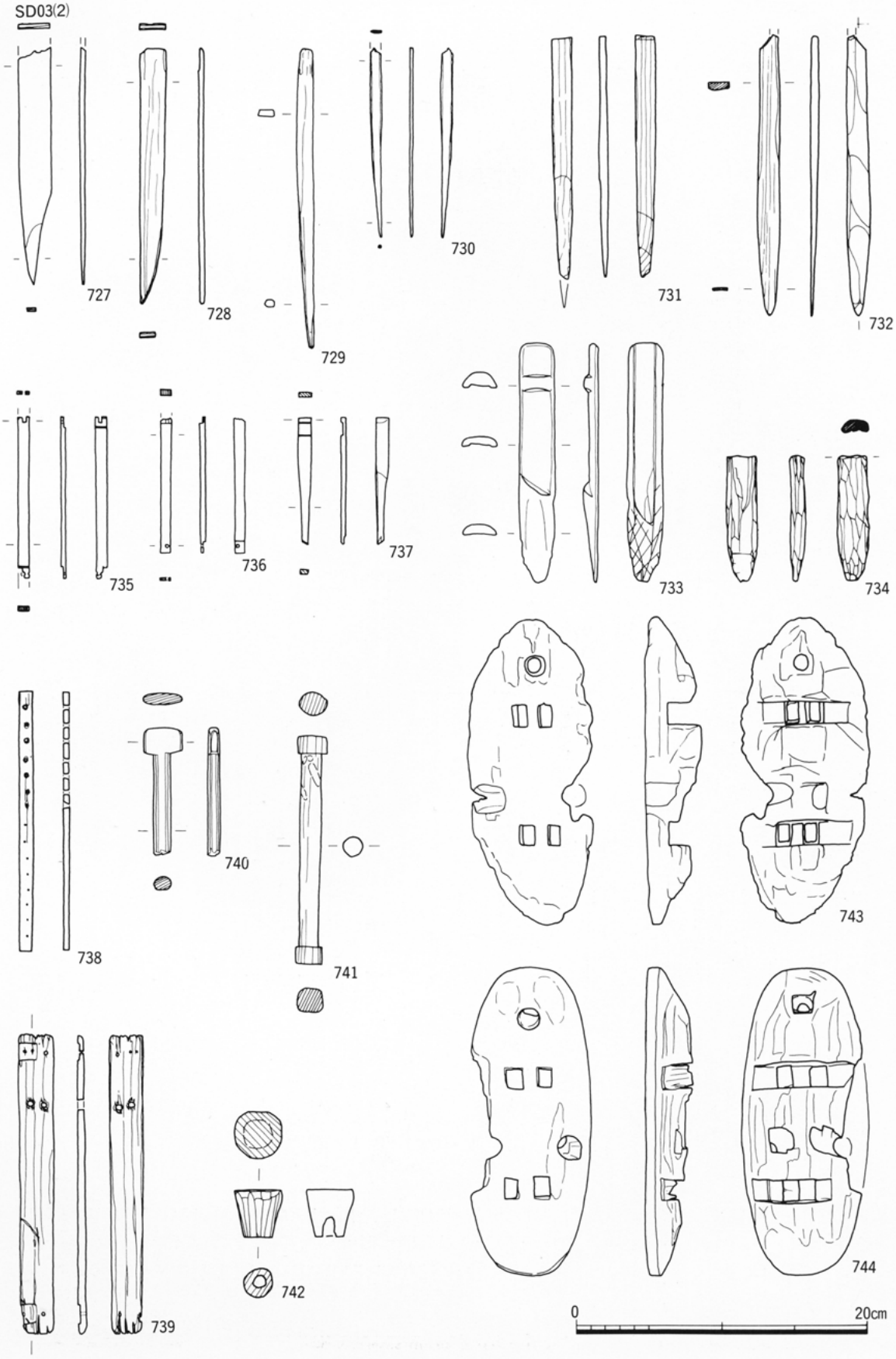
812は五輪塔の火輪。花崗岩製で、表面は火を受けており、損傷が著しい。



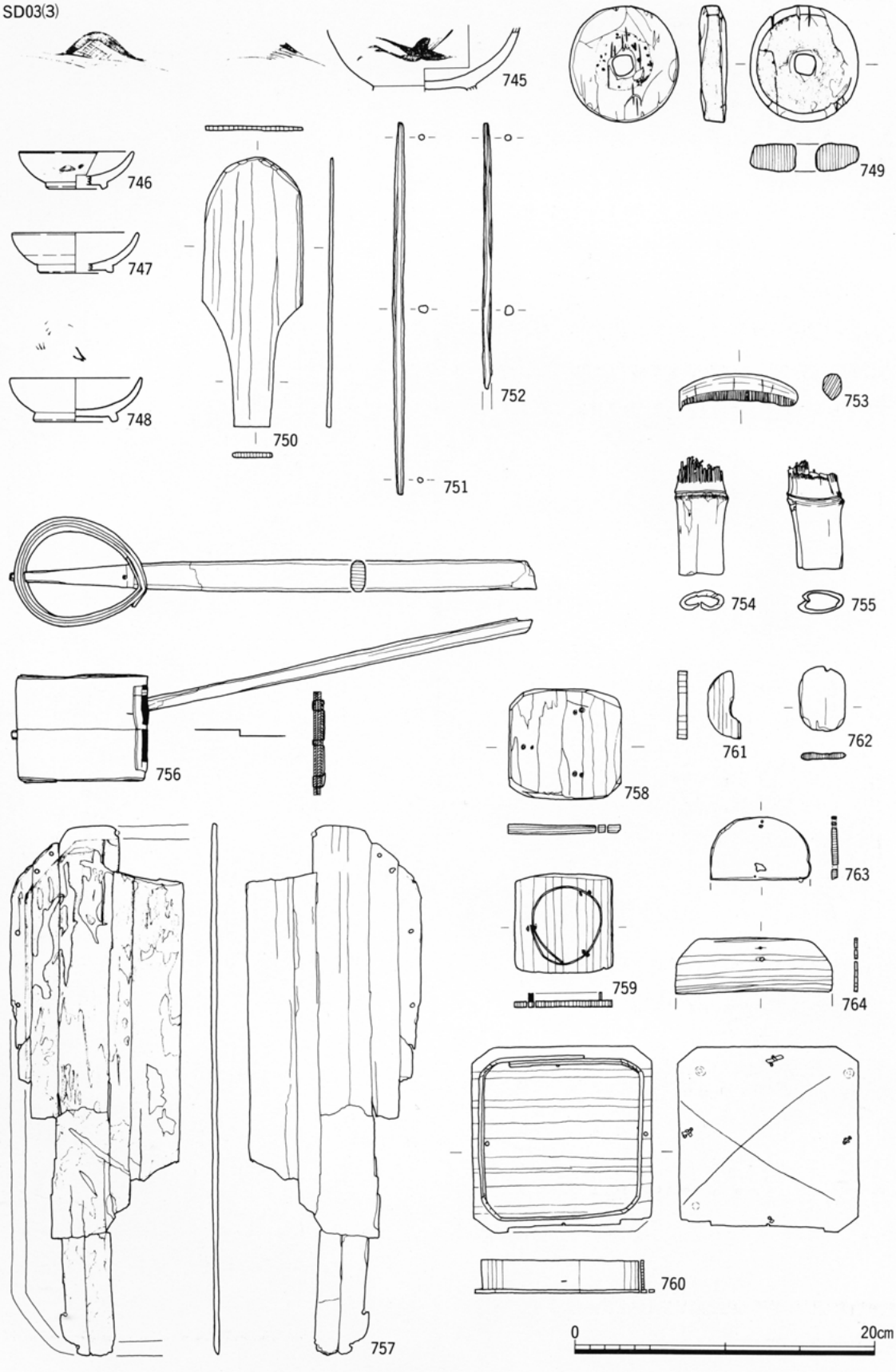
第98図　呪術関係木製品


SD01
706
707
SD03(1)
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
0
20cm

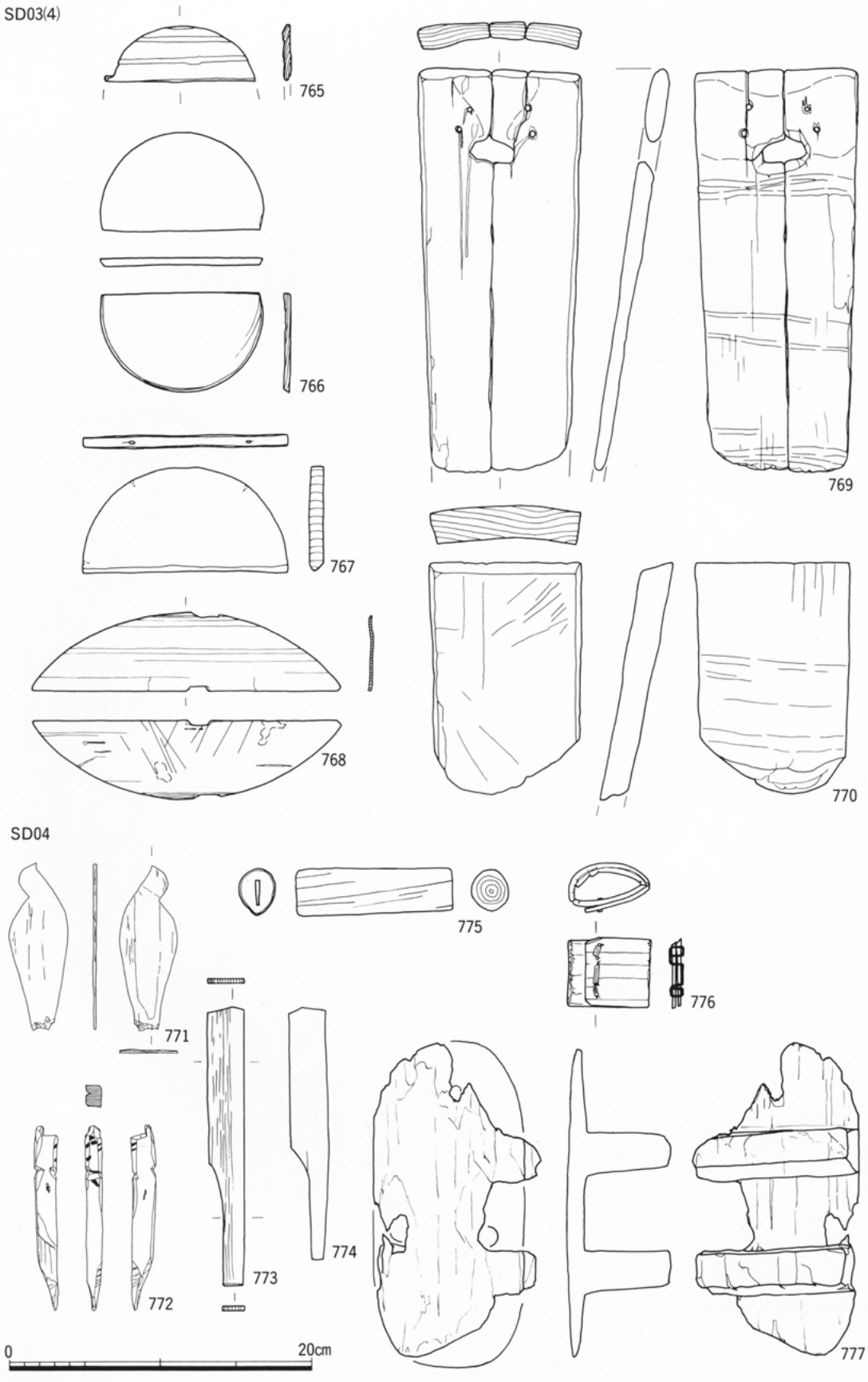
第99図　木製品 (1)


SD03(2)
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
740
741
742
743
744
739
0
20cm

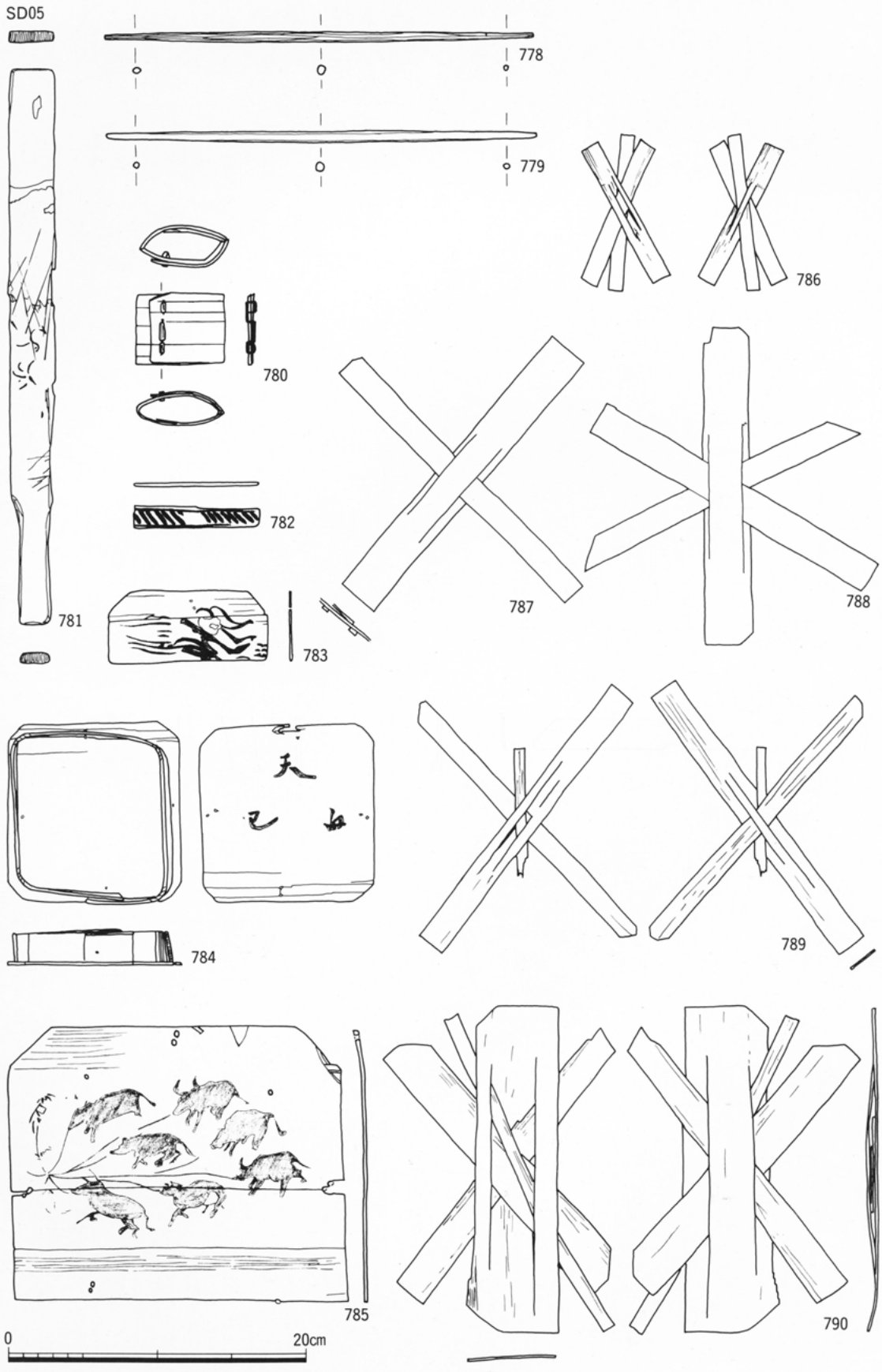
第100図　木製品 (2)


SD03(3)
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
0
20cm

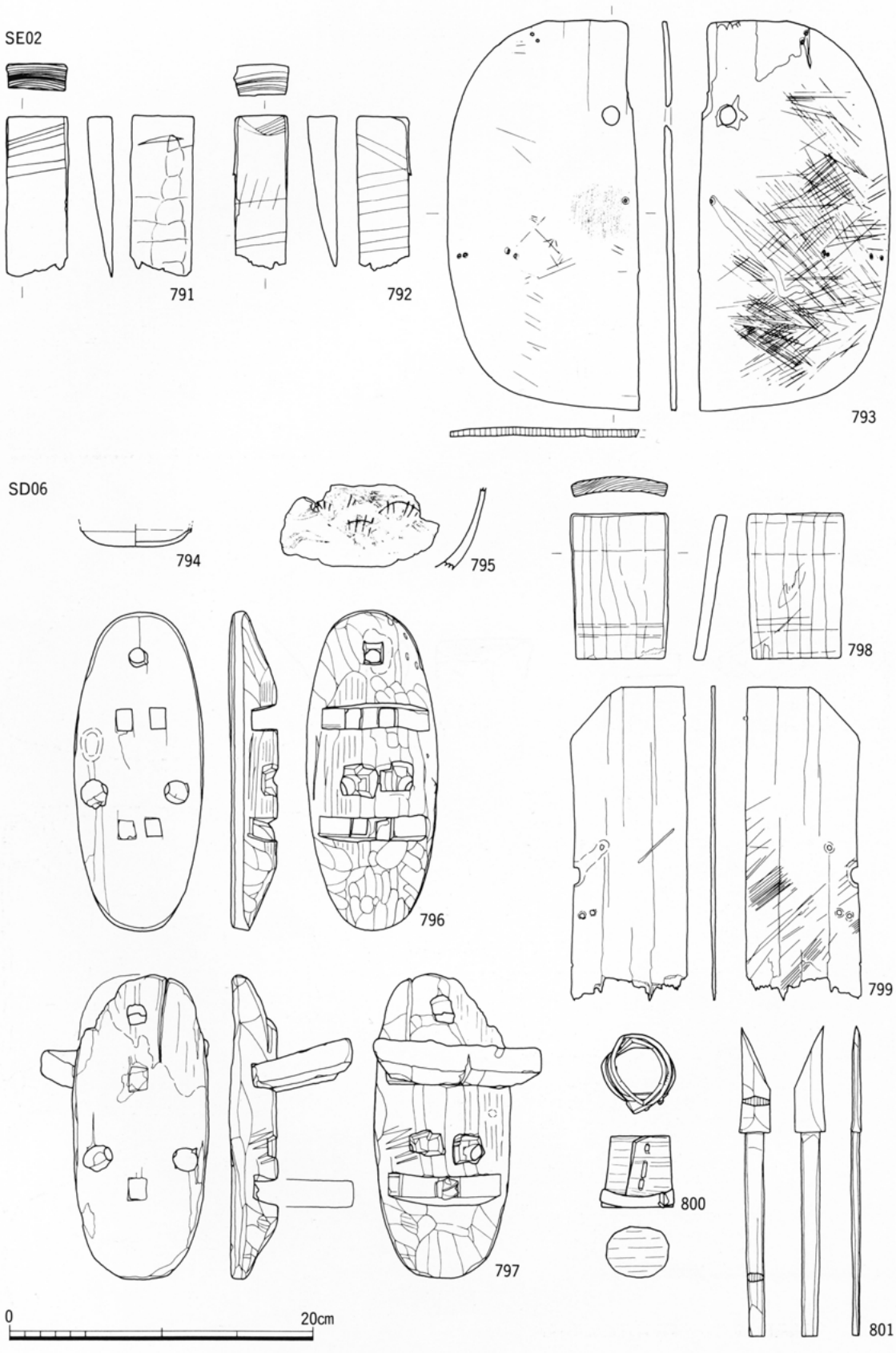
第101図　木製品 (3)


SD03(4)
765
766
767
768
769
770
SD04
771
772
773
774
775
776
777
0
20cm

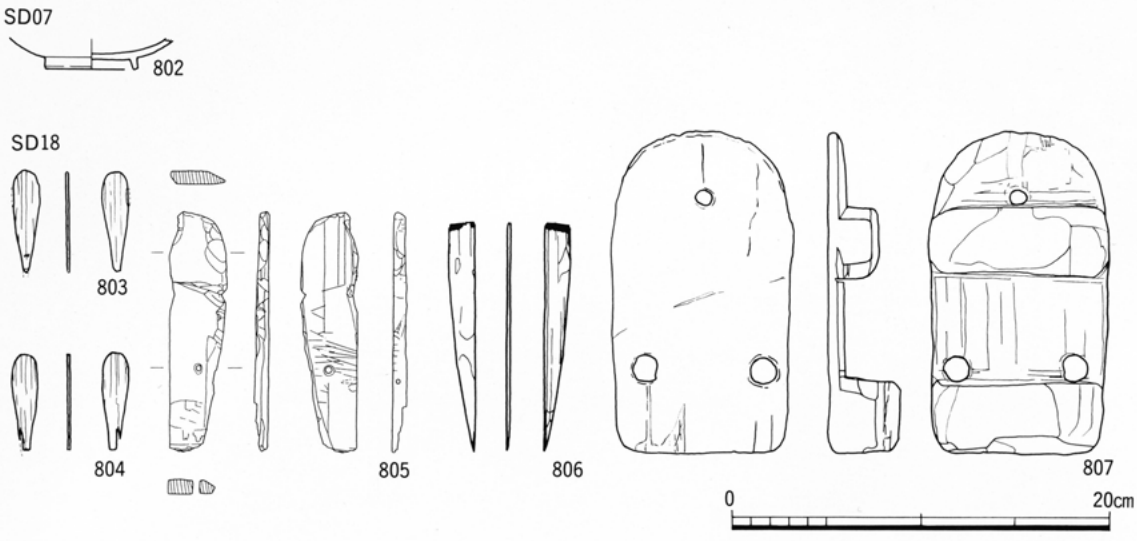
第102図　木製品 (4)

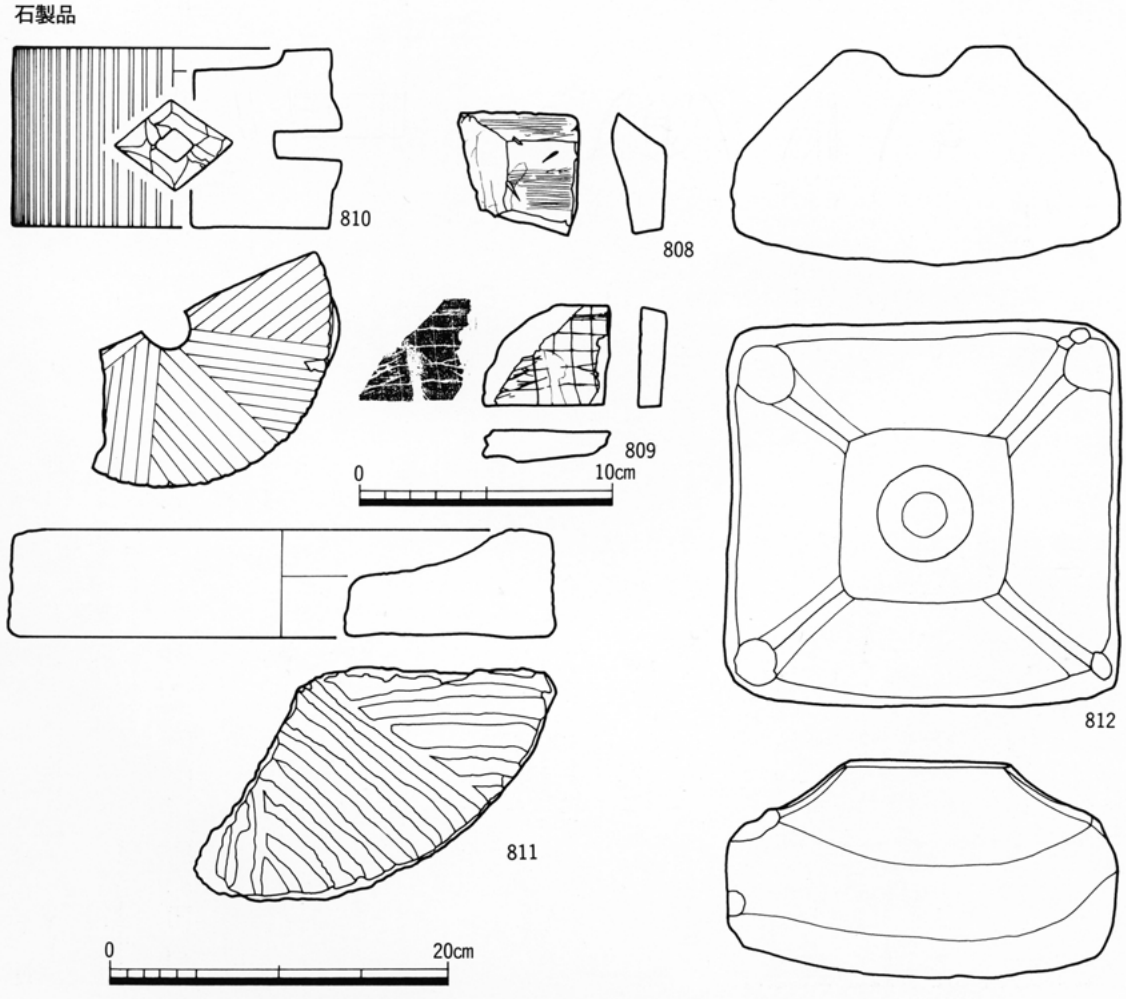


第103図　木製品 (5)



第104図　木製品 (6)





第105図　木製品 (7)、石製品